

川柳塔

昭和六十二年十一月二十五日印刷
昭和六十二年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七三九号



日川協加盟

No. 739

十二月号

秋の叙勲

西尾栞主幹榮譽に輝く

本社主幹西尾栞先生（本名巖）は昭和六十三年度の秋の叙勲で「木杯一組台付」を授与されるご沙汰に浴された。

芸術文化の分野での叙勲は、六十年に亘る川柳界での活動と、貢献によるものであり、まことに慶賀の至りで、心から祝福申し上げます。

先の黒川紫香副主幹の尼崎市文化功労者としての表彰とともに川柳塔社の誇りでもあります。右、報告致します。

川柳塔社

料理がいきる
辛口の本格派



伝統の味を贈りものに……

菊正宗

日本酒で乾杯！

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

受章

西尾 葉

『川柳塔』誌、昭和六十一年の二月号の巻頭言に「朗報」という題で、日本川柳協会理事長藤島茶六氏が勲五等双光旭日章の光栄に輝やかれたことを書いて、川柳界にとってこれほど心強いことはない、しかも官公署の何十年勤務という通りいっぺんの受章でなく、川柳一本で受けられた洵に貴い勲章であると、私は川柳浮上を大変欣んだのであったが……。

十一月三日の文化の日の秋の叙勲受章者の欄に、またまた木杯一組台付の行に、川柳協会理事として私の名が出ていたので眼を瞠ったのである。

もとより私は受章する器ではないことは百も承知であるし、私よりもっと先輩各位が沢山おられるのにと思ったが、日本川柳協会の推薦ということ、年齢も八十歳ということ、軽犯罪を犯す心配もないというかと、受章の栄に浴したのだろうという話を聞いた。

六十一年に茶六氏が道をつけられ、昨年、今年と続いて受章した軌道はずすことなく、来年も再来年も、川柳作家に受章あらんことを切望してやまないものである。

顧みて、この度の私の受章は全国川柳作家のおかげであり、最年長者が宴席で乾杯の音頭をとるようなもので、皆さまの代表として頂戴したものと深く感銘している。

一筆もって全国川柳作家の皆々様に篤く御礼を申上げる次第である。

近作

朗報や山茶花咲いた今朝の晴
家中で見る新聞の受章欄
コスモスや祝電のベル鳴り止まず



座右の句

半歩だけ先に歩いて肩を貸す

私の句

いただいた生命に余生などはない

(紫香)

乾 喜与志

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

受章	西尾 葉	(1)
長所と短所	野村太茂津	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 葉	(4)
自選集	東野 大八	(31)
■川柳太平記(127) 川柳の群像 不二田一三夫	東野 大八	(34)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	田中光夫	(36)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	阿達義雄	(38)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	黒川紫香	(40)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	黒川紫香	(44)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	岩本雀踊子	(43)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	井上喜醉	(65)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	橘高薫風	(62)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	秀句鑑賞	
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	同人吟	
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	水煙抄	
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	水煙抄	
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十八丁〜三十九丁)	愛染帖	

長所と短所

野村 太茂津

一九八八年十二月、今年の反省。私のメモ帖から拾ってみました。

人間は物事を正確に見ているようで、色眼鏡で見ている。学者というものは、学問をすればするほど色眼鏡がきつくなって、その時代を支配する大先生の目で、ものごとを見て判断してしまふものである。その目から外れると、学界から外されてしまふ(某哲学者)。

そのような人が、川柳のことを述べるとき、某小説家の川柳談義をちよつと読んだ程度の理解で川柳を批判する。

世の中に正義は一つしかなく、自分だけがその正義の味方だ、という考えほど始末に悪いものはない。

現川柳人?の中にも、前述のような御仁はいるのか(私は、この人を真の川柳人とは認めていないが)。お閑なら一度見回してほしい。

他所の句会に来て、まだ個性も熟していないひとを催眠術をかけるように惑わし、誘い込む。誘い込まれた夢遊病者?は、土台が皆無だから、わけのわからん心象を並べる。誘

〈女性コーナー〉茴香の花……………	八木千代選 ……	(66)
句評リレー 有働芳仙・堀端三男・宮西弥生・本田恵二朗……………	西山 幸 ……	(68)
なぜか鹿野……………	竹内 紫 鏑 ……	(72)
言いまわしの個性(六) 自分史に連れ添う語彙……………	田中正坊／山崎君子／赤川菊野／春城年代／春城武庫坊	(74)
中国吟行の旅(続)……………	阿 萬 萬 的 ……	(76)
初歩教室……………	広井季柳子選 ……	(80)
「癖」……………	園山多賀子選 ……	(82)
一路集「岸」……………	谷 信 夫 選 ……	(82)
「目標」……………	柳界展望……………	(83)
本社十一月句会……………	各地柳壇(佳句地10選／池 森子)……………	(84)
■ 12月各地句会案内 103	■ 編集後記 105	

座右の句

器の中に神様が居る温いめし

私の句

逆立ちをすると約束忘れそう

(幸)

田村 きみ子



い込んだ方も手を焼いている。面と向かって駄目を出せないでいる。夢遊しているのだから、言っても無駄だと諦めているようだ。前述の学者も、長所と短所を一度に見ることが出来ない。長所が見えると、短所が見えなくなり、短所(欠点)が見えると、長所(利点)が見えなくなる。

これは、夫婦や友人や親子の関係でも同じで、一面しか見えないのでは、人間関係もビジネスもうまくゆかない。

長所と短所の両方を見るためには、どうしたらよいか、まず長所は何か、短所はどこかを別々に見ることである。自分自身を反省する場合でも、欠点、利点を比較熟慮する場合も同じである。

その利点を最大限に駆使して、何かを始めても、きょうは成功した、うまくいったという日は数えるほどしかない。あの表現は拙かった、この表現は心配りが足りなかった、と反省して見直す怖くなってくる。

失敗連続の記録である。失敗をして立ち直ったときに、その人は新しい人になっている。失敗を失敗として明快に認めるところから人間は前へ進むことが出来るのだろうか、相変らず何かへまなことをやっては、自ら口をぬぐってすませているか、胡麻化している程度だともいえようが、実のところ、失敗すると少し賢くなる。来年こそどうぞ。



西尾 葉選

美禰市 安平次 弘道

共稼ぎ夫になじむフライパン

ふところ手無策の策にある活路

有刺鉄線優越感捨て給え

家計簿に図書費が増えて秋が行く

石ころでもよし未知数に賭けてみる

妻も子ももうこの指に止らない

米子市 林 瑞枝

先達のきやしやな右手に招かれて

花芒 小指に燃えた過去があり

初恋と巡り会うのはコメディアン

ときどきは肺に緑の野を見せる

ショートカットで自由獲得したつもり

暗誦番号6が9とも見えてくる

米子市 菅 井 とも子

二重橋の前で祈って来た帽子

車椅子に乗って視界を低くする

それからは皿が割れても気が減入る

少しずつ荷を軽くして秋の道

娘の声が亡妻に似て来てあわててる

千匹のオニも白髪がふえました

松江市 舟 木 与根一

五藏六腑丈夫で恐い物忘れ

注射より血圧計がいやになる

我儘を直す気がない体重計

余生とは銭にはならぬ予定表

性格の不一致ゼニのことらしい

嫁貰うのもライバルに先越され

松原市 谷 垣 史 好

天皇陛下二重体(二句)

こんな際夫婦の夜も自粛だぞ

肩の荷をおろすと肩が軽すぎて

楯円球より扱いにくいのは女
肩書のわりにこの人誤字当て字
役所にも話せば分る人がいる
ホップステップジャンプで足をくじいたり

尼崎市 春城 武庫坊

中国旅遊

銀輪の一群北京躍動す

(北京)

天安門上覇者のまなこで北京見る

石仏の傷に王朝興亡史

(洛陽)

裸灯並んで秋天月餅よく売れる

楊貴妃のヌードが目立つ絵画店 (西安)

地下軍団三千年を守り抜く

和歌山市 西山 幸

冗談が過ぎて火が炎になってくる

合わせ鏡でノラを捉まえようとする

留守番のさむい女が役どころ

明朝も覚めるつもりノベル時計

言い訳に架空の人を拵える

続編は少しあそびを書き足そう

和歌山市 福本英子

秋霖の記帳の列へ黙々と

朴訥の言い訳汗を信じよう

お先にどうぞ角曲つたらネズミとり

十日余り眼帯でいる曼珠沙華

両方の目で見える空は秋の空

コンバインで鍛えた喉をカラオケへ

八尾市 高杉鬼遊
戦場を駆ける未来も過去もない
親も子も孫も馴染みの町の医者
溝掃除する日も化粧して出かけ
ハープ弾く女とお話できますか
萩と露いつか他人でないふたり
越の寒梅するめの足で飲んでみる

桜井市 岩本雀踊子

旅に出るデンデン虫は雨男
おびんずる私頭悪るおます
男という身勝手になる科白
独身貴族みそラーメンを食べている
吹きだまり生きてく悲しい詩がある
足跡に一期一会の水だまり

兵庫県 遠山可住

カタカナが混じりポイント見失い
笑顔にも主義にも化粧して生きる
天平の屋根がすらりと力む秋
仲のよい夫婦にされている写真
猫の目が野性に還る秋の風
一泊の朝を株価に目を通す

岡山県 嘉数兆代賀

巻き返す太鼓はデンデンと鳴る
雑木林の風は庶民の彩で吹く
生きざまを貫き通し木の葉散る
女史多忙マンガの本で子が育つ

計算の上手な夫でやりにくい
一人旅傘の滴を道連れに

大阪市 西出楓 楽

小春日へ自縛の縄はゆるめよう

エアコン大きく部屋で小さな嘘ゆるす

水虫の元気体調ものがたる

お世辞きく方がおちいる自己嫌悪

三猿で居たらしもつれていた話

ユニークと言つとく下手と言えぬから

弘前市 波多野 五楽庵

涙涸れてパントマイムが上手くなる

引退か老眼鏡を二度も換え

吾が子とも知らず野良犬すれちがい

招待を詰め過ぎて胃散過多

客が来て少し優雅に見える妻

革椅子の貧乏ゆすり直らない

岡山市 土居 耕花

老妻と話ある様でない様で

向日葵の北へ傾くノイローゼ

無重力のテストは逢うた時にする

広辞苑繰ればエッチと出ています

繃帯をもっと巻いてよ老災だ

塋坊主お前も知恵がなさそう

島根県 西村 早苗

忘れると雨の日記にそれっだけ

ちよつと酔いそして甘えるので好きさ

スケジュール崩せぬ土曜日誘い
チロチロと虫が忘れろと言うた

意地悪を言うて私の嫉妬心

メーカーを変えても皺が出る化粧

平田市 久家 代仕男

松茸は高値浮いてる松茸麩

舗装してからの並木が疲れるはて

瓢箪の腰おつとりと夕暮れる

焦げ飯の味は知らない現代っ子

蝙蝠にすれば満月邪魔なもの

生き難きこの世ざりとて去り難し

竹原市 小島 蘭幸

妻の掌をするりとぬけて飲んで

亡父の時計と僕の時計が合うている

料亭で松茸食べたことがある

大らかな夫婦になつて夕陽

蜘蛛の巣の蜘蛛にあこがれたりしない

雄カマキリの顎に淋しさだけがある

松江市 柳 楽鶴丸

アンバランスな呑気者一家です

これからは仲好く喧嘩をしよう

貧乏県にも日本一がある

ガールフレンド募集過疎の盆踊り

愛情が何故ベットの去勢する

プスリ阿呆な男の独り言

島根県 堀江 芳子

一合へ夫は白黒ない軒

点字打つ音から明けて音に暮れ

一つ捨て一つ拾うて生きる知恵

影法師おまえも固い自己主張

気にしないなどと上手な嘘も言え

幸せの歌と思える鍋の湯気

京都市 松川杜的

無住寺に燃えるものあり秋桜

免状の数々金にはつながらず

書架の書は私一代にしておこう

以心伝心妻も同んなじ答だす

一行の日記が続いている平和

夢二のポーズで揺れてる秋桜

松原市 玉置重人

胃を切った酒呑童子の物語

胃を切った話傷痕見せたがり

コーヒーはブラックがよい朝の計

ゴキブリのいない淋しさ知ってるか

お隣の落葉はうちの庭が好き

塩漬けの端株気になる秋日和

大阪市 津守柳伸

ひとりずつ帰ってしまいうカゴメの輪

孤独には触れぬ優雅な木守柿

誰方にも教えてあげぬバースデー

ミスミセス優先席で熟睡中

吐血から大内山に続く雨

明月は真物だった土びんむし

据え膳が待ってるブランへ参加する

ニンニクをたべて細胞酷使する

ふところの大きいひとに傷埋める

町かどの情がこわいことを言う

縄張りがあるのか虫の声消える

一本のドリンクつづく茨道

天皇にお捧げしたい血止草

ハイキング人語鳥語交わしつつ

天無情ヤマセの稲穂手に軽し

菊薫る支流に鮭も迷い込み

F16機豚も流産させる音

凶作の稲田を見舞う高級車

自画像のバックは青いあおい空

夕陽から情けを貰う失意の日

考える人の姿勢でいるトイレ

中国吟行(三句)

白居易の墓しつとりと萩の中

片腕はまだ土の中兵馬備

仲麻呂の涙か古都の霧深し

八尾市 宮西弥生

弘前市 斉藤 劼

西宮市 奥田 みつ子

倉敷市 野田 素身郎

秋祭り陛下にご遠慮申し上げ

後遺症に辛い冷たい秋の風

洪滞へとうとう秋の陽が落ちる

芒 団子結局月は顔見せぬ

定年が来ると言うのに川柳川柳

堺市 中川 滋 雀

ほとぼりは冷めたと自分に言い聞かせ

灰になるまではまではと筆供養

がやがやともみ消されてる煙草の火

罪深いことを聞いてる十二月

どっちみち毒にもならぬ薬飲む

下関市 石川 侃流洞

先ず飲んでからで対策は遅くない

極楽も地獄も困る高齢化

友好へ案山子はそっぽ向いている

ハイレグが並び老人刺激する

滝壺を出ると煩惱すぐ乾く

伊丹市 榎 谷 寿 馬

二代目の僧それなりの現代っ児

季外れの蝶が導く仏道

単身の夫へ夕焼雲あかく

シヨートケーキの苺 九月の口当り

天地へ祈り届かず姉が逝く

松江市 恒 松 町 紅

大胆な色で自画像描いている

コップ酒今日も喜劇を追っている

優雅にはとてもなれない葱坊主

愛情を貯めた通帳持つて嫁き

柳井市 弘 津 柳 慶

帰省子とどちらも無口で酒の爛

買置きのタバコブカブカ帰省の子

ヒョッコリと息子帰郷して金のこと

昭和子ももう停年になっている

その昔陛下と同じパナマ帽

奈良市 宮 口 笛 生

水のんでいても太ると太ってる

腹たてた後悔早く寝てしまふ

しばらくは晴天ほしい十二月

ボケ防止の辞書をひいてる老夫婦

まだ死ねぬ酒もビールもおいしくて

島根県 小 砂 白 汀

血圧のことはさておき十二月

秋霖へたわむれかかる猫じやらし

プラトニックラブを求めて芙蓉咲く

もう一本案山子も足が欲しかろう

妥協する気持はもたぬまま欠伸 浜田市 中 川 幸 一

男のくせには言わせぬぞ均等法

人間に忘却というメカニズム

ゴルフアールとキャディーの少し違う汗
備忘録どこへやったか判らない
言い訳のリハーサルする帰り道

名古屋市

越村 枯 梢

血を流す喧嘩もなかったなあお前
平均的な女房だったとあきらめる
コーヒーが冷めて不倫に踏みきれぬ
鯛盛る皿はそっぽを向きたがる
夢を食う猿にもあった好き嫌い

倉吉市

奥 谷 弘 朗

プライドを持ってと鏡に叱られる
ホロ酔いで打ち切る酒にまだなれぬ
人間が針の穴から覗く天
似なくてもよい癖だけが似て来だし
今日だけは五ツ紋着て床柱

兵庫県

辻 文 平

合掌の手に素晴らしき虹がある
不揃いなおはぎ仏もにっこりし
花道を走る夫婦の縄電車
許されて許して夫婦静かな茶
パフ叩く美しく嘘言うために

岡山市

時 末 一 灯

矢印を出口と思うとき負ける
洗っても嘘のひとつは染みになる
あいている隣の席の物語

死語いくつ知ってる自信と佗しさと
アルバム隣の隣へ想うことしきり

倉敷市

小野 克 枝

来年へ笑い袋をふくらませ
廃業へ軽四輪も背を伸ばす
孫のうしろを従いて歩ける無職の身
女ひとり昆布こと炊く時雨
ひと言を控えて丸い輪ができる

富田林市

藤 田 泰 子

人恋し秋が心を弱くする
自惚れもあっておだてに乗せられる
友が来る百目ロウソク灯けた様
かと言って相手に靡くことはない
据膳も嫌いなものには手を付けぬ

弘前市

田 中 叶

ガスボンベ秋の気配の中に入り
塗りたてのペンキが付いて人を待つ
はやらないネオンがうつる水たまり
虫の声寝ぬ児の爪を順に切り
消費税塩沢ときの頭なり

豊中市

田 中 正 坊

中国の旅

銀鞍にあらねど白馬の人となる(洛陽)
軍司馬の文字蔽めしき武官印
登高賦 秦陵にいま石榴笑む (西安)

軍団にただ息を呑む兵馬備
胡姫が注ぐ白酒に酔う古都の夜

大田市 藤田 軒太楼

菊活けて秋のさやかに浸りきる

一言の余徳嬉しや功德知る

口癖も愛嬌みんなに親しまれ

還暦に水やる鉢も増えてくる

痛いところ衝いて来たなと酒にする

藤井寺市 吉岡 美房

一枚の枯葉がくれたスキヤンダル

盛り場でネオンを食べて生き延びる

一向に庭を掘れとは言わぬ犬

さんま焼き独りの秋に耐えている

こおろぎよひとりぼっちになりました

和歌山市 堀端 三男

策の無い男策士を慌てさせ

他人とは思ってませんとはお世辞

小走りに信号渡る癖がつき

閑話休題主題になると眠くなり

行間にももの哀れが滲み出る

和歌山市 松原 寿子

人を指す前に忠告うけ止める

絵硝子のむこうで愛の証明を

てのひらにふたりの川が流れてる

君の瞳の届くところがかくれんぼ

台本のないまま夢が醒めてゆく

京都市 都倉 求芽

胸深く声にならない日記帳

弥次郎兵衛真面目にバランス考える

人生を方向音痴で来た旅路

電話になると一オクターブあがる妻

秘書というテトラポットで身を護り

京都市 山本 規不風

朝寝坊して極楽を見る健康法

逢うて別れて神を信ずる都鳥

龍の玉静かに戸車を聞く梟

太宰府の絵馬に南天の実が稔る

人妻が凭れる電車の昼下り

唐津市 田口 虹汀

何もかも半端で肩が凝り通し

半端糸集めて母の芸が生き

何しても半端なくせに人気者

幸せと思う二人で朝詣り

この歳で苦中在楽やと知り

唐津市 浜本 義美

天皇ご重態に想う(一句)

寅さんもアテが外れた秋祭り

足の裏見せてシンクロ銅メダル

自由化へ怒りをこめて祭り笛

秋風とむかし話がしたくなる

ふり向けば右向け右の声がする

唐津市 仁部 四郎

校長の名刺が効かぬ歳の暮れ

二次会へ校長しばし暗算す

校長の昼飯お茶がぬるくなり

校長に威張らせてやる月曜日

浅学を自慢に校長長ばなし

唐津市 久保 正敏

合格の鉢巻親にタツチする

女房に釘を刺されたパスポート

さかずきを水でしたのかすぐ別れ

十二月誰もリリーフしてくれぬ

竜宮のツケは太郎の怠け癖

米子市 小西 雄々

遺産分け根にもつことが増えてくる

土産屋で入歯のことも考える

月の出を待つと目標きめられぬ

百分の一秒競い孤独感

飽食へわらじのようなテギを食う

米子市 石垣 花子

花売りの声から海が凧いで来る

墓石はきれいな金で建てて置く

質屋から流転はじまる銀の匙

コスモスよ儂い顔はしないでね

昔々子福者などおだてられ

米子市 政岡 日枝子

それは殆どダルマになつてゐる父の足

匂いを消してバラは自問自答する

それは見事に牛がふて寝をしてみせる

銀河から落ちた男がよくしゃべる

鏡の前で嘘つく事はやめようよ

中国の旅 奈良市 天正 千梢

兵馬俑歴史のにおいに堪能し

青龍寺たかぶる心おさえかね

凄く中国天安門の広さかな

竜門石窟只呆然と息をのみ

中国の凄さ興奮まださめず

鳥取県 川崎 秋女

今にして思う見事な演出だ

自己嫌悪二三日つづく秋の鬱

泣いてたまるか泣いたら私負けになる

長い長い手紙を書いた雨の午後

怒る日も笑う日も海美しい

鳥取市 両川 洋々

胸の奥晒すと二の矢飛んで来た

自分史のピリオドだから俺が打つ

忍の字が僕のポッケの奥で死ぬ

帯に短かい男に娘もつてかれ

リクルートへ葵の印籠借りて来い

大阪市 西 森 花 村

いい人は早よ死ぬなあとふびんがり
首つりに来て出会ったは恩師の娘

警察に目をつけられる太鼓腹

まだ若し金も女も出来ぬ程

親不孝されても我が家の血筋かな

大阪市 本 間 満 津 子

分け合えば幸せ倍に倍になり
音で描く舞台私は演出家

音の無い不安防音窓開ける

協力して内需拡大鍋新調

松茸の匂い表札見て通り

大阪市 神 夏 磯 典 子

忙しさの中で木屋通り過ぎ
衣がえ新調の服捨てる服

スベアキー親に預けているゆとり

おたがいの甘え喧嘩の種になり

遅まきの種に期待をかけている

大阪市 北 勝 美

やっとこさ四つが重い金メダル
手間かけてちよつと贅沢栗ご飯

栗の皮剥くりハビリを思いつつ

災難も信仰すれば有難き

献体の文字が目に入る今朝の記事

大阪市 藤 田 頂 留 子

どうしたら吊ればぶつかる置けば邪魔
魅力まだあるわと鏡仕舞わない

気のせい目立つ西暦カレンダー

店員の声ではなれるウインドー

飲めたらなやけ大福はみつともない

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

老妻よお前もか晩酌にハンバーグ
正直なレンズで手ごろなどしない

彼岸花早や早や枯れて地球病む

十月の木枯し天皇も見そなわし

金木屋と仔猫ことしの秋を撮る

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

冬のプロローグ靴下のまとめ買い
フェンス越しにほどの良いお付合い

逝ってしまった夫の好みに目が止まり

台風のコースに乗っている旅路

衣食住足りて北風さんと戯れる

寝屋川市 岸 野 あ や め

天も哭くか連日雨の皇居前
一喜一憂オリンピックと天皇と

ぶぶあられ野暮な話はとりあわぬ

流行歌今宵も霧に濡れたがり

極月の芝居はハッピーエンドなり

岸和田市 植 山 武 助

松島や芭蕉も困った下の五字

すごいすごいで瀬戸大橋渡るなり

いい主人ですねとみなは言うけれど

ケセラセラ私は長寿に切り換える

料理番組の料理出て来たことはない

岸和田市

福浦勝晴

長生きをするほど幸せ遠のいて

せめてもの救いかタマゴの値が下がる

老夫婦相和し血圧降下剤

喋るだけ喋ってメガネの玉ぬぐう

ギャンブルで儲けた師走の温い風

島根県

堀江正朗

盲人の幸せ音を探し当て

盃のまるさ見なおす宵祭り

空想の花は瞼の中に咲く

あの頃の想い出深く菊の花

笑い顔忘れ笑いの輪の中に

玉野市

小谷仙山

爪つんで無職の秋をもてあます

影法師を信ずる外に何も無い

整理整頓箱を重ねただけのこと

台風の爪跡税金ばかり食う

恍惚の瞳に美しい曼珠沙華

神戸市

山口美穂

波の音風も秋です陽が沈む

大切な休日朝寝で半ば過ぎ

母と娘で貧乏性を笑い合う

平等に年をとってます同窓会

エリートに孤独知ってる廻り椅子

米子市

林荒介

病人と雲の流れの中にいる

足跡は仲間がつけた道だろう

萍もやがてひとつの駅に着く

二番手も必死に舟を漕いでいる

踊るのはボトルが空になってから

高知県

赤川菊野

中国吟行の旅

ニイハオと可愛い笑顔寄ってくる

仲麻呂の足跡たしか青竜寺

悠久の神秘を秘めて兵馬俑

想い出を握手で包み再見

一期一会古都の風も秋のもの

西宮市

林はつ絵

いつからか二人称にされている

何日か味噌を切らして一人の膳

りんどうに情を貰う山や川

吾亦紅遠いあなたへ駆けていく

肩パット女も株を買っている

西宮市

西口いわゑ

嬉しい日悲しい日にも鉦鳴らす

亡母といた遠い記憶に鐘の音

全自動主婦をカルチャーへと運ぶ
旅かばん二泊三日のノラ気分
薄幸な美女にも似たり白芙蓉

鳥取県 土橋 螢

怒っても明日の朝は笑います
墨をする黒の無心に溶けるまで
バックミラーに夕焼けの海がある
めくるめく歓喜女に包まれる
雪が舞う破れ障子のむこうから

鳥取県 新家 完司

祭り寿司ひとりで食べてお留守番
お祭りだポチも一杯飲みたまえ
カタログを広げて妻と仲直り
わたくしの留守にお酒が減っている
すくすくと育って家を出て行った

鳥取県 羽津川 公乃

懸命に生きて半端な歩を戻す
奥さんの笑顔内助に数えられ
貸衣裳五三の桐で酌み交わす
一こまのマンガとなった恋の果て
七三の分け目が耳に近くなる

川西市 氏林 洋敏

一日を松茸狩にあてている
鱒雲別れ話をきりだされ
花の咲く時を信じる彼岸花

別居して重いローンと同居する
カマキリもバッタも秋に勝負する

堺市 高橋 千万子

浮足の客へ閉会呟えた声
ほったらかしの意地しぶ柿が甘くなり
紫に女まとめて未生流
判断の出来ぬ人にもある一票
ホーム炬燵出して会話が丸くなり

姫路市 人見 翠 記

色と香に迷うてバラの刺に逢い
色紙替えホトトギス挿して秋の部屋
恋の灯を火傷せぬ間に消しておく
私の血一匹の蚊の寿命長くする
血の絆断ち切れもせぬに唯合い

箕面市 坪田 紅葉

栗御飯上手にたけたと話だけ
口だけは達者ですよと返事する
色っぽい話がはずむ月あかり
おしゃべりにつかまらない様まわり道
物あふれ心まずしい秋の風

大阪市 大塚 節子

幸せの顔が連れ立つ市場かご
始めから言わねば分らぬ離婚劇
肩こりを恋の重荷と言うてみる
豊漁豊漁出港出来ぬ秋刀魚船

遠足が降りて瞬間静となる

出雲市 板垣夢酔

向う傷七十五日までの顔

どこまでを信じていいか花言葉

昼寝して夜寝つかれぬ糖衣錠

オホーツクの潮騒カニ缶から洩れる

螺旋階段女はズボン組ばかり

尼崎市 春城年代

洛陽・西安の旅

纏足の老婆哀しや目を逸す

きんもくせい関帝廟に入らんとし

革命の手にみ仏の首がない

端然と古都西安は霧の中

茫洋と伊河のほとり柳古る

尼崎市 奥山美智子

人様に苦手があつて面白い

のほんとしてはおれない自由席

明日への眼鏡を拭いている余裕

秋深し風が多弁になってくる

裸婦の絵の前で呼吸を止めている

羽曳野市 榎本吐来

まだ少し男が残る粗大ゴミ

病妻の寝顔が語る男運

まん丸い月が返事を持って来る

木犀の匂いは同じ両隣

無花果の実が裂けている迷いごと

松原市 佐藤藤子

煌々と通夜がはじまる公民館

シーソーに一人で島の小学校

指切のゲームが続く秋桜

国会をまた騒がせる黄金虫

お買得ですとタイヤを勧められ

羽曳野市 田中隆二

自問自答少し弱気になってくる

均等法娘門限守らない

玉手箱蓋が外れていた不覚

また一つ座右の本が増えた秋

秋深し古賀メロディーを口ずさむ

羽曳野市 吉川寿美

人をさす指は不遜な言葉もつ

水鏡ゆれて本音を問ひ質す

遠花火まつこと静かに凡夫婦

赤札市の零にまたもや蹴躡く

秋の本屋で少し充電しておこう

大阪市 古川美津枝

御平癒を祈る記帳の秋時雨

焼きたてをジュンとおろしで差し上げたい

病床でみつめ直せばまだイロハ

商品と雑居で安堵小商い

土地高騰グルメでウツパン晴れまっか

大阪市 塩田 新一郎

予選落ちそれでも日本新記録
花瓶まで骨壺みたいに見えて来て

日記にも嘘を書きたい日の重さ

国会五輪相撲と隠居も忙しい

洗濯機中で向日葵ぐるぐる

竹原市 岩本 笑子

手錠にはあらず女のブレスレット

行きすぎた道に野菊咲いている

秋から冬へ私と歩いてみませんか

大噴水の前で考えることは無い

寄りかかってもいいですか貴男秋

八尾市 鷺見 章

金メダル巨漢の涙あたたかし

大安のロビーで妻を見失い

マイカーで帰る大工の鉋屑

四十を若輩と呼ぶ高齢化

此処からは隣の畑曼珠沙華

出雲市 園山 良子

平和でも笑わぬずるい人が居る

秋風がたしなめに来るダイエツト

褒められて六十路が通う硯箱

威張らせて六十路が恥じる肩パット

仏壇へ住む高貴なゴキブリよ

奈良県 田中 紀美代

迂闊にも愚痴言うとこへ顔を出し

スピーチで泣かせる原稿妻が書き

体験が生きてるこの人信じよう

犬か猫か分らぬ犬を飼っている

ロマンスがこわれないよう陽が沈む

熊本市 永田 俊子

鉛筆の芯が折れた位の他人の傷

ひとり芝居上手に女は生きている

すりぬける時すこし嫌われ出世する

潜水艦は陸にも居るよ気をつけて

おみくじの裏は読まないことにする

仙台市 川村 映輝

老妻も女偶には燃ゆる幸

交通事故特攻隊も顔そむけ

仙台の顔広瀬川清く澄み

核があり騒がず無いから騒いでる

町田市 竹内 紫 靖

メダル決まる敗者の口も大写し

元級長掌に錠剤の数見せる

翻訳は早いかなば失語症

颯々と飄々の間六十路過ぎ

今治市 越智 一水

妻の留守一合よけい飲んで寝る

老いてなお明日を夢見る種を蒔き

好きですと言わず女はついてくる

熱海の湯心が揺れる灯が揺れる

寝屋川市 宮尾 あいき

草刈機虫の寝ぐらもあらばこそ

秋の蚊よそろそろ年貢の納め時

金木犀老いの残り火かきたてる

老婆のいじらし淡く紅をさす

和歌山市 若宮 武雄

民宿のひよつと似ている亡母の味

犠牲フライ狙ったはずのホームラン

適材適所仁王さんの面がまえ

鬼瓦の役でよそ見はできません

七尾市 松高 秀峰

癌病棟名札次々消えてゆく

長生きも楽じゃないよと笑ってる

外販になって肩書欲しくなり

手ぶらでは行けぬふる里遠くなり

八尾市 宮崎 シマ子

人はどうだ自分はどうかヤジロペー

親知らず抜けば先祖の血が騒ぐ

礫にされて縦横X線

眼に火花いれて眼底異状なし

高槻市 辻 白溪子

急患が着くと廊下も影走る

ライバルも白紙に戻っている祝辞

欠点を気づいて欲しい見合する

ゆるす気になっても油断はして居らず

竹原市 森井 菁居

日々好日いつか忘れた反戦歌

ぬるま湯の中で闘争心も褪せ

佗助も寂しかりけり茶人の訃

紅葉の蔦に挽歌を見つけたり

諫早市 原田メイシユン

妻がそばしどろもどろの電話口

賽銭も馬鹿にならない京の街

讃岐こんびら拌んで御利益足がこり

一つ屋根に寝て見る夢のみな違い

静岡市 渥美 弧秀

秋雨やペンの運びも愁いがち

歌がある詩がある古希の坂楽し

背の孫の眠りをそつと影法師

台風のお詫びか抜ける蒼い空

鳥取県 松下 たつみ

減反の畔を隣と削り合い

二人きり何の話もなく寝入り

割り切れぬ心へ二の矢つきささり

アレルギー秋の味覚に遠くいる

寝屋川市 江口 度

蜉蝣にとっては長い命かも

お月見が近いすき野活気づく

会議室隅から埋まる社の落ち目

お子さんの話してから商談に

加賀市 細呂木 魯 木

お見合に大福出され思案する
解剖で心の傷は見つからず

赤い羽根鶏は行先信じてる

窓枠の視野に飽きてる闘病記

大阪市 河井 庸 佑

過疎となり母校が消える寂しさよ

退職へ指折る日々をあわただし

腹いせに蹴った小石がはね返る

土壇場へ切札持っている余裕

今治市 矢野 佳 雲

お釈迦様の覚った星が見つからぬ

人信じなさいというて鍵は掛け

尻尾振る順に仔犬は貰われる

間の抜けたような役なら生地でやれ

松山市 谷 信 夫

梅干に耐える力が詰めてある

敬老日素直になつて祝われる

運動会水軍太鼓鳴り響き

中毒をせぬよう敬老金一封

笠岡市 松本 忠 三

日常の会話ばあさんじいさんよ

のさばつていてプライドが許さない

取つておき勿体ぶらずに出さない

罪深い人です笑いですまされる

神戸市 仲 どんたく

秋空へ手乗り文鳥脱出す

メダル無きマラソンコース行く夫婦

点晴の画龍の位置に端座する

ミネラルの味を蛍に教えられ

守口市 羽原 静 歩

自販機にも騙されそうな十二月

瀬戸大橋陰で眠れぬ人もあり

ドレミファのように並んだ寒雀

事始め井上八千代の瞳が笑い

東大阪市 森 下 愛 論

年金で充分ですわと柔和な眼

暇つぶし毎日コツコツ自分史を

ネオンより俺に向いてる屋台の灯

結論が出ても終らぬ酒の席

倉敷市 稲田 豊 作

護符よりも尊し母の仮名便り

古狸急所突かれて呵々大笑

貧乏神律義な父を離さない

嬰鑠の老父運動靴が好き

大阪市 黒田 真 砂

コスモスの囁き秋をひそと住む

サルビアが真赤に炎えたい日

言い訳をやさしく聞いているイヤリング

人生のたそがれ確か葉鶏頭

大阪市 吐田公一

虹の夢ふくらむ孫のシャボン玉

時差呆けに負けず女は世話をやき

一瞬のチャンスへねばるカメラアイ

娘と孫とサントモニカの夕日を拝む

大阪市 江城修史

美しく老いたし嫌われまいとして

亡兄達を越えた命をいとおしむ

亡父想え亡母を想えと彼岸花

一期一会亡き師との距離かぎりなし

大阪府 坂口公子

悪びれず的突いてくる孫と居て

鈴虫の子孫を思うすさまじさ

十人が十人葉持参の旅仲間

からす瓜熟れて溪間に灯がともる

大阪市 渡部さと美

知恵者が堺に居った秋祭り

胡蝶蘭パーティードレスが今日もゆく

方便の嘘に双方事もなし

日本に勝るお米がありますか

和歌山市 内芝登志代

考える男へ紫煙のあたたかさ

養老院やはり女は身ぎれいに

秋風へおからの味の里ごころ

老いてなお里の噂を聞きながら

和歌山市 牛尾緑良

どこまでが私か妻か子か絆

結び目を確かめにくる記念日よ

思春期とちがう豊かな母の胸

風紋の下に思い出の月日

和歌山市 細川稚代

空耳と会話が弾む秋の夜

夢二展ひたすら君を待つ風情

人愛す意欲はいつも抱いている

風むきが悪いかそつとしておこつ

和歌山市 神平狂虎

秋の陽の届かぬ部屋で具になる

鉛筆の音も貧しく澄んでいる

涙脆くて少し気弱なちちろ虫

風も無いのに散ってゆくのは僕の影

和歌山市 後藤正子

七草のひとつになろう秋の天

今日だけを生きては哀し昼の月

瞳の奥を一所懸命見つめよう

ポテトサラダに軽い妬心が混ざっている

和歌山市 山川克子

幸せな事にライバル増えました

諦めを悟りに変えるのも月日

思いつ切り叱り飛ばした自己嫌悪

母からの手紙下手でも日本一

和歌山市

桜井千秀

うんざりと隣のピアノに馴らされる

崖つ淵一か八かの見せ処

切符一枚私を運ぶ確実に

北風に島の眠りは深くなる

和歌山市

青枝鉄治

地上げ屋の噂知らない露地の花

贈賄の分は手抜きで埋め合せ

肩書がとれたと知った万歩計

銘柄はなんであろうと握りめし

和歌山市

寺田裕美

言い負けてなんとやさしいコスモスよ

月ばかりほめて私をいつ口説く

仁王さんにらみつかれて夜笑う

零歳にふりまわされる肩のこり

米子市

青戸田鶴

秋の湯に染った今が温い

友はみな同じではない秋の道

城跡はいつか花野になっていた

切り取って額に入れよう秋の空

米子市

田中亜弥

残り花数えて冬の陽と遊ぶ

未来図を一日一つうめてゆく

とっときの火種はいつも神棚へ

もめ事に仏おちおち寝ておれぬ

米子市

寺沢みど里

城を出るときの草鞋を編んでおく

わかれの掌いつか逢う日を信じたい

友達が欲しくて下手な笛を吹く

危なげに梢の柿が揺れている

米子市

野坂なみ

やさしさが欲しくて荒れるガキ大将

どの声も素直にきいて秋深む

また明日そんな言葉は棄て去った

白羽の矢神はいつでも狙っている

米子市

澤田千春

迷路からぬけだしたくて本を読む

王様の髪もこのごろうすくなり

除草のがれ山りんどうと誰を待つ

大根をくたくたと煮るそして秋

河内長野市

井上喜醉

泣き笑い承知で嫁に出す覚悟

名花でも恋に飢えると血が狂い

番犬のストレス哀れ目のやりば

汚れても丸い地球は時刻む

倉吉市

野中御前

大穴をあてて人生狂いだし

飽食の果ては名水買いあざり

蟻祭りみこしのように油虫

無為無策りんごの皮を長くむく

東大阪市 崎山美子

四年後に夢をつないだ日本新

まさかとは思うが気になる非常口

まだ女意識しているぬき衣紋

倦怠期無理やり仲人させられる

大和高田市 岸本豊平次

天国はかくありなんか秋の空

何事もお陰おかげで丸く老い

オリンピック終ってテレビのオクターブ

お隣も二人ひと盛分ち合い

宝塚市 丸山よし津

晴れ舞台持たぬ火花がしけてくる

お喋りの口の封緘すぐはがれ

辞令一枚見知らぬ土地へ子も犬も

青い眼の足の長さを組む座禅

宇部市 平田実男

握り合う手と手もつれた糸が解け

衣食住ほどに満ち足りない心

七人の敵が成長させてくれ

三世代住むうさぎ小屋うらやまれ

鳥取県 森田布堂

親心わかる頃には墓参り

足裏の灸が頭に効きました

しらたえの手が伝票を串刺しに

親分と呼ばれ名刺は社長なり

鳥取県 清水一保

来年の話を怒る鬼もいる

行く先はようわかっている僕の道

天高く清貧肩で風を切る

竹光を磨いて真剣勝負する

鳥取県 森田熊生

亡父と会う酒雨が降る雪が降る

がんこさも亡父に似て来た道歩く

新しいなやみラーメン食べながら

正直に話してめしがうまくなり

鳥取県 林露杖

今朝もまた人の訃報をきく秋思

したい放題させて手綱は放さない

本紙よりチラシが重い十二月

果たせない思いが溜まる十二月

鳥取県 土橋はるお

ニンニク食べて狭い所に割り込んで

姑に似た漬物石に爪立てる

ボンボン時計お前前世も動けるか

葱坊主が阿呆陀羅経を読んでいる

出雲市 園山多賀子

花茗荷忘れ上手になつて老い

罪業は燃えないゴミの中にある

北の窓やっぱり味方の風が吹く

父の忌が巡り石落咲く季が巡る

出雲市 吉岡 きみえ

秋晴れにおめでたいはなしふたつきく

あの人といくさごっこはできませんぬ

湯上りの鏡にうぬぼれすこしある

コスモスの可憐な想いきいてやる

唐津市 山口 高明

黒潮で育ち男気たんと持ち

片意地を張って仲間を見失う

挫折した夢を息子に受け継がせ

手配書の顔を眺める日の無聊

唐津市 筒井 朴竜

一世を風靡楊枝の紋次郎

臆練りを見付け本棚掃除する

打たりようと自説は曲げぬ五寸釘

絡む癖直す悪友酒を断つ

唐津市 浜本 ちよ

民を無視悪代官に似た政治

柳誌だけ読んで読書をしたつもり

パソコンで弾いたような城の礎石

ペンダコも何時しか失せて手も老いる

松原市 北野 久子

母ちゃんの結婚式も秋だった

友もよし一人またよし寺の萩

遠回り忘れぬ人が今も居る

当たらどうしようハワイ旅行くじ

岡山市 行吉 照路

セールの三百キロがフイになり

セールの時計は三時に止まったり

三度目の職は健康の為になり

明日の橋焼鳥かじり組立てる

岡山市 井上 柳五郎

不感感だけが渦巻く曖昧さ

有難や梨栗友の宅急便

捨て台詞すこし威しもかけてゆき

人恋しつるべ落しへ友の顔

岡山市 小林 妻子

裏切りの下駄の鼻緒は切ってやる

つまりきの裏側で見る星月夜

底辺に生きて表裏のないくらし

墨糸がゆがむ大工の裏話

岡山市 岩道 博友

隣から菊が匂うて白髪増え

晩酌を温めた席に敵が来る

愚痴聞かすレストランが綺麗過ぎ

言い負けたむなしさ秋の夜が長い

岡山市 山本 玉恵

落込んだ日から足音高くなる

少うし甘えてみる気にさせた酒の味

雑兵という掟にもある野望

追い越して越されて悪友となる絆

岡山県 矢内 寿恵子

秋茄子の彩に誤解の老婆心

煩惱の落ちつく先は金の事

二重橋深い祈りを積みあげる

胸のバラ自信過剰をせぬ様に

土佐市 中内 朱坊

秋風がジョッキの味を狂わせる

のし袋義理の重さに耐えている

長崎の夜景悪夢の影もなし

ロザリオの鎖ガイドにもらい泣き

高知県 小澤 幸泉

二歳くらいいいじゃないかい五十歳

何があつたか奥さまがやさしすぎ

散らかしたへやは息子の自己主張

退屈な男待つてる午後の街

高知県 北川 竹萌

持ち上げた荷物に骨の軋む音

閉店の審判下る病気なり

閉店に感謝もこめて半値売り

楽になったなあと隣から言葉

岸和田市 島崎 富志子

良いことがありそな予感で今日もくれ

ママの留守孫も小さい気を使う

金木犀今年は今年の香で匂う

この年になればとタバコを止めぬ腹

岸和田市 原 さよ子

操子先生路郎賞受賞

師の受賞菊も寿ぐ日本晴れ

孫はもう少女体重気にしだす

話し好き今日の子定が又くずれ

初風呂を焚く大安を待っている

島根県 石田 清泉

コスモスに触れる田舎の道が好き

操縦法満点ママに脱帽し

嶺山へ落伍せぬよう足鍛え

庭菊に玉音届かぬ日が続き

島根県 松本文子

小さな夢育んでいる秋のペン

恍惚の母連れ戻す手を繋ぐ

腹の虫おさえて廊下磨いている

又愚痴になったと日記苦笑い

鳥取県 森山 盛桜

寒椿造花をたじろがせている

必要な所には出ぬ力こぶ

なめくじに掴んだ塩に理由は無

麗人の隣の席が空いている

鳥取県 江原 とみお

風の子に留守を頼んだのは不覚

むつつりや美事な菊を咲かせてる

銀メツキの壺が座布団している
札と仁ちかごろ寒くなりました

高槻市 川 島 颯云児

雑草の意見は軽く無視される

流れ矢が心の隙に飛んでくる

訳あつて独り身通すイヤリング

仕来たりに明治の意地を通す母

高槻市 河 瀬 芳 子

矯められる枝の言い分聞いてやる

秋の絵のまんま中に曼珠沙華

世の中は味方ばかりと思うとく

例えばなしの中できつちり釘を打つ

茨木市 井 上 森 生

京に遊ぶ

京の秋石が答えてくれそうな

古めかし駅の名つづき嵐山

泰平を笑うか左大文字

瀬戸大橋

めばる釣る合間も瀬戸の橋をほめ

松原市 小 池 しげお

一泊ツアー天気予報があわぬよう

独身寮にふる里がある柿の種

蜘蛛の巣が顔にかかった空財布

金のこと男を少し傷つける

広島県 田 村 新 造

目を病んで読書の秋も控えめに
眼圧の憂い早寝をするとする

切る切らぬ思いわずらう目の玉よ

視界ゼロ思えば心寒くなり

富田林市 片 岡 智恵子

リハーサルが無い人生の淵に立つ

夕やけの記憶のなかに祖母がいる

蝶結びそつと緩めてくれる人

菊に問う陽ざしはいかが水いかが

竹原市 石 原 淑 子

ピーマンの伴せ彩の独り言

踏む大地私を覚えてくれますか

神からの肝だめしとて独り居り

木屋の香りを裂いて秋刀魚焼く

岡山県 二 宗 吟 平

がやがやとべちゃべちゃ声が音となる

三時間待って二分の検診日

憎まれ口貴女思えばこそそのこと

枚方市 宮 川 珠 笑

わたしは玄関子には車庫まで送る妻

入函外せば亡父にそっくり

職場でも家でも少し惚けておく

羽曳野市 佐 野 白 水

オリンピックも野球も老妻興味なし

白杖にうしろから足をたたかれる

無料なら覗いてみようシルク博

静岡市 永倉 僕 川

無位無冠されどたてつくいい度胸

ふる里は普段着で母待つてくれ
老春を楽しみましよう喜寿と古稀
秋冷えを案じ娘の声届く

姫路市 丁坪 サワ子
倉吉市 波辺 菩句

お勝手にどうぞと妻が拗ねてみせ

福岡県 横地 雅風

鉾害の家建ち祝いの炭坑節

たぐるより妻に尋ねる記憶力

草刈機走って曼珠沙華消える

堺市 柿花 紀美女

責任のない気楽な守備範囲

ひとり住む男に早い秋の風

汗知らぬ手で開通のテープ切る
岡山県 荻野 鮫虎狼

口髭が立派に伸びて無職です

僕よりは判断がいい白い杖

熟年の夫婦へ春の風が無い

呉市 林野 甦光

五番町の角できれいな目と出会い

裏口から這入れと自問自答する

螺旋階段心の迷いつのらせる

和泉市 西岡 洛醉

ちよっぴりの夢年金で追うて良し

斜めに切手貼ったのはあの人の便り

週末も月末も無し今無職

湯上がりの爪切る耳の穴も掘る

始めから許せばこんなにはもめぬ

もう一つ地獄の門が待っている

秋は嫌物がなしくて淋しくて

大学の孫の掃りは遅過ぎる

二十年いまだ亡夫の迎えなし

月下美人咲くを見せたり居待月

本読むも寝るも気ままな二階部屋

式服を着たまま東京折り返し

甘辛が梅田でサヨナラ右左

山陽がトマトとなつて人気呼び

経験を話せどピンとこぬみたい

自分のこと自分で出来る日記帖

サイクリングコースになった娘の新居

黙ってる夫へ黙ってお茶を入れ

豊中市 上田 登志実

西宮市 瀬尾 六郎太

寝屋川市 平松 かすみ

八尾市 山下 美津留

みつる改め

みつる改め

みつる改め

みつる改め

みつる改め

みつる改め

喜びの送別会に妻の席

スナックで縁起かついで笑われる
蹴るつもりだった女にのめり込む

和田市 芳地 狸村

千四百年古墳に眠る玉手箱

傷あとにいくさばかりが見えてくる
だんじりの囃子で開く運動会

和田市 清野 こう

行く先は問わず流れに乗る落葉

故郷の味を分け合う隣

親切を素直に受けてバスの席

和田市 古野 ひで

寡婦ひとり甘え許さぬ向い風

何かある友の不機嫌気にかかり

人生の終盤逆転ほしくなる

和田市 福井 桂香

鯉口を切らねばおもい伝わらぬ

ポーカーフェイス出来ぬ母です愚かです

癌がんと言うから癌がつけあがる

和田市 山田 高夫

来年を目指して鬼を笑わせる

呼び捨てが女の一生かも知らせず

肩書がとれると背骨丸くなる

島根県 北川 民子

赤いバラも一度咲かず意地を持ち

二人いてこそ満月美しい
健康が何よりですと金も欲し

島根県 松本 はるみ

履物をきちんと揃え昼寝する

赤とんぼ登校拒否の子がひとり

飛行機の重さシャボン玉の重さ

島根県 藤原 鈴江

野火燃える女の業の深さかな

幸せを紡ごう女の糸車

年越しは謀反の風を吸いたがる

米子市 光井 玲子

吾亦紅どうしていつも口つくむ

小町にははるかに遠い鏡拭く

なんとなく憧れている向う岸

米子市 金山 夕子

ブラジャーに匂い袋をしのばせる

口下手なオウムに敬語教えたる

いつだって迎えてくれる山が好き

米子市 白根 ふみ

高齢化神が天寿をのばされる

大根の太り具合を撫でている

奥の手は立ち上るとき持つてでる

出雲市 小玉 満江

基本からみっちり飲み込む紅帛紗

コトコトと玉子を溶いて佗び住まい

竹踏みもおろそかになり秋深む

出雲市 竹 治 ちかし

眼のうろこ取れずに若さだけ主張
数え唄妻と一緒になら続く

故里のなまりを山の私語に聞く

鳥取県 金 川 満 春

利かん坊寿司屋修業で腕をあげ

あこがれの女優の一人森光子

泣いてないてみんな流してやり直す

鳥取県 谷 口 次 男

うちの子は県の課長でござります

災害復旧という変な工事

八十を過ぎて老母が泣いている

鳥取県 津 村 八重子

老いてなお心の夢は七色に

ワイングラス乙女の胸はときめきぬ

ブランコゆらり母のむかえがまだ見えぬ

大阪市 中 西 兼治郎

断食に重湯の味の素晴らしさ

ドームでの試合見えぬと月の愚痴

耐え抜いた苦労を顔に出さぬ母

大阪市 寺 井 東 雲

二枚でも松茸食べた土瓶蒸し

地引網客に合せて鯛入れる

テレビ種悩み相談後たたず

老人にだって淡彩の夢がある

帰省した子にも無口な男親

家買うたあとはお墓を買う話

ひき寄せた肩にロマンの月あかり

待ち合せ駅の出口が多過ぎる

いてたちは若い腰が承知せず

信号待ち知らない顔に会釈され

木犀の香に誘われる迷い道

さそり座の女にやがて誕生日

協力も口出しもせぬ伝書鳩

味方からあざむく将の腫が細い

困甚むちゆうポケットベル鳴るタイムリ

白足袋に一途な芸のつやがある

駅長の時計が旅に区切りつけ

長雨に電話も鳴らぬ人も来ぬ

目を閉じて六十路の坂を振り返る

健康本飾ったままで医者通い

飽食へ心の飢えが顔を出し

姫路市 都 里 遊 光

姫路市 中 塚 遊 峰

姫路市 大 原 葉 香

姫路市 松 尾 柳 右 子

姫路市 大 原 葉 香

姫路市 大 原 葉 香

姫路市 大 原 葉 香

好きですと言えず草笛吹いて去に
不揃いの皿が知ってる母の味
松茸の足だけさわりそばはなれ

吹田市

茂見よ志子

散会の帰途で無口がしゃべり出す
老人会会費だけなら納めましょう
焼いもの値段おしえてから食べる

吹田市

園田文子

朝顔の明日は咲かない旅役者
汚れた生より美しい死ガラシヤ夫人
目は見えなくも舞台は見える名優の

吹田市

栗谷春子

黒いもの着た一群と距離をとる
齒科のイス駅のドラマを遠景に
虹色を信じたわけじゃなかったが

境港市

細木歳栄

雁三羽離れて群の外にいる
秋霖か涙か夫はもう居ない
野牡丹の紫ねたむ山鴉

和泉市

岡井やすお

手術医のいでたちをして棺をあけ
本州に住んで四国へ通学し
子に鍵を持たせて母はスイミング

富田林市

松本今日子

青い空そわそわ動き出す浮力

もう一人私が居るので忙しい
予定地に置いてなかった金の斧

富田林市

新開千代女

もう少し地球の人の世話になる
株上がりひとりここにこ上機嫌
コスモスが素直な気持ちにしてくれる

弘前市

眞喜内實

小石とて世のため路の隅に居る
合掌を心の中でしてたのし
ありがとう聴いた血圧瀬をくだる

弘前市

小寺花峯

後ろなら俺にも捕れる鬼の首
怪談を語るに少し寒すぎる
粗大ゴミ床屋へ行ってひと眠り

黒石市

相馬一花

二級酒も銚子で化ける特級酒
祝電のつもりで弔電打っている
柔道で鍛えた筈が松葉杖

羽咋市

三宅ろ亭

黒檀の大机父のように座る
からくりが少しは判ってきた図式
働き蜂どうもみんなに嫌われる

竹原市

信本博子

わら屋から昔話がこぼれ出る
風土記の丘昔を恋うている素足

台風の目となつてゐる赤い靴

藤井寺市 福元 みのる

寝屋川市 堀江 光子

もう一つ行事の残る十二月

奥様と呼ばれチップを弾む秘書

ワインには彼女に主導権があり

高槻市 竹内 花代子

出雲市 石倉 芙佐子

何処へでも行きたがつてる金と暇

嫁入りの荷に逢う敬老バスツアー

木犀の匂いを探す夜の帰途

有田市 松井 かなめ

川西市 松本 ただし

獅子舞の尾を持つ役は孫がする

顔 家庭来るなりほめる勧誘人

弥勒菩薩ほほえみかけて道を説く(広隆寺)

広島県 藤解 静風

年重ね沸騰点が低くなる

月あかり殺し文句を待っている

新しい首輪をつけて赴任する

海南市 三宅 保

ネクタイを義理で結んだ喉仏

頼むからしやべる前には箸を置き

家出でもするのか妻の旅靴

箕面市 椎江 清芳

税務署と医者には弱い社長さん

銀行と話中です十二月

音痴でも唄えば眠る子守唄

昔追う話が少し食いちがい
注ぎ足して注ぎ足して別れのワイン
くちなしの無垢の白さが眩しい日
花野もう心通わす風もない
逢うだけのことにときめく十三夜
シベリアの話木枯し吹く晩に
飛行機の怖さ嗤った赤トンボ
美しく老けてエンマを狂わそう
袴を着ると花道ほしくなり
昔から銀の道行くなめくじら
今日逢える男に叩くパフの音
球根がカレンダーと手を握る
幸せは神や仏を忘れさせ
祈ること忘れステンドグラス見る
都合よい時に神様ほとけさま
くしゃみしたとたん忘れた程のこと
幸せだと思ふ平凡な暮らし
衣ずれが伎芸天女のおみあしに

豊中市 一瀬 福一

守口市 結城 君子

茨木市 堀 良江

豊中市 辻川 慶子

秋空を見たいと思う水中花
秋風に六十なりの身だしなみ
秋くれば秋の花咲く島の墓

岡山県 池田半仙

海の幸届いて山の幸送る

兄ちゃんに欲しい度胸を持つ妹

険の有る横顔本性かも知れず

岡山市 花田たけ志

すこやかで夕暮れ楽し左ぎき

黒梓にされる写真を決める欲
人当り最初の印象に騙される

岡山市 直原七面山

子の成功を父は信じて静かに居
真向いに課長が移って来て慌て

和歌山市 玉井豊太

スキー靴ご用納めを待ち焦れ
道草が抱いて真つ赤な彼岸花

大阪市 北山悟郎

多忙を自慢出来る老人会
極限に義肢だけだフアイト燃えている

河内長野市 植村喜代

山消えて雨の匂いが近くなり
手を合す父の姿を見て育ち

東京都 吉川一郎

女房は戦友ですと言える齡

アイデアは良いが予算がありません

大阪市 宮下とし

我が家程よきものはなし青畳

無口の娘ワインがきいて来たらしい

米子市 小村てい子

ファッションの街で考えているカラス

ヨガ教室短足だから出来た首尾

出雲市 久谷まこと

ストレスを結めた鞆が日銭追う

け飛ばした石も生きてる独り言

鳥取県 田村きみ子

真つ直ぐに行くのと逃げ道きつとある

北風も淋しい時はすすり泣く

倉敷市 田辺灸六

大手術耐えよと叫ぶ血の絆

点滴をぶらさげて未だ歩けるぞ

大阪市 富岡温子

旅帰りやっぱり家の茶が旨い

痩せ我慢小鼻ヒクヒク動き出す

守口市 森川まさお

十年來師匠は丸薬のみつづけ

洗い上げると厨の蟋蟀なきはじめ

鳥取県 乾喜与志

割り算の出来ぬ離婚はせぬことに

農守った醜い爪に自負がある

自選集

黒川紫香

土鈴また増やした秋の飾り棚
裏通り歩くさみしい懐手
寒い日に北から届く雪便り
駅裏のうまいコーヒと雑音と
熱が下がって死にたいなどともう言わず

野村太茂津

核心に人間が居る真理追う
矯めて矯めて背骨ポキンと折れぬよう
誰に遇うても眩しくはない眼鏡澄む
こちらから投了はせぬ駒捌き
臨機応変連帯は崩さずに

正本水客

三日坊主の男で少し筆が立ち
二度三度念を押されて顔をみる
濡れ衣がいつそ嬉しく乾きかけ

悪い取引やないなど嘘を少し混ぜ
細工は流々豆の木は伸びている

小林由多香

夢抱いて東京行の切符買う
週刊誌溜めてひとりの秋深む
朝顔のつるに窓からのぞかれる
禁煙を誓いおのれを確かめる
休肝日つくってまでも酒を飲む

米澤 暁 明

損はしたくないその目その素振り
遠慮して見るか相手はどうなさる
悪口も素直に聞ける土性骨
留守番へとかく聞き置く電話だけ
以下同文そんな表彰でもいいや

月原 宵 明

世の中はポケの一手と糸瓜揺れ

幾度か栄枯をなめたくすり指
もう嫁かぬ娘に紫がよくうつる
犯人にふる里があり母があり

歳老いた漁師は海を見るばかり

山内静水

大根葉おいしく一氣に太り秋
夢一つ一つ尽してくれる妻

妻だけを味方に一步たり退けず
矢面に立つやすらぎよ快感よ
爪まるく切るひとときのやすらぎよ

有働芳仙

白粉の方がたじろく顔があり
着せかえの人形になるアルバイト

揺れ動く心をかくす笑顔かも
三度三度惰性のように箸をとり
死と生の間を点滴埋めて行く

工藤甲吉

十二月窮する夢で目を覚まし
入院という策黒い霧の人

再会の握り合う手も齢をとり
ワンカップワンカップとて三つも飲み
ぐっすりと眠りに落ちる虫時雨

古きよき時代わたしも若かった

老練と言うより若いと言われたい

健康を戻し若さも戻したい

万歩計万には遠い日が続く

衰えてくると夢まで小さくなる

八木千代

流れながら桃は満干をくりかえす
ほとんどは熟れないままに林檎箱
土になるまで落ち梨のみずみずし

郵便受けからころげ出た柿の種
木守り柿冬の話は避けられぬ

児島与呂志

只一人あの世を誘う義理を持つ
情のある老いの型で歩行難

雑兵がまだ引きずっている炎

ほほえめば孫も笑っている童話

逆らえば女は遠い過去を言う

水粉千翁

箸割ってご馳走さまに成り果てる

花に問い花に答えて四季の愛

花匂う心真白きものとする

遙かなる道をわが足音に聞く
大道無門人間罷り通るべし

藤井明朗

ソウル四輪平和と勇気かみしめる
秋の味覚へ生かされている感謝
的をしぼっても力の差歳の差
四季巡る少し弱気へ冬がくる
長い冬こたつの守りが多くなる

藤村ノ女

秋紅葉嵯峨野はお喋りしたとき
秋晴れの碑を背に写す除幕式
句碑除幕同じ流れの友が寄り
仁王門ひと息入れている遍路笠
無為無策雲の流れを追うている

本田恵二郎

ここからが正念場だとおだてられ
老妻と気まま気ままのグルメ旅
過疎のどかビヨビヨビヨとよく育ち
三代目天晴れ時流に乗って漕ぎ
余生劇の続きは妻に書かせよう

大矢十郎

割かんへみんな私の顔を見る

金髪の首へとなびく金メダル

政治倫理悪事はばれぬ事にある

中古着せてくれたお国の無理も聞き

九州場所です拝啓天皇陛下さま

小出智子

鳥たちも帰ってきたという手紙

やさしさについっかかりと風邪を引く

ともだちを裏切り障子張っている

師と弟子の仲というのも洒落ている

それもその筈次男も二十六になり

阿萬萬的

Yさん外の日本画展にて

薬の屋根四季折々の詩を綴る

山肌を真赤に明日へ夕焼ける

帰り道夕陽に若い頬ほてる

湖北もう秋です水に雲動く

女ひとり水路に立ちて過去を追う

橘高薫風

西尾栗主幹の叙勲を祝う

豊明殿夫唱婦随もかしこけれ

陛下病み給い肅たる朱杯

お出迎え白菊黄菊並みいるよ

木杯へ川柳六十年なみなみと

川柳太平記 (127)

川柳の群像

不二田一三夫

東野 大八

「ぼくの親父というのは、借金することが天才的で、とくに家賃の踏み倒しは抜群のものであった。大正から昭和にかけて、大体、借家は三カ月分の敷金を入れるか、一カ月の前家賃でコトが済んだ。そいつを親父は悪用して一カ月前納したら最後、もう家賃は払わない。だが半年もほったらかしておくと家主は出て行けという。それを待っていたように、また次の借家をさがす。なんのことはない、一カ月分の家賃で半年間、タダで住むという寸法だ。だから夜逃げ同様の転宅を半年ぐらいごとにしていたわけである。しまいは市内に住めなくなつて河内へ落ちのびていった。

当時の親父は印刷工で、相当名の売れた腕

を持っていたので金まわりがよかつた。酒も煙草も賭けこともやらないが、女と相撲が好きた。大相撲はそのころ、一月と五月の二場所よりなかつたが、一月と五月は工場を全休してしまふのが毎年のことだった。

母は典型的な日本婦人で、それをじつと耐えて父についてきた。父も母もクリスチャンで、父の兄はアメリカで博士号をとり、母の兄弟はロシアの神学校出というマジメ人間ばかりであった。「電波新聞」昭50・8・20付)。一三夫は本名藤田怡佐夫。明治40年4月30日東京市豊島区生れ。三歳の時、父の破産印刷業)で西下し、大阪の蛇草に住みつゝ。八尾中学を中退、家業の印刷業を手伝いながら早稲田講義録で勉強、幼年期から腕白で、親

譲りの相撲好き、「昇り富士」という醜名で幼年相撲の大関を張り、親父を喜ばせた。また、自転車の曲乗りは女人はだしだったそうなの。

十九歳の時、仲間と映画と文芸『尖端』という同人雑誌を発行(昭5・1)、印刷兼発行人となり、「キネマ旬報が20周年記念号を出す頃、俺達も10周年記念号を出す」と意気盛んだったが、四号で廃刊。以後は新聞・雑誌の懸賞文芸に片っ端から投稿。昭和8年2月「サンデー毎日」の読者文芸に「一三夫のペンネームで投稿 見事入選」これが「一三夫の文芸もへの眼を開いたのです」(恒子夫人談)。

昭和14年国民体位向上の「張る胸、鳴る腕 光る国」が最初の当選標語で、その翌年には「一億の柱で建てよ大東亜」が三等入選(賞金十円)。二十三句選に入り、二十七円を一時に獲得している。戦後、生活費をはじめ娘さんの嫁入り費用など一切を標語でまかしたという凄まじさで、三年間に千三百句、標語入選日本一の記録保持者と言われたとある。戦後から彼の多彩な文芸活動はあぶらが乗り、標語、コント、川柳、漫才台本、ラジオのデイスクジョッキと八面六臂の大活躍ぶり、映画館の売店を経営しながら艶笑小説も手がけ、誰が見ても何が本職か戸惑う有

様

「昭和29年8月、落語や漫才たちが集まる『小ばなしを作る会』に初出席した。その頃、ぼくは「関西コント集団」のメンバーに入り、大阪日日新聞の『ウソ横丁』や新大阪新聞の『ユーモア・サロン』の常連だったからである。この会のスポンサーは質屋のオヤジさんで、質流れの時計や衣類を賞品に出していたため、これを持って帰るので家庭でも評判上々。この集まりで花月亭九里丸師が

「アンタ、漫才の台本を書きなはれ、五枚ほどかけばあとは私が引き受ける」

これがそもその漫才台本界入りのきっかけとなった（『漫才』昭43・7創刊号）。

これが漫才界の大御所秋田實と結びきずとなり、漫才作家の城秋田實主宰の『漫才』創刊のきっかけとなった。この本は、昭和52年、秋田實の死去により通巻三十六冊を出して廃刊するまで続く。一三夫の漫才の師は秋田實。川柳では麻生路郎である。

ふるくとも僕には仁義礼智信 路郎

蠟燭は自身を燃やして他を照らす

才能とは長い忍耐のいいである 秋田實

の二つの色紙が彼の晩年まで、自宅の茶の間にかかっていたという。

昭和51年4月、一三夫は『川柳寄席』という句文集を発刊した。A5判・約百七十頁のちよいとした豪華本である。

二十数年間、柳誌の編集をしているうち知らぬ間に句が活字になって残った。云うなれば川柳家が句集を出すのではなく、編集屋がその副産物を本にしたまでのことである」と、そのあとがきに書いている。

『川柳雑誌』時代の約十年間は、路郎主幹の『柳樽室』のあとに、『ペン』の散歩をかき、『川柳塔』となつてからは、後記約一頁分に

『ペンペン草』と題し、毎号軽妙な雑文をかきこと十六年間、以下はそのサンプルである。

★戦後になにかの川柳募集が九州にあつて賞金が大きかったかボクも応募した。これが特質となり、手島吾郎氏（北九州・番傘本社同人）から「標語界の重鎮が川柳も……」と選者としてのおほめにあずかった。

★本誌（川柳塔）の創刊当時、『川柳人』主幹の高木夢二郎氏から「標語界の大御所が『川柳塔』の編集担当者とは驚きました」と激励のおたよりをいただいた。その後は逝去されるまで東京柳界のおうわさをよくおよせくださった。

★川雑の本社句会が下寺町の光明寺にあつ

た頃、会場から市電の駅まで故北川春葉氏とご一緒したことがある。その時、氏は「標語をやめて川柳一本に勉強する気にはなれないか」と言われた。ボクは黙っていると「川柳は儲かりませんな」と付け足されたものである。昭和25年2月・川柳塔ペンペン草

昭和55年10月11日障臈ガンのため、この好漢は死去した。浄誓映現清徹居士。死去する間際まで、まだ川柳塔の編集の赤ペンを握っていたという。次は最後となったペンペン草の終章である。

★かつての『平安』時代の福永清造先生が拙著『川柳寄席』の書評に「何が本職かわからない男」と書いておられるように、いろいろなどこで悪名を売って来たが、いよいよ最後に残った顔『ペンペン草』まで消さねばならなくなった。寂しさとも悲しさとも言いようのない気持である。糖尿病如きに負けたことは口惜しいが、本誌をさらに発展させるためこのあたりで退陣するのもよいチャンスではないかと思う。良かれ悪しかれ『川柳塔』一本の同人」として編集に生きつづけてきた今日、一点の悔いも残らない。

★今回は「北川春葉」

誹風柳多留廿六篇研究

(三十八丁〜三十九丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

658 瓜田ンへ沓を入レに乗る留守見廻

本多「上五は前出。「見廻」は見舞と読むか。鬼のいぬ間に……ならぬ亭主の留守を幸いとばかり、下心を抱いて留守見舞に来る。

石田成「贊。

瓜田より不埒の出来る麦畠 二七18
くわでんハ元よりこたつもいましめる 二二4

多田「贊。

659 伊勢の留守床やみにする不届さ

本多「床やみ(闇)」は常闇のもじり。

伊勢参宮の参詣で亭主の留守に、床闇にして間男を働かとは不届きにもほどがある、なんと罰当りだ。

内宮へ外宮の参る伊勢の留守 九七11
女房も岩戸をひらく伊勢の留守 三九29

多田「贊。

660 すっぱんの名ハ飛込んだ時に付ヶ

本多「そのままの句。「すっぱん」は不忍池が有名だった。出合茶屋を詠んだ句にすっぱんが登場するが、ここはただ、すっぱんの名

の起こりは、飛び込んだ時にスツボンという水音からつけられた、というだけの句。

鈴木「贊。「成る程ナア飛び込んだ時の水音は、まさにスツボンだナ」と一人悦に入っている図か。

多田「贊。

661 籠かけハ藁へ柄杓て水をかけ

本多「藁の柄杓」は、籠屋が籠締めにする道具で、長さ五、六寸の藁をたばねたハケのようなもの。これを水にしめして掛けた籠をぬらすので、この仕草から柄杓と見立てたの

である。

句意は、薬のハケに水をいっばいふくませて、縮緬のしめしをしているのが、縮屋は薬の柄杓で縮に水をかけているようだ。

ちよんと木を入れぶん廻す桶の縮 八二 35
木を入れてから分廻す桶の縮 一一二 21

多田 〓 贊。

662 乳母か尻ほふばりかねる枕蠅

本多 〓 「枕蠅」は幼児用の小さい蚊帳。乳母の尻が大きいというのは約束事。

小さい枕蠅だから、添寝の乳母の大きな尻はともおさまりきれず、外へはみ出してしまふ。「ほふばる」という表現が可笑しい。

石田成 〓 贊。

寝せ付タ蚊帳へ抱き込ムうばの尻

宝十梅 一

多田 〓 贊。乳母の尻の大きいことをよんだ句切おとし平等院へ乳母がしり 拾九 一

三十九丁

663 俄雨取まけエ、といふ身也

石田成 〓 『川柳江戸歌舞伎』に本句と、たてでもするやうな形りで雨やどり

天二天 2

を引用し「尻を端折り腕を捲って駈出す形はどうしてもソレ取巻けエ、とでも言いたい姿である」とある通り、本句は俄雨に偶った時の姿を、芝居で捕手が悪人を取囲み、召捕る時の掛け声をかけんばかりの姿に見立てたもので、当時の人々が如何に芝居に親しんでいたかがしのばれる句作である。

八木 〓 「身也」は「身形り」の当て字か。

石田晋 〓 「身也」(そういう姿である)でいいのではないか。

小野 〓 「身形」ではなく、矢張り「身也」でしょう。

多田 〓 贊。

664 御婚礼おつしとて言て呵られる

石田成 〓 よくわからない句。

八木 〓 これは「御厨子」であろう。「ミツシ」だと婦人用の棚になり、「オツシ」だと仏具になってしまふ。御厨子を用いるのは、上級社会でのごと、下々の者はふだんあまりなじみがないから「ミツシ」を「オツシ」といつて叱られるという句。

多田 〓 贊。八木さんご明解。

665 品川へはまり衣のたてがき

石田茂 〓 品川は新宿、板橋、千住とならび、

四宿の一つで東海道の第一駅。大勢の飯盛女郎を抱え、遊所として吉原を凌ぐばかりに盛んであった。付近には武家屋敷や寺院が多くそこからの常連客で賑い、就中川柳では芝増上寺の僧侶と芝三田四国町の薩摩屋敷の武士とがそれらを代表している。

主題句は、安部貞任、八幡太郎義家の歌、

年をへし糸のみだれのくるしさに

衣のたてはほころびにけり

を踏まえて、近隣のドラ和尚が品川の遊里に入れあげた結果、遂に破門されたしまったといったところ。

大屋 〓 贊。

品川でころもなたてはほころびる 六二 26

多田 〓 同。

藤島茶六氏逝く

日本川柳協会理事藤島茶六氏は十一月十二日午後一時二十分、肝臓ガンのため、千葉市新町二〇一四の自宅で死去、八十七歳。告別式は十五日、千葉会堂で行われた。

茶六氏は本名・広司、明治三十四年東京で生まれ、大正七年から川柳を始め、川柳人協会会長もつとめ、一昨年、勲五等を受賞、千葉市亥鼻に句碑が建立されている。

苦い諷刺と辛口川柳

田 中 光 夫

川柳には諷刺が含まれる。だが諷刺は川柳を包含し得ない。

いささか唐突な、定理めいた書き出しになつてしまつたが、畢竟川柳は諷刺より広い一深いとはいへぬにしても一文芸であるということだ。ここでいう諷刺とは、主にルネサンス以降の西洋近代の諷刺文学のことである。

諷刺を創始したのは普通ローマ人であるといわれている。古代ローマ最大の諷刺家ユウエナリスは、「諷刺を書かずに済ませるのは難事である」と書いた。その精神を継承し、あわせて近代に固有の魂の苦悶を体験し続けた西洋の諷刺作家たちの作品は、「苦み」を主として展開した。フランスのラブレ、スペインのセルヴァンテス、イギリスのスイ

フト、そしてアメリカのマーク・トウェイン、いづれをとつてみても、人類の愚行と悪徳への過激な神経、高い道徳性、更には他に抜きん出た知的水準を備えた、一流の文人ばかりである。彼らは時に高みからの一瞥を人類に与え、豪快な笑いに幻滅を紛らしたこともある。『パンタグリユエル物語』におけるラブレはその代表であらう。又マーク・トウェインのように、童話じみた法螺話にその激しい怒りをくくるみ込む技を心得ていた諷刺家もいる。だが、『ガリヴァー旅行記』等の著者ジョナサン・スウィフトがそうであつたように、焰を吹き上げる氷のごとく、内なる怒りを、いささか酷烈にすぎる遺り方で吐露した諷刺家もいる。

手法こそ異なれ、西洋近代の諷刺家共通の課題は、人間が止めどなく墮落していく存在であるとの根元的な罪悪感を自己の魂の底深く蔵しつつ、時には他人事めかして、そして時には、己がじし地獄に落ちよとはかりの呪いを秘めて、人の世に蔓延する愚と悪とを糾弾することであつた。

「諷刺とは眼鏡のようなものである。見る者はそこに、自分以外の万人の顔を見出すのである。諷刺が世間で受けるのはこのためであり、諷刺を読んで不快感を覚える人の少ない理由も又ここにある」。初期の力作『書物合戦』の冒頭でスウィフトはこのように諷刺を定義づけた。諷刺の読者が、書かれた内容を純然たる他人事として読む時、諷刺家の意図を裏切る形で、その作品は広く「愛読」される。そして、そうした読者側の態度の中に、諷刺家は人間の自らの愚への底知れぬ不感症の淵を苦しめるとともに覗き見る。彼の諷刺にはますます苦みが加わる。そしてその苦さが頂点に達した時でさえ、読者はそこに諷刺家の狂気以外の何ものをも看取し得ぬという、幸福な立場を保持し続けることになるのだ。晩年のスウィフトは正に狂人と見なされ、その著作も狂気の所産と片付けられる場合が多

かったのである。「苦み」を最後まで追究した諷刺家は、遂には恐らく自ら仕掛けた狂気の「罟」に落ち込んでいく。読者はそのような諷刺家の演じる悲喜劇性に富むドラマを、飽きることなく鑑賞してきたのである。

西洋の諷刺家に比して、川柳を創始した江戸期の庶民はまだしも幸せだったといわねばならない。川柳に見られるのは辛さであつて、僕の知る限り苦い川柳というのは少ない。仮にあつたにしても、殊に現代川柳ではそうした苦さを中途半端に表現した句はあまり歓迎されないようだ。鶴彬の場合はどうかと自問してみたが、確かに彼の作品は、政治的弾圧への飽くなき抵抗精神の所産ではあつても、決して人間存在そのものへの苦い懷疑を伴つてはいないように思える。

僕は前に、「川柳には諷刺が含まれる」と言つた。そしてその諷刺は、せいぜい辛みを帯びた諷刺であると書いた。辛い諷刺とは例えれば次のような句の味である。

役人の子はにぎにぎをよく覚え柳多留(二二)
二位殿の入水年には不足なし(初代川柳選
句集、さくらの実、九)

できるだけ「温かい目」の感じられない句を選んだつもりだが、「二位殿の」の句には、

海の藻屑と果てた安徳帝への哀惜という別の要素が混入しており(この句の前句は「いとしかりけりく」)、「役人の」の句には、役人への非難よりも、庶民の側の羨ましさを契機を重視する解釈―確か山路閑古氏、あるいはヨシタラカンボウ氏の著書でみたように思うが―もあるのに逢着して、苦みの要素が又薄れたような気がしている次第である。

そこで思い出すのは、昨年の『川柳塔』誌に出ていた次の一句である。

裁かれているのだろうか寒すぎる

この句には自己についての苦い感懐が内包されてはいまいか? 決して積極的な自己糾弾には墮していない。いわば自己の存在への謙虚な懐疑が読みとれはしないだろうか。もしこの句が今や作者の直接の意図を脱して、完全に読者のものとなつたと考えていいならば、この句に軽いユーモアと、ちよつとドキンとさせられる体の、消極的な(いい意味での)自己断罪を読みとりたい誘惑に僕は駆られるのである。

さてこうした解釈が、僕の希望をはしなくも表明してくれそうである。「温かい目」が人間の生の肯定を通じて僕らを慰め励ますことは言うまでもあるまい。その種の川柳は、

常に僕らを唸らせ、膝を打たせ、生きる勇氣をも与えてくれる。ただ、多様といわれる現代川柳に、「苦み」を軸にした作風がもつと見直されてもよいのではないだろうか。西洋の諷刺家のごとき真実の、そして鮮烈な生のドラマが、川柳作家の内部で演じられるならば、その結実としての作品を見舞われた僕は当惑するかも知れない。しかし、そのような「苦い」作品が生まれるならば、とかく広くはあつても真の深みに欠けるといわれる川柳に、ますます文芸としての磨きがかかるのではないだろうか。なにも西洋の諷刺家のように、知識人の苦さを表現する必要はない。庶民の文芸としての川柳は、「庶民」の概念を「温かさ」一辺倒の発想から解放することによつて、その興行を一層増すものと僕は確信している。(筆者は同志社大学講師)

近畿文字放送作品募集

題「運」 森中恵美子選

3句 締切12月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

江戸川柳富籤志

(6)

阿達義雄

(七) 富と俗説・迷信

富の当落は、理論や研究では全く齒の立たぬもので、これには素人も玄人もなく、一の富や突留をものするのは、努力でも熱心でもなく、ただ偶然に近い現象である。

ここにおいて、人々は神仏に願をかけ、縁起や夢占いやその他、第三者から考えると、滑稽とも見える迷信にとりつかれるのであった。富を取るために、縁起をかついでいるのには、刃物で斬られた夢を見ると金が身に入るとか、富士の夢をみると幸先が良いとか、あるいは杓子、特に前に一の富を取った者の家の杓子を懐中して富場に臨むと御利益があるとか、何につけにつけ、富札を買うくらいのは者は大騒ぎをしたものであった。

これを、川柳や狂句によって眺めてゆくと、

江戸庶民の心の動きを、さながらに見ることができるよう思われる。

感応寺ゆうべ切られた人が行き天明(札一)

懐中の杓子を出していた(初・35)

西原柳雨翁は、その箸『柳多留講義初編』の中に、右の句を面白く解釈されているので、それを見ると、百両か千両か、ともかくにも、てっかい富籤を引当てた幸運な男を、近所隣の人々が寄りたかつて羨りがる場合、奴さん籤にあたる禁厭の杓子を懐から出して見せ、「サアサア皆の衆、わしに肖かるように此の杓子を頂きなさい。」

ふところへ入れた柄杓が物になり(宝曆九・梅)

籤弱いやつが杓子を抱いて寝る(五七・二)

不首尾な杓子割かえし計り取り(四二・20)

次は夢占いの句である。

不二の夢高ねでも買ふ富の札(六八・16)

茄子の夢見て漬け過ぎる富の札(九六・96)
「一富士、一鷹、三茄子」といって、夢の中でも、富士・鷹・茄子の夢は吉夢とされていた。

ある夜不思議の夢を見て富を買ひ(三五・21)
——どうも運の向いて来さうな不思議な夢だ。富でもつけてみたら、一の富の御見舞でも受けるかも知れない。よし、一分出して富札を買ってみよう。

それにつけても、富と夢についての面白い話が『耳袋』巻之五に収められている。すなわち、

●狐福を疑つて得ざる事

本郷富坂に松平京兆の中屋敷あり。一年かの屋敷に住める小人中間、老分にて屋敷の掃除などまめやかに勤めけるが、子狐、縁の下に生れしを憐みて食物など与えけるに、或夜の夢に段々養育の恩を謝し礼を述べ、何がな此恩を報ずべしと心掛けし由にて、来る幾日は谷中感応寺の富札の内、何十何番の札を買給へと教へしと見て夢覚めぬ。

さるにてもかか事有るべきにもあらず、夢に見しを取用ふべきにもあらずとて、等閑に過ぎて札も調べざりしを、暫く有りて谷中近辺へ至り、感応寺富場を立廻り見し

に、彼夢に見し何十何番の札、一の富にて有りし故、残念なる事せしと、其後は彼狐をいよいよ愛して、猶又富の如き福分もあれかと思ひしが、二度はならざる術にもありしや、其後は一向右様の事もなかりしとかや。

(八) 感応寺

「再校江戸砂子」巻三によると、長耀山感応寺について、「開山日蓮上人二世日源上人、ゆゆしき、日蓮宗の道場たりしが、元禄年中、天台宗に改る。本堂毘沙門天、毎月十八日に富執行あり」と記されている。

鶯は昔のままの感応寺

(三三・六)

寺は天台宗に改められても、感応寺の鶯は昔に変わらずホー法華経と鳴いている。

感応肝に銘じ百両取るなり(川傍柳初篇・33)

「感応肝に銘じ」は、感応寺に感謝の意味を現わしている。

百両いい錐で突く谷の中

(五四・14)

「谷の中」は谷中の感応寺を示す。

神明仏陀の冥感て百両 (川傍柳二・7)

これは芝神明と感応寺の功德を示唆する。

感応寺つけもせないで取りたがり

(安永元年・高2)

富札も買わないで、一の富などを望んでいる。

感応寺諸方に影のあるお寺 (五七・31)

感応寺の本富をあてにして諸方で影富をやらせた。右の蔭富かげふについて、幸田成友博士はその著、「江戸と大阪」の中に、「富が流行した時代には容易に札が買へぬため、定価より高い代を出して之を買った例もあり、また蔭富といつて、富の当籤番号を標準として勝敗を決する方法もあつた」と記されている。

(九) 一の富と持参金附の嫁

江戸川柳では、疱瘡にかかつて、特に醜くなった女や不具の女の特参金は百両ということになっていた。このことは、

百両で綿に包んだいもが来る (二四・35)

百両で一生あかんべいをされ (三一・14)

百両は消え易いがあばたは消えず(二二・17)

五体不具にして百両持つて来る (玉柳・10)

娘が付いて貰ひ手なし百両 (二四・13)

などの例句によつても知られよう。

それで、一の富の百両も、疱瘡などで特に醜くなった女や不具の女に付けられる特参金も百両であつたというので、次のような句が詠まれている。

一の富ほど附いたのを暮によび(五七・27)

暮には金に特に困るので――

富に當つた気でじやもつ面を持ち(川傍柳二・9)

右の句は年の暮の金に詰つて、菊きく面石めんいしの特参金附を貰い、一の富にでも當つたような氣でいるというのである。

もっとも、百両欲しさに醜い女を貰う決意をしても、もし一の富でも當つたならば、それを取りやめにするだろうといふので、

富が當ると縁談はやむ所 (天明二首・2) しかし、一旦持参嫁を貰えば、その百両は使果たしても、異様な本尊様だけが残る。

それに対しても、見兼ねた友達の憎まれ口を一の富と結びつけた句に、

持参金富でも取つて去りなせへ(八五・27) 憎い口富でも取つて去りなせい(一四三・26)

というのが見える。

この嫁を離縁するには、耳を揃えて百両の金を返さなければならなかつたからである。

それにしても、一の富を取つて、持参金付の嫁を追い出した者もあつたとして

富でも取つたか目つちか見えぬなり

(天明六・桜2)

右のような句が詠まれている。

(十) 搦つき減へりと手取り金

感応寺つきべりが先づ二割立ち(一一・15)

一の富に當るといふことは極めて稀なことであつたが、その一の富百両も、當つた

者にまるまると百両与えられたのではなく、富興行の社寺への奉納金、その他を引き去られるため、一の富百両が当たっても、その手取りは二割を差し引かれた八十両くらいのものであったという。

即ち、右の句は、その差し引かれた金を、米の搗き減りに替えたものである。

一の富を当てた時、翌日金を受け取りに出頭すると、丁重な御馳走をしたあげく、一割の奉納金の外に、世話役達への祝儀や後札の買入れ代などを強請し、二割も天引きされたことが、十返舎一九の『膝栗毛』の八編に見えることは既に述べたところである。

八十九両三分のとくがつき(安永元年・義8) 一の富百両に当たったが、自分は前に富札代を一分出してゐるし、一割の奉納金を納めさせられたので、実際受け取った金は差し引き八十九両三分であるというのである。

この句の前句を見ると、「はづみこそすれく」となつてゐる。これは奉納金などを気前よくはずんだというのであろう。

九合目の夢で手どりが九十両 (五七・29) 富士の夢を見て富に当たったことは当たつたが、九合目の夢であつたので、一の富の百両から奉納金を一割引かれて手取りが九十両であつたというのであるが、これは単純な数

の遊戯句であらう。

(二) 富の願・富の噂

富の願について詠んだ句に、

大伊勢屋沓文上げて富の願 (二五一・11)

願つたら出来さうなご富ヶ岡(九四・4)

伊勢屋というのは「けちんぼう」のことであるから「大伊勢屋」とは「大のけちんぼう」のことであらう。

富が岡八幡は深川の八幡宮であるが、何か富突に関係ある神社の様に思われ、願つたら富にでも当たりそうに思われるという駄句である。

一の富を取つた噂を詠んだ句に、

感応寺といへばおらが近所にの(二一・15)

「そうぞう、感応寺といへば、おらが近所にのう、一の富を取つたやつがあつてのう……」と羨ましそうに噂をしている情景。また、

町内でごん明ごんめいに知る感応寺 (二・25)

右の句の前句題が、「つらい事かなく」となつてゐるのと考え合せてみると、この句は、感応寺の富に当たつたことを隠していても、奇妙に町内に知れ渡つてしまうことを言つたものであろう。

中には、一の富を取つてから、何となく挙動が変なことを、

富を取つたを隠して、疑はれ(柳菰・初27)と詠んだ句も見える。

その他、「もし富を取つたら」と念じて、いろいろの空想・想像をしてゐることを

富を取つたら先づ家をかう建て(二四二・8)

御不勝手或夜の夢に富を取り (二〇〇・15)

不動様どうぞ富をに聞きあきる (六五・15)

——目黒の不動様——

なお、『徒然草』の第一段にある「いでや、この世に生れては願はしかるべき事こそ多かれ」の文句取の句として

いでや此世に願はしき突留 (二〇八・24) などの句がある。

「突留」というのは百番目の錐先に突かれたものを「突留」の大当たりと言ひ、二百両または三百両、稀にはこれを千両とした富突である。

ただし、次の突留は富突の用語を借りて、小野小町の許へ九十九夜まで通つたという深草の少将のことを詠んだもので、

突とめのはづれ少将くやしがり(九〇・5)

右のことは「九十九番で突留をおっぱづし」の句と照し合わせてみると意味がよく分かる。「百夜通えばその恋が叶つたであらうか。それは小町だけが知つたことであらう。」

一人吟

秀句鑑賞

—前月号から

岩本雀踊子

豪傑という酒呑みの血が継げず

遠山可住

まだ酒がうまい百までいけそうだ

石川侃流洞

酒は自慢で深酒するものではない。うれしくほどの量で呑むもの。「酒は呑むべし、呑まれるべからず。」酒は百葉の長とか、年輪も長女と同じ桐の花

石垣花子

昔の五郎劇の「桐の木」を思い出します。

原作は『川柳雑誌』に籍のあった楠本黙念人さん、一本の桐の木に父娘の絆をからませた人情物にホロリと泣かされた頃から桐が好き。私の名刺も桐の木目です。

齒から目に移り始めて来た神話

波多野五楽庵

目からあれに移って呆けはじめ、神話ではありません。実話です。

熱いうち打てばよかつた向う棹

桜井千秀

考え過ぎましたネ。結果論になります。燃えている時が勝負です。青春は戻りません。私にもそういうことがあったかも知れませんが、けたかな妻がやさしく見えてくる

玉置重人

ぼけてるのではおまへんで。一番近い奥さんのこと「燈台もと暗し」とか。闇無限しあわせ探す指に馴れ

堀江正朗

誰にでも作れる句ではありません。正朗柳兄には頭が下ります。いつまでもお元気で。あと味は君の笑顔ですくわれた

政岡日枝子

良い友達がいるから救われることが度々ある。友達を大事に、いつまでも仲よしに。

手の中の蛍を好きな掌に移す

久保正敏

この方にしてこんな色気のある句、恐れ入りました。

思い違いの傘がいつぼん濡れている

嘉数兆代賀

一本の傘、濡れているのは貴女でしょう。噂や告口に迷わぬように信じることですよ。

明日へ向って歩く二本の足がある

林瑞枝

希望のある明日へ進む夫婦の足でしょう。いつまでもお仕合せに。

花宴ふたりの愛もこのように

中原みさ子

嘘でもよい、やさしい言葉にふれると苦勞

を忘れて幸せだなと思っ。それが女です。良妻です。子どもを巣立たせた老夫婦もこの句のような心境になることがありました。ところてんだと割り切り少し楽になる

堀端三男

定年近くになって肩叩きされ、後進に道をゆずるといふきれいな言葉で勇退したが、心残りの淋しさもある。後がつかえるのではみ出してしまふのをとところてんだとあきらめたユ一モアのある句。失礼しました。

折釘を集めた様な雑魚寝かな

有働芳仙

折釘の表現法が見事に生かされている。そんなこといくら何んでも夫婦でも

山内静水

静水さん、こんなややこしい話、結着つきましたか。お尋ねいたします。

土橋螢

世界中でたった一人の父を忘れている人が何億人といることだろう。さて、自分はどうだろうか。

川柳塔柳箋

一冊 二〇〇円

送料 二四〇円

なるべくまとめてお申込みください。



黒川紫香選

鳥取県 山根 八重

コスモスが力いっぱい咲いた朝
赤とんぼ野菊の花が好きらしい
飴玉をひとつ口止め料として
円満を入れる袋を妻にやる
よくしゃべる女の背なに隙がある

尼崎市 児玉 歌子

母さんの涙でいつも眼が覚める
頂点の読みはテンポを崩さない
土壇場で振るサイコロの潔い
司会者の余裕静かな間を持たす
振り返る地図が私の中にある

浜田市 中尾 まゆみ

手のなかへ刹那の愛を掬わねば
花いちもんめ遠い言葉が風になる
すこく美味しい区切りをつけた日の紅茶
手加減をしている父にある温み
キャンドルを吹き消すうれし涙かな

静岡市 沢田 きん

留守らしい隣のベルが鳴っている
素直さを持って生きたい女道
ライバルが側に居るから燃えてくる
例えばの話で嫁と押問答
友達というより姉の様な人

熊本市 大川 幸子

明日が見えたらこんな事してられない
転ぶのを石の所為だとなすりつけ
引出しの一つ一つに夢を詰め
おでん屋で身の上話などしない
目立たない仕事で女忙しい

熊本市 宇野 昭代

鯛ピンと跳ねて七夜の祝い酒
二階から腹がへつたら下りて来る
メンバーに鴨になりそなのが一人
メモ帳へ切り札一つ書いておく
平気よと言った涙がこぼれそう

八尾市 高杉千歩

弱いから苛めに会うと限らない
夫婦箸二組揃え除夜の鐘

お姑さんと呼ばれ戸惑う厨の灯
下積みの気楽さ畦道知りつくす
ともすればお節介になる旅靴

今治市 野村京子

しのび逢う根のない恋へこぼれ萩
雷鳴へ愛の時間は止めたまま

コスモスが風へざんげを深くする
コーヒーの香りの中にある孤独
完結のドラマは蝶を乱舞さす

名古屋市 藤井高子

木杓子と遠いいくさの話など
羅漢の背へ少し情けも呼ぶ冬日
うなずいている間に一年もう過ぎる
うろこ一枚逆立て女だてらにも
分別盛りの拳が妥協考える

広島市 流奈美子

ひとときの稚気笹舟を浮かべてる
目薬の沁みる雫の先に亡母
留守番の犬が誰にも尻尾振る
コスモスの微笑に出会う無人駅
公園の風は美事な旅人よ

吹田市 井上照子
ふりむいて欲しくて声を高くする

抜け穴を確かめ虎の口のそば

ピックアップすると固まる人の群

ほほえみに弱くて心揺れ動く

青空に気持が逸る松葉杖

高槻市 笠嶋惠美子

眼を閉じて聞けばこころに響くはず
準備中なのに冬の使者が来る

ひとり旅詩の一節を諳じる

ローカルのバスに運転手と二人
糸底に不満が溜る十二月

鳥取市 小谷美つ千

報復のペンを握ったまま眠る
吊橋の下に観光バスがくる

父と子が渡る橋なら架けられる
蝶になることに成功した雌だ
答えてはくれぬ男の靴磨く

長岡京市 木本如洲

檜山のけむりと消えた影法師
いつか来た街で昔の風に逢う
商売へ笑顔たやさぬ妻がいる
空っぽの財布が森に捨ててある
鶴を折る指は微熱を抱いている

富山市 舟渡杏花

気配りが足りず枯渴の大自然
千匹の蝶の乱舞の中にある
点滴へ媚薬をすこし悪企み

窓口で法定老人かしこまる
民謡のうまい男と組むべア

京都市 松川芳子

煙草屋とポスト一緒に用を足し
ゴム長で稼ぐ女の胸の張り

美しく老いるてだての積木積む
差し入れへ母の嬉しい舌つづみ

病室へナース時々息抜きに

半袖に未練残して秋の風

豪邸の主は小柄な老夫婦

大変な軒を聞いたツアーの宿

相席で旅の娘のいいはなし

夢ばなし話す相手の居ぬ哀し

夢のない男と歩くビル谷間

電卓が冷たい顔を出す師走

生きている自覚をくれる茄子の艶

もう走る朝もないまま靴磨く

快復の目安がついた屍が一つ

秋は去りぬ外人墓地の灯が消える

人間失格唾うおんなに裁かれる

惜しまれて老人ホームへ捨てられる

西川流に生きて舞台の鬼になる

海満ちるとき母の仏画を描きあげる

久留米市 鶴久 百万両

うつむいてばかり居て壁破れない

口下手の母味つけは上手です

日銭追う思案などする暇がない

礼服を着ると厳しい顔になる

長生きの競争しましょう老い二人

尼崎市 森安 夢之助

中国トルファンへ旅

暴走族はひとりもない砂あらし

トルファンの土間で真赤な独楽まわす

砂あらし真赤な花をCMに

会者定離笑って悟空猪八戒

火焰山で平山郁夫の絵が売れる

めでたして終わったドラマ物足らず

追い越せば追い越しに来る車間距離

ふるさとはいいな素足で踏める土

神様は正直駄目は駄目にする

役不足言わず張り切る二度の職

飛行機で来て金の相談する娘

ダイエットの相談受けているサラダ

青首大根首を洗って生きてます

わたくしを耕している田舎

口止めをされると話したい秘密

旭川市 朝倉 大 柏

富田林市 池 森 子

静岡市 片 平 静 代

窓開けて思わず冬の風を知る
条件が揃いすぎてから困る
若作りしても顔から年を取り

尼崎市 吉永伊三郎

束ね髪弱くて強い女です
あつさりと脱いで樟脳入れておく
ネックレス輝く胸のふくよかさ
手枕がしびれて立てぬ昼ドラマ

町田市 上鈴木春枝

お喋りな子から近所へ漏れて行き
お返事が手紙で欲しい手紙書く
独り言ですと本音を聞かせられ
胎動へもう親馬鹿になつてます

京都市 木村たけし

鬼と遊んだ森は午後から雨になる
看護婦の指美しい梨をむく
灯の一つと明日の策を練る
石仏の笑顔はコント持っている

東予市 小山悠泉

焼き物教室少しいびつなつばが出来
熱の子へ付き添う妻に夜がしらみ
信じ度い信じ度くない噂聞く
太陽に叛く男のサングラス

出雲市 金村青湖

竹箒庭へ落葉を待っている
古代史に少し興味がわいた秋

湯どうふで燗酌にする秋灯下
松茸が二本で奢る夕餉なり

和歌山市 山口三千子

苦しんだ事は忘れている遺影
びしょ濡れになつて夫の迎え傘
セールス撃退大きな法螺もたまに吹く
レンタルで今日一日の晴れ姿

和歌山市 田中みね

ああ中年みてよお腹の皮下脂肪
拾わねば自分で蒔いた罪の種
ルージュ引くこれで仮面の出来上り
憧れも冷めてしまえばただの人

静岡市 久保きぬ

叱られた思いで残る壁の傷
新宅の屋根にローンが腰を据え
人間の弱さが神に触れたがる
土を踏むところがあつて老い達者

藤井寺市 高田美代子

その先を聞きたいロバの耳になる
てっぺんに立つと余計な物が見え
名も知れぬ星に私はなるだろう
御堂筋相合傘で来るところ

和歌山市 堀畑靖子

駅からは遠いがみどりある我が家
哀しみを隠す香水胸元に
無防備になれるあなたの腕の中

夜遊びの許可を得てます夫から

和歌山市 田中輝子

カムフラージュするに程よい月明り

何もかも捨てると軽くなる心

底力あります涙拭き終える

避け損ねた風を素直に受けている

香川県 上藤多織

カルチャ―へ脳の流れを変えに行く

テレビからお安く夢を買って寝る

日課のように猫と遊んでいる無策

三年は生きる気連用日記買う

西宮市 松本一郎

週休二日妻の負担を重くする

さりげなく旅の土産を渡す人

生きているとつぶり山の湯につかる

再会も別離も知ってる港の灯

兵庫県 東浦砥代

涙壺尽きて鏡と語り合う

世話焼いてやかれて母の夜が長い

すらすらと出る言い訳に嘘がある

中年の自惚れを買う試着室

岐阜市 渡辺杏村

円安が明日にも響く小商い

木枯しに負けてくぐった縄のれん

ストレスに負け脱毛は情けない

カレンダーやつと間に合う年の暮 西宮市 秋元てる

拾うた恋お巡りさんへ届けたい

窓の大きい家にあこがれ嫁くという

占いに凝る母が居てまだ独り

サボテンが咲いたと嫁の長距離電

尼崎市 鈴木良征

泣いたらあかん男はじつと空を見よ

雑学がすこし役立つ六十路坂

金バッジ付けたら金が欲しくなる

そろそろと焦りが見えてきた娘

尼崎市 的場十四郎

煙だけひろげ火種かくれてる

それとなく自慢してます指ダイヤ

新調の服に目立つ赤い羽根

にぎりめし開けば温い母の私語

静岡市 三浦つね

生活に余裕ができてゴミも増え

好物が何時か変って喜寿となり

労われば花も素直に返事する

虫のいい返事待ってる子の手紙

相生市 中塚礎石

寝転んで濡れ手で粟の本を読む

組む足の視野に漫画を広げてい

カツギ屋の履歴かくした立志伝

白い指時給に追われて動かない

熊本市 黒田 緑

鉛筆のキャップに口止めされたメモ

青い月向きを変えたい転轍器

真直ぐな定規で引いた線ゆがみ

指切りの歓喜が今も残る指

熊本市 北川 一進

無料では食べた気がせぬ胃の調子

失言にしては本音を言っちゃまい

同業の広告だから見逃さず

のらくろの漫画の本は祖父の棚

熊本市 高野 宵草

主導権妻に渡した定退後

炒り豆を噛める歯があり万歩計

子選にも落ちる日本新記録

目をさます木犀の香を吸いに出る

貝塚市 池田 寿美子

みちのくの旅

松島や今日の青空日本一

夕映えに船頭の情最上川

こだわりを捨てて十和田湖エメラルド

奥入瀬に命縮めて悔いもなし

豊中市 三宅 つえ子

天守閣明日を信じて疑わず

ひとり旅波にあしたを聞いてみる

あまたある星の一つが気に懸かる
祭すみ母なる星と闇にいる

大阪市 亀井 円女

輪の中にまだ生きている父と母

三面鏡が私の老いにも申す

らくがきの真犯人はもうはたち

程のよさ心得ているににくい嫁

岡山市 松本 元江

遠慮なく飛ばすジョークにあるなさけ

運転がとてもし上手で話し好き

とても小さなことでもめてる凡夫婦

行き先は言わずに秋の誘い風

島根県 加本 義良

靴の裏我が生態のままちびる

精一ばい生きて悔いなき蟬しぐれ

糞虫の覗いて見れば世は広し

山茶花に去年の愚痴を聞かされる

静岡市 安本 孝平

仕合せへ家族ぐるみのメロドラマ

挑戦の意欲まだある土踏まず

接点で男結びが解けはじめ

幸せを知ると靴音軽くなる

静岡市 大石 たき

気晴しの酒のうまさは格別だ

お人好し財布は何時も軽くなり

いい話胸まですーと軽くなり

御主人がお留守と聞いて長居する

寝屋川市 太田藍子

少年が無口になった変声期

傷ついた少年らしい正義感

母さんのお古も似合う年となり

空港を発つまで笑顔時の人

熊本県 岩切康子

意気消沈壁越える知恵わいて来ず

悪運をせいっぱいに乗り越える

新調のズボンに駆け寄る犬を打ち

初耳と補足させてる聞き上手

岡山県 千原理恵

招くだけ招いてめっぼう酔うている

子には子の主張があつて育ちゆく

身勝手な男に夢を流される

終の章とてもきれいな足跡だ

静岡市 三井三津子

兄弟に個性の違う子が一人

紅葉の道へ足向く万歩計

腹癒せに別れてやると言ってみる

来るはずの人が来なくて考える

尼崎市 野瀬昌子

電柱の陰に痴漢が待っていた

松茸を思案しながら買いました

いさかいかいもホドホドはする親子です
渡月橋十三詣りの子に出逢う

尼崎市 山田保蔵

千手仏どの手でひしと抱くだろう

逢いながら訣れのことば選んでる

にぎりめし麦が入ってはずかしい

婆さんに内緒の酒で口もつれ

愛媛県 八塚三五島

泥んこの顔に期待をふくらます

誰にでもおんなじ音で鳴る太鼓

凡人の槍がそろっている恐さ

誰にでもついてゆきたい迷い猫

酒田市 永沢裕子

妥協せぬ意地が計画遅らせる

お天気の挨拶だけで和を保ち

のし袋浮世の義理が見栄を張り

酸欠に喘げばいつも四季の歌

大阪市 今西静子

半生は水の流れに似て無策

漬物を漬けて凡妻旅にでる

ベランダで育てた茄子を切りおしむ

夜警の任果して愛犬よい眠り

尼崎市 尾宮弘治

言い過ぎて暫く溶けぬ角砂糖

喝采はいらぬこれから無に生きる

孫に逢う車窓の雲が美しい
妻を乗せゆつくり廃品回収車

尼崎市 木下 義嗣

だんじりがもつれて走る秋祭
いささかの旅愁を感じずる山の宿
欺された同士で飲んでる屋台酒
膝抱いて内緒話がかかり

京都市 小林 英子

諸行無常鐘のひびきも秋の彩
慈母そして夜叉にもなった遠い道
主張せぬ男が軽く出世する
眼がうるむあなたのたった一言に

岡山県 土居 ひでの

祝電が舞い込む庭の応援歌
少年の地図高くたかく夢を盛る
芋掘りの園児に農の汗を見せ
肩書が切れて出歩く父の靴

鳥取県 太田 幸枝

機械化に飽きて匠のノミに惚れ
キヤッシュカード要らぬ世界へ友が逝く
笑顔して手術に行つて還らない

米子市 新 正子

みじめだな今日も論吉と夢であう
切る日だけ決めて少女の長い髪
方言が駅で私を抱きしめる

川柳にとつと笑つた患者部屋
要件を言いそびれて見送られ
セキレイ逝き庭に小鳥の声しきり

佐賀市 江口 万亀子

新築の門に僕の名見なおした
夏のラブレターは灰にして終る
只善人で金のことなど無頼着

尼崎市 明 敏之

悪筆も個性があるとおだてられ
秋風にさそわれ地図を出してみる
地図広げ息子の赴任先捜す

尼崎市 中 澤 向 西

祖父が来てもつれ話も晴れてくる
湯煙の中の女は美しい
肩書が多くて名刺重くなる

広島県 森 川 抜 智

みなりかまわぬのが先生です
テレビまた一休さんに変えられる
年寄つてから化粧品吟味する

鳥取県 西 浦 小 鹿

港には地獄を知つた船が入る
カタログの豊かな夢に踊らされ
均等法に翔んでる女が旗を振る

和歌山市 森 茜

まだ人が住まぬマンション鳩が住む
疲れまず足が知ってる帰り道
お帰りとねぎらつて月すぐ隠れ

十和田市 阿部 進

子育てのペースを祖母に乱される
義理がたい犬がしつぽを振っている

同じこと考えて居る老夫婦
守口市 森川 春子

サイクリング史跡めぐりは地図のまま
お隣の赤ちゃん六カ月の声

出迎える孫とおいしい夕ご飯
枚方市 森本 節子

今日も一つ自作自讃の壺出来る
どこをどう洗っているのか長い風呂

こおろぎが部屋に入って秋たけなわ
吹田市 西岡 豊

飲む程に境界線がずれてくる
骨を抜くお酒をどんとのませてる

仰向けのプラネタリウム眠くなる
寝屋川市 宮崎 菜月

旅の人今日も来ている諸子釣
金木犀散ってふたたび地を飾り

スリナムという国探す金メダル
伊丹市 小熊 江美

無人駅裸電球灯るのみ

セットした髪が大事で寝られない
庭掃除してれば満足そうな父

尼崎市 佐藤 美代子

冗談から逆立ちをするハメになる
母の胸初サラリーの石光る

ブロックから垣根にしたら輪が開け
静岡市 浅子 まつゑ

出無精の妻と連れ立つ美術展
誉めたのがよかった運がついて来る

おしどりと見えた他人の蛇の目傘
島根県 菅田 かつ子

父親になつてもやはり頼りない
嫁さんの元気が良すぎ茶碗買う

大阪で出雲弁聞く懐しさ
出雲市 金森 知恵子

ただ一步譲つただけで生むゆとり
裏窓の住人鳩が寄ってくる

影の無い自分がこわい九官鳥
和歌山県 森 三枝子

きれいなと言わぬ屋台のコップ酒
世話好きな女の声がよく響き

一巡りしてから買い出す市場籠
京都市 渡辺 圭坊

中国の旅

仏教伝来 絲路シルクロードを経て白馬寺へ

京都府 渡辺 圭坊

白氏の詩墓前に吟する老詩人
仲麻呂を李白哭した興慶宮

鳴門市 八木芳水

悩める子漫画だけなら見てもいい

触れた手の温みに通う師弟愛

借りやすいローンが容赦なく責める

岡山市 中嶋千恵子

秋夜長編棒ひとり喋りだし

色あせた夫婦に炎える曼珠沙華

五歳児が笑い袋をどっさりと

岡山市 土居みさえ

それからの女真っ赤な服を着る

迷いからさめてさらさら海苔茶づけ

ふる里へ母あり今日もゆうパック

唐津市 野田旭恒

金釘流で書いた祖先の系図表

思い出を七色載せて違い棚

腹時計あてにしたけど狂ってた

大阪狭山市 桜井莊次

輪になった人垣のぞく好奇心

耳の痛い話をさけて通る耳

親を見て親が乗り気になる縁談

堺市 神原文

子のピアノ ローン終った音で鳴り

盆栽はもっと自由が欲しと言ふ

長雨を抜けた紋白蝶の舞

鳥取県 伊吹富恵

点ほどの虫の命に目を見張る

木犀の香にさそわれる宿の下駄

捨て台詞それは聞かないことにする

大阪市 神保拓生

落柿舎をたずねたずねて嵯峨の奥

ある野心ワイングラスの下に敷く

コインランドリーで味わう孤独感

鳥取県 菖野茂

父親の汗と拳を子にみせる

偶然の出会いで絆太くなる

遠くから母の声聞く夕暮れに

岡山市 大石あすなろ

割勘でゆこうと言うのに見栄を張る

核心にふれてゆくのがこわくなる

フィーリングが合いましたネと格好つけ

寝屋川市 河合時弘

一畳の自由到老いの高いびき

時々は喧嘩するのも錆おとし

人が人裁いて喜劇の幕を閉ず

岸和田市 三輪通彦

男下駄並べ弱みを見せぬ寡婦

同じことしても兄だけ叱られる

年齢の違いが判る伝言板

久留米市

中垣米之

モンローの足の裏だけ似てた亡妻

浮気なら許しもしようシヨードから

墓参りそろりそろりと列がゆく

大和高田市

寺脇三倉

予備校へ通行手形買いに行く

お開きに銚子の底にある未練

泣かされた映画へ外が眩しすぎ

宇都市

中村三良

遠い電話が過去の花火の音に似る

砂時計に忘れた恋の音を聞く

期待しない答が波を持ち上げる

豊中市

村上とく子

方言へトンチンカンな返事をし

試着室で女ポーズをとってみる

式服も脱がず煙草に火をつける

新潟県

高野不二

瀬戸大橋人より先に見た自慢

割勘でやっぱり得した呑みっぷり

人一人値札がついてた保険金

大阪市

榊本落児

髭刺ってサラリーマンの顔になる

雀には遊び相手の鬼瓦

狎犬が与作の恋をみつめてる

大阪市

島路太郎

手間ひまをかけたおかげの菊の花

わたしらにかかわりもないリクルート

靴の紐結びなおして秋の旅

高石市 宮田純一

いっそのこと切っちゃおうかと医者言う

足跡がここで途切れて推理めき

C席は双眼鏡いる宝塚

岡山県 福原辰江

定年のそれから自由に流れます

嫁がせて帯解く母のため息か

コスモスが淡く揺れます祭り笛

岡山県 後安ふさえ

善一つ積んで心も満ちたりる

嫁が来て我が家は一足早い春

コスモスの笑顔に迷う花ばさみ

河内長野市 大西文次

禁煙の決意に妻は笑うだけ

ままごとをした美代ちゃんの一つ屋根

停電というロボット致命傷

島根県 松本聖子

木枯しへせめて一汁添えようか

残業が風呂から拝むお月様

仏壇へ愚痴を並べて安らぎぬ

熊本県 増田一乗

居ながらに森林浴に浸る幸

履歴書に消したい箇所もあった過去
押売りを軽くないなして争わず

唐津市 浜本治幸

平穩に生きてる日々の空しさよ

朝起きて何をしようか老いの日々

新築の夢は港がみえる丘

鳥取県 黒田くに子

母さんのぐちは月末金がない

親ばなれあつさり少女風になる

トップが二人いるから摩擦するんだよ

岡山県 牧野秀香

チャンネルを廻せばソウルに手がとどき

五回目の敬老会へ背を伸ばし

コスモスに乙女心がゆれた日も

呉市 岡田寿美礼

親がわり心配かけた兄慕い

相撲好き陛下テレビで慰われる

亡き母の歳を越しての敬老会

青森県 福士トキ

年の功心が素直になつて来る

葡萄棚くぐつてこの家の客となる

愚痴だけは言いたくないが女です

広島市 名和喜一郎

窓際族袋綴しなど教える

高飛車に出たら桂馬が飛んで来た

うれしくも楽しくもなし嫁にやる

八尾市 向井しづ子

運動会平癒祈念で音静か

首横に振つてたけし城に退屈す

シンクロはあしかの様な手の動き

兵庫県 酒井靖子

一粒の苺がロマン匂わせる

罪一つ背負うて渡る丸木橋

破られる地図へもしやの虹を描く

岡山県 福原悦子

減反はどうあれ豊作鎌を磨ぐ

咳一つ我が存在を主張する

お隣から真先に来るお赤飯

大阪市 堀口欣一

幸福はわが子の頭なでるとき

鉛筆を削らされてる新入社

地下鉄へわずか五分という団地

兵庫県 奥野テル

里の川大根洗った日が恋し

十五夜の光り冷たく虫を聞く

月見草だまつて朝の風に揺れ

岡山県 富坂志重

一坪の菜園に七種の種を播き

表彰状かける所ない兎小屋

菊でさえ杖ついたのとつかぬのと

ハネムーン送らないよと父ひとり
たてこもる拗ねたお城に風の音
平素はと賀状の度に詫びている

鳥取県 乾 隆 風

へアルックまるで鳥の雌雄だな
切り盛りの上手なエプロンに惚れる
退職に似たり古畳を替える

今治市 渡 邊 伊 津 志

カナリヤの無心歎きを消してくれ(義父死亡)
芍薬の花が輸血の色に似る
龍宮の魚が見える箱眼鏡

東大阪市 太 平 太 一 郎

店頭に季節が失せて空が荒れ
もう一人の自分と語る庭に秋
酔う程に校歌で更けるクラス会

兵庫県 森 脇 和 子

易の灯に縁のなかった遠い人
ネクタイの赤をえらんとどぶ嚙
四股踏んだところで覚めた犬の夢

吹田市 山 田 里 子

原爆の痛み持つ友にこやかに
女ばかりの席へ女将の気の配り
色白を隠す男性化粧品

泉佐野市 大 工 静 子

無花果を亡夫の位牌に二つ三つ
訪れた客見定める簾ごし
種蒔が終って探す移植ごて

富田林市 加 藤 ミツエ

夫の三回忌を迎えて

読経の声亡夫を偲び手を合わす
今私の頭の中は走馬灯
仏壇に亡夫の好きな酒コーヒ

鳥取市 西 村 黙 光

怠け者今日もダルマに叱られる
えびす顔金歯が覗く株相場
三匹の猿がちよろちよろしてならぬ

堺市 近 藤 豊 子

ポルドーは遠い河内にワインあり
フランスの田舎ままごとにもワイン
アグネス論争子供の声が聞こえない

羽曳野市 麻 野 幽 玄

寝転べばコスモスだけの空となり
病窓の雲が絵になる秋の空
面会の妻へせめても髪をすく

和歌山県 田 中 隆 積

ソウルオリンピック

経済のようにスポーツいきませせん
外国にお家の芸をとられけり
清風のコンピにカメラ向いたまま

カーターも招かれて来る土佐の国
高知市 山崎一求

桂月碑冷酒雑魚の酒供養

氏神も荒れて淋しい過疎の里

奈良市 米田恭昌

押売りが奥さまと言う耳障り

若作りして探して老眼鏡

赤提灯ゆみという名の里の味

岡山県 後安江山

母と娘の豊かな対話秋を活け

日本の味最高の味握り飯

かたくなに意地を通した無口な日

島根県 岩田三和

お元気にイベント中止して祈る

手をかけております山のワサビ谷

お姉さん裏地は赤い方がいい

神戸市 岩田信義

崖っ淵立った男の器量知る

母に似る顔を見直し鏡拭く

鶏頭の赤い気炎に抗えず

夜警服しっとり濡れる露しぐれ

遊覧馬肥ゆる暇なく稼がされ

炭住に人なく瓢箪棚残り

羽曳野市 福田満洲子

御平癒を祈願しつつ

御重体憂えるごとく秋霖す

走らずに歩いておこう更年期

知り合いをねぎらう度に赤い羽根

静岡市 小木久子

甘えしか知らない女飽きられる

サルビアが真赤に咲いて無人駅

大阪府 柏木八重子

赤とんぼ飛び暮れるまで種をまく

山の辺で夫によりそい歩を合わせ

豊中市 田中道胤

妻の選抜けた句だけを投句する

買って来た本は読むとは限らない

和歌山市 丸岩晏

腕白をおぼえた柿の木が今も

好かぬのにあの顔ばかり夢にくる

米子市 小塩智加恵

孫の声聞いた今夜は眠れます

ポーナスの無い生活に馴れました

兵庫県 円増貞子

これという思案ないまま夫婦独楽

良い事のありそう覗くコンパクト

大阪府 川原章久

夜警一人月下美人を満喫す
飽食の鳥も残す木守柿

兵庫県 倉垣 惠美
すり切れたモンペで改札まで送り
片方のくつ下出てきて夏が去り

岡山県 伏見 すみれ
白雲悠々気ままに大空流れてく
口癖にもう飽きましたお勉強

岡山県 森下 正子
岩田帯しめてママだと自覚する
淋しさに歩けばブランコ揺れている

大阪府 山北 三三三
孫の絵を見てると孫が目に浮ぶ
母の日に母を泣かせるカーネーション

吹田市 大沢 宙宙
退屈で伝言板に本音書く
減量へヘルトの穴が一つ減る

藤井寺市 菊地 繁男
年中無休女房元気でいるがいい
忙しい忙しいと言いつつ昼寝する

静岡市 小幡 芳男
風邪声で今年の蟬が鳴いている
バネのない椅子に仕えて二十年

岡山県 杉本 伊久栄
ウインドの四桁の服は目の保養
何時の日かあの橋渡る日を思う

和歌山市 前田 美子

病む家の庭のコスモス咲き乱れ
つつがない暮し大事と思う日々

吹田市 山本 希久子
迷ってる場合でないと背なを押し
病院のひときわあかし産科の灯

豊中市 滝北 博史
たのしさも中ぐらいです敬老日
おたがいに白髪で会った萩の寺

岡山県 江口 有一朗
覆水の盆に帰らぬ悔いを持ち
何事も我が域を出ず月仰ぐ

伊丹市 猪原 石荘
口げんかしながら夫婦旅に出る
見た目より広げた傘へかなり降り

静岡市 柳沢 たま
名案が浮んで揉めごと無事に済み
恥ずかしい誤字が生きてる古日記

鳥取県 西川 和子
老人会行楽に来て将棋さし
一芸を持ってホームの人気者

大阪府 藤森 小雅子
蛸焼の蛸は明石に限らない
蟋蟀が第九のリズム狂わせる

鳥取県 鈴木 芙美
小粒だがこまめに動く嫁が好き

天高し野菊のような孫たちよ

鳥取県 木下美葉

束の間の逢う瀬寂しい別れとは
不作でも身を切る思いで青田刈る

大阪市 喜多佐津乃

目的のある朝腰の軽いこと
あごなしの地藏に出合う萩の寺

川西市 田中喜俊

宅配がつぎつぎ届く敬老日
就職の孫にネクタイえらびます

奈良県 横井都姫子

古里の話わき出る秋夜長
パパの撮るビデオの僕は一位です

八尾市 椎尾公子

山の宿螢を追うてバスに乗り
医者 of 門くぐれば新緑かぶさりぬ

唐津市 入江喜久夫

貧しさに耐えて笑顔で生きる女
コスモスが秋に枯れゆくリクルート

大阪市 平山和多留

名も知らぬ小国参加の金メダル
日本新出しても世界じゃ予選落ち

静岡市 西村千代

亡き夫の側に行きたい時もある
掃き寄せた落葉を散らす憎い風

猛犬に注意の家に用が出来る
火吹竹風の殺意に負けられぬ

兵庫県 西脇富美

丸顔の人で気軽に酌を受け
産休が明けて髪型母になる

鳥取市 武田帆雀

本当に腹が立つから怒らない
破顔大笑して囲碁に負け

出雲市 森山健歩

酔った友達送りついでに呑んでいる
コインランド洗う時間の友が増え

大阪市 乾哲静

すこうしは古色が欲しい娘の新家
湧き水の流れのままに生きる幸

寝屋川市 豊福路子

ひと目見て親子とわかる目とえくぼ
トンネルを抜けると弾む海がある

米子市 服部朗子

杉さまの汗のハンカチしまってる
飾ること知らない女の腕まくり

倉吉市 青砥菊枝

昨日の夢は不倫の願望か
十七字に凝縮できぬ物語

鳥取市 萩原美雪

モーツァルトをガンガン鳴らしても孤独
お前には世話にならない亡父の墓

島根県 今川 三津江

馬鹿笑いしたら胃袋軽うなり
ダム満水紅葉うつす山の里

藤井寺市 中島 志洋

千鳥足我が家の道は覚えてる
お隣の塀が気になる露天風呂

出雲市 高橋 きよし

故郷からどっさり届いた柿の山
真直ぐに歩き凡人にて終る

静岡市 青柳 金吾

六カ月決った様に歯が痛み
自己暗示かけて弱気のプロポーズ

八尾市 片上 英一

バカンスはどこへもゆかず無事にいる
幸せに酔ってる人は唄わない

樞原市 西本 保夫

いさかいなど無いよ結婚三十年
大物の証拠に後を振り向かぬ

藤井寺市 武部 敦子

こっそりと覗いて歩く余所の庭
ばあちゃんと他人に言われて意識する

豊中市 小林 一夫

窮すればやはり踏絵を踏むだろう
哄笑の果てに女は席をたち

愛媛県 石手 武
駅に来てカメラ忘れたのに気付き
僕だけの世界に入るヘッドホン

茨木市 藤井 正雄

経験の豊かさ順に物を決め
やあやあと何処かで会った顔で来る

島根県 高橋 武衛

秋祭り土産を倍にして戻り
松茸のひときれそれでも秋祭り

静岡市 丹羽 定次

立ち寄って話もはずむゲートボール
不器用も時によっては利用され

八戸市 島田 昭治

斉藤が金胸のつかえがすーとこれ
孫が来て家中ぱつと明るくなり

鳥取県 横山 房子

残り火を消さない女にて母で
海鳴りを挽歌に漁師生き抜いた

泉佐野市 真崎 浪速子

財テクへ情け無用という女
無事祈るヘッドランプが朝を出る

大阪市 平山 登代

みかん柿初物は皆頂きもの
老いの身を五輪は興奮させてくれ

熊本県 松田 シキ

亡き母の笑顔浮べる盆の月

工面する力も尽きて朧月

藤井寺市

楠

昭子

定退の子定リツチなフルムーン

京都市

山脇

正之

生きている世界の地図を見たソウル

中毒になってしまった情け銭

大阪市

平井露芳

歳とれば相互に労わる仲の良さ
お年寄犬に散歩をせがまれる

摂津市

望月

遊美

そう言えば俳句をやるとボクも言い

大谷本廟

引き出しに入れられ納骨はや終り

鳥取県

永倉奈海

風車木靴オランダ夢の旅
秋さやか地球の色を紅く染め

出雲市

岸桂子

栗洗う浮かんだ奴は捨てられる
人情にコロリと負ける母譲り

晴天に心の雲を払いのけ
二粒の生命我が家の宝です

豊中市

額田明吉

外燈のうつろな灯り霧深し
大切な言葉こころのポケットに

島根県

児玉幸子

伊勢椿大神に参詣

猿田彦祭神祈り記帳する

着飾ってベソもかいてる七五三

寝屋川市

北岡波留吉

先輩と吞めばいつでも終電車
十二月胃薬もって幹事役

富田林市

山原昭水

何か有る妻の化粧が長過ぎる

鳥取県

久野野草

◆ジュニアの部

尼崎市

新井朋子

聞き慣れたふくろこの頃声がけぬ

さわやかに走り新聞経くなり

奈良市

井上大

ため息が世界を白い霧にする
雨の中一人女が立っていた

尼崎市

新井晶子

梨甘くなるばかりなりリクルート

金の数経済大国ままならぬ

大和郡山市

渡部トキワ

ゲームして私の頭かるくなる
ひっこしで私のつくえぐつちやくちや

大阪市

福西

範子

老大の友の電話は旅如何

(小五)

愛染帖

橘高薫風選

哀屋川市 豊 福 路 子
お浄土のひとの数ほど曼珠沙華
弱い鬼道草ばかり食っている

和泉市 西 岡 洛 醉
順番を狂わず蟻の列に居る
影法師俺より先に走るなよ

大阪市 神 夏 磯 典 子
ばあちゃんがいい顔してる踊りの輪
虫めがね要らないものまでよく見える

羽曳野市 吉 川 寿 美
定年を迎え
戦列をはなれた蟻の挽歌かな
森の深さ深さへ息を深く吸う

唐津市 浜 本 義 美
入選を果たしてからの遠い道
吊り橋がまだ揺れ止まぬ子のくらし

和歌山市 牛 尾 緑 良
謀反人ばかりではない紐の先
記念日に熟した柿を妻の手に

香川県 上 藤 多 織
再職はもう諦めた冬案山子
冬案山子無欲の視野に雲流る

島根県 小 砂 白 汀
水すましシンクロロナイズドスイミング
距離感のつかめぬ女とさし向い

米子市 小 塩 智 加 恵
目立たない野花名前をもっている
恋知らぬ息子見合いで恋をする

和泉市 中 川 楓
憧れて待つ間の花は手折るまい
懐の一つの石は離さない

米子市 青 戸 田 鶴

傷口をかばい合ってる絆です
ワープロもこなしてみたい秋だから
風の影敵も味方も飯を食う

鳥取県 土 橋 螢
疑つてする念仏に救われる
大阪府 山 北 三三三

竹原市 信 本 博 子
魔笛だと気付いているが聞きはれる
今治市 渡 辺 伊 津 志

鳥取県 新 家 完 司
草の実を振ると小銭の音がする
片肺は秋もっ片方は冬である

広島市 流 奈 美 子
波立てぬ泳ぎ知ってる年の功
倉吉市 青 砥 菊 枝

鳥取県 土 橋 は る お
逢引きをデートと八十路でも申す
松茸が小そうてそつとしておいた

哀屋川市 江 口 度
コスモスの花裏返り霊柩車
戰場のように椿が死んでいる

和歌山市 木 本 朱 夏
夜叉になる毒をわたしももっている
哀屋川市 岸 野 あ や め

大阪府 渡 部 さ と 美
私の辞書には見えぬ有夫恋
風呂敷の結び目情けたまるこ

豊中市 辻 川 慶 子
ワイングラスジョークの好きな人ばかり
吹田市 井 上 照 子

鳥取市 広 本 文 子
生まれきて千の私に出会いけり
しらじらともはや昨日は風景に
和歌山市 西 山 幸
じゃんけんにかけてしまった芒の穂
落とし穴の中で秋から冬になる
豊中市 滝 北 博 史
あまりにも澄んだ瞳は実らない
名月や妻に割箸割ってやる
哀屋川市 堀 江 光 子
地の底に半生を埋め去る坑夫
目覚めてるものみな親し夜の底
青森市 工 藤 甲 吉
嫁ももらえぬ田作りに誰がした
政治家は濡れ手に粟が忘れず
米子市 八 木 千 代
裂けるまで熟れて柘榴はしあわせな
銀の匙ならわたくしも手が届く
島根県 堀 江 正 朗
意地悪がまだまだ出来る耳といて
大陸を駆けた足たよ白杖よ

喫茶室梨ひそやかに顔の中

米子市 小村 てい子

湧き水は善男善女を憶うなり

島根県 堀江 芳子

住みついて川の音さえ我がものに

羽曳野市 田中 隆二

逆転の話聞いている父の墓

米子市 林 荒介

蝶の羽化哀しいことを脱ぐように

奈良県 横井 都姫子

六十の恋へ周囲のあわてよう

鳥取県 西浦 小鹿

若い時アメリカにいた事がある

高槻市 河瀬 芳子

流石だと思っ生き抜くエンペラー

羽中市 三宅 ろ亭

コスモスの乱舞一本異彩あり

米子市 金山 夕子

わたしだけ隠れる穴を持っている

米子市 林 瑞枝

足跡を残さず木戸が開いている

鳥取県 江原 とみお

林檎はもうひもじい詩をうたわない

米子市 政岡 日枝子

噂だけ山から下りた例がない

流山市 神田 治

胸やけや飲みすぎに効くスキヤンダル

西宮市 松本 一郎

悲しみをなくさめる目はどの位置で

和歌山市 福本 英子

カツ丼であっさり話ついたらし

広島市 名和 喜一郎
とまり木に会社の席次持つて来る
吹田市 栗谷 春子
兵馬傭の中にも好きな顔ひとつ
鳥取県 乾 喜与志
福祉年わたしの手相まで変わり
吹田市 山本 希久子
お婆さんでないがたしかにお祖母さん
熊本県 高野 宵草
定年で辞めたら妻が元気づき
岡山県 山本 玉恵

赤錆も出す還暦の五寸釘
平田市 久家 代仕男
ヒョットコの遠出おかめが淋しがり
岸和田市 芳地 狸村

奈良博の莫高窟で友と会い
弘前市 真喜内 実
合掌はアンテナ神の歌聴こう
豊中市 田中 正坊

長安や王維 岑参 李白 杜甫
鳥取県 さえき やえ
法事もそつと祭りもそつと小さな秋
岸和田市 原 さよ子

近畿みな晴れのマークの秋祭り
熊本市 有働 芳仙
宝くじ買う横顔は淋しいネ
大阪府 町田 達子

貴婦人の旅してみたいオリエン
米子市 石垣 花子

くるみ割り人形よノルマに泣かないで
岡山県 千原 理恵

人生の戦友幸いひとり
川西市 中内 孚彦

金木犀ビデオに撮ればつまらなし
廿日市市 森川 抜智

リクルートコスモス新種のよい花か
八戸市 島田 昭治

初恋を詰めた壺ですそつと開け
川西市 松本 ただし

神様が正直すぎる赤トンボ
奈良市 米田 恭昌

露天風呂ババさりげなく眼鏡かけ
唐津市 中村 順子

閉山の残る家あり秋刀魚焼く
奈良市 井上 大

ご輪血と記帳と雨はまだ続き
名古屋市 藤井 高子

天皇のお背に憶いをためている
唐津市 仁部 四郎

学校の時計のずれに安心す
堺市 神原 文

相談が一人話で引き上げる
大阪市 北 勝美

秋雨に紫式部まだ緑
愛媛県 石手 武

サングラス外しモミジを秋をほめ
米子市 茂理 高代

進まないサイコロばかり振っている
岸和田市 古野 ひで

夢枕今なお亡母は案じてる

高槻市 川 島 諷云児
喝采が欲しくて夢の樹に登る

茨木市 井 上 森 生
気まぐれに見えてこころの深いひと

唐津市 浜 本 治 幸
妻よりはうまい料理も少しあり

西宮市 瀬 尾 六郎太
セブテンバーやれやれホツとす父と母

大阪市 今 西 静 子
いさかいの昨日忘れた妻の顔

八尾市 片 上 英 一
お恐いおんなを捨てた群れが来る

鳥取市 小 谷 美 千
星ひとつ恋にチャレンジして落ちる

姫路市 都 里 遊 光
赦しこう写経は西日の射す部屋で

和歌山市 丸 岩 晏
十五夜に母愛用の皿揃え

十和田市 阿 部 進
感動と感謝忘れてホケが来る

米子市 田 中 亜 弥
かあさんのリズムにみんな乗せられる

米子市 光 井 玲 子
その時は心の鬼にいい聞かせ

松原市 小 池 しげお
きず薬とてもやさしい女孫

弘前市 波 多 野 五 楽 庵
新幹線いいえ私は汽車が好き

河内長野市 植 村 喜 代
洗濯機にお札を言って買い替える

和歌山市 桜 井 千 秀

言い分がつのって眼鏡かけ直す

和歌山市 森

紫の風がはこんできたシエラシー

和歌山市 田

片隅で咲くには惜しい金木犀

和歌山市 山 口

あれは夢だった自分に言い聞かし

有田市 松 井

健康器具断りきれずせまいう家

大和高田市 加 藤

髪型も服まで同じよその人

岸和田市 三 輪

浪人と呼べば優雅な失業者

大阪市 榊 本

美術館語りかけてる声がある

兵庫県 吉 田

ともすれば遅れがちですカレンダー

伊丹市 猪 原

名曲の合間知ったかぶりの声

羽曳野市 麻 野

出迎えへ荷物渡してからしやべり

島根県 松 本

少し夢届けてくれた赤トンボ

摂津市 も ち づ ぎ

姫リングみたいに可愛いガイドさん

大阪市 大 福

一人旅には保険証缶ビール

岡山県 松 本

生涯青春あしたの夢を見続ける

岡山県 伏 見

大正の生れて月見草愛す

八代市 増 田 一 乗
積み立てはしたが旅行も億劫です

茨木市 堀 良 江
伎芸天さまやっとお会いできました

黒石市 相 馬 一 花
躁鬱を使いこなして世を渡る

八尾市 向 井 しづ子
おしゃべりと無口交換するパトロン

堺市 高 橋 千 万 子
ひまと金夫婦は別な使いみち

大阪市 上 田 かつみ
浮世絵のその長閑さが羨まし

西宮市 朝 山 千 世 子
孫髯と久々語り菊日和

豊中市中桜塚三丁目13-15
* 橋高薫風苑(ハガキに3句)

投句先 千 560

NHK川柳募集

課題「音」 選者 森中恵美子

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局 ふれあいラ

ジオセンター 川柳係

発表 12月25日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

井上喜醉

臆病になつて無口を武器とする

宮武まつ女

人間、歳を取ると何事も慎重になり、決断力が鈍るようである。それが他人からは無口な臆病に見え、知らん間に武器になつていくようである。作者は、その心理を巧く突いている。

未完の絵まだ描きつづけ果報者

高杉千歩

倅せな夫婦坂を歩く姿が手に取るようで、羨しい限りの作句です。

その時は全身マリで逢いにゆく

中尾まゆみ

若さが作品全体から溢れ、それを全身マリで受けとめている。このような人を恋人にすれば男性は倅せであり、夢にしても楽しいものだ。

叱られた方は忘れてない昔

宇野昭代

叱つた方は、遠い昔のことは忘れてしまつてゐるが、叱られた方が覚えてゐる。上司と下つ端、親と子の間であらうとも、今は過ぎ去つた事で暖かく見詰めてゐる。

行商のおばちゃんの荷の指定席

鶴久 百万両

毎朝、同じ列車に乗る顔ぶれが、おばあちゃんの荷の置き場所を知つていて、確保して待つていくれる風景が手に取るように表現され、微笑ましい作品にされてゐる。

昨日今日忘れ昔はよく覚え

松本 一郎

人間の記憶力には限度があるが、歳を取つても不思議なもので、遠い昔は良く覚えてゐる。老いても思い出だけは若返るようである。

子育てを果した納屋の三輪車

寺脇 三倉

三輪車が無事に役目を果し、隠退の日が来た。子育てをした三輪車へ拍手を送りたい。

帽子脱ぎ年相応ですと頭かき

和田 萬里

帽子を被ると若く見える人が、正直に言葉の弾みで薄くなった頭を見せたようである。女性の前では若くなつてくださいね。

ばりばりと剃して宿の浴衣着る

高橋 きよし

旅先の楽しい情景が浮んできます。仕事を忘れた旅の嬉しさが「ばりばり」に楽しんでるようです。

あれこれと思い耽る終い風呂

円増 貞子

主婦が入る我が家の終い風呂は大変なようである。一日の反省と明日へのいくさが湯舟で溢れている。身体を大切にしてください。

胸板の厚さに秘めてゐる松志

松川 芳子

女性が眺める男性の鬚志は素敵ですね。男の胸板が頼もしく見えてきます。

抜け道を知つたばかりに躓いた

桜沢 あかり

世の中の裏表は怖いもので、蟻のように素直で真直ぐな道を歩きたいものです。

妹と泳ぐ小雨の露天風呂

堀畑 靖子

雨降りて透明度が悪い露天風呂で童心に返り泳ぐ姿は、さぞかし絶景だつたと思ひます。

學歷を隠して親爺屋台引く

森 安 夢之助

人間の頑固さが意地を張り、屋台を引いてるようで、長生きをして欲しいものです。

疑わず貴女の彩に染んでゆく

大川 幸子

相思相愛の仲で結婚できれば最高のものであり、幸福な色に染つていく女性は人生のホームランと言えるでしょう。

追伸の一行にある深い愛

清水 悠貴女

ありし日の思い出かも知れないが、忘れられない言葉が追伸に書かれていたようです。虹のように美しい思い出を、一生大事にしてください。

尚香のむ 八木千代選

平和だな 煙が真直ぐに昇る 藤井寺 高田美代子

北海道の消印がある旅中の句です。淡々と言つてはありますが、この平和の実感はずくく伝わりまふ。煙がまっすぐに上るといふ風景は、よく見受けられることですが、それを旅のさなかで見ると、殊更にこの風のおだやかな平安な天のありがたさが、旅路の静穏が、万無量の感謝となつて迫ってくるような。私にもそんな経験があります。心の位置がふだんとは違うのです。この一刻の寂がどんなに尊いかを知り抜いて、掌を合わす旅を続けられたのでしよう。

両肩の絹の重さにみたされて 和歌山 後藤 正子

絹の重さという、柔かな翳りのある言葉でこの句全体が生きています。背から肩、肩から胸との、女のいちだん女らしい線を、絹の衣のしなやかでいて軽い重みを肌に加わして、いつもの自分と別の世界にいる愉しみ。木綿ともウールとも違う自然繊維の絹地は、違和感もなく装いの姿にさせてくれます。その感觸を素直に喜びながらのつつやかなところに、私まで満たされます。

まだ続く旅であるなら道草も 米子 青戸 田鶴

栗の木を揺する覚悟は出来ている 和歌山 田中 輝子

しわよせはやさしいものに降りつもる 鳥取 広本 文子

天神様の細道に釘落ちて老いてゆく 大阪 西出 楓楽

刃こぼれの痕を隠して老いてゆく 高槻 河瀬 芳子

透明なくらげ尊敬してしまふ 鳥根 松本 文子

掌に握る鈴のしあわせ何だろ

吊るされて生きる大根わたしかも

枝ぶりのよい松の木を知っている

地平線から花売りの声がする

夕立に往生際の悪い私

落し蓋 いくら落ちて我慢する

登山口 半端な事は出来ないな

日めくり瘦せてさむい寒いと言いはじめ

追憶にふけていいるは親知らず

大切にしたい私へ向く刃

約束のない秋空と無駄ばなし

秋晴れに明日の顔を描いてみる

沈むかもしれないけれど従いて乗る

見苦しい言い訳はせぬ風媒花

影だけが走り出しそう丸い月

卵割る 昨日はきのう今日は今日

霊峰が雨を知らせにやって来た

いつものコース愛染さんにも日が暮れる

運命を共にするには未すぎる

コスモスの群集心理 娘が嫁ぐ

箸立ての箸の心を汲んでやる

吾亦紅 どうしていつも口つぐむ

突き放す 奈落の底を見るまえに

門限にきき分け悪い母を通す

粟一粒 一粒 暮れてゆく昭和

米子 小村てい子

佐賀 寺中三枝子

和歌山 木本 朱夏

米子 石垣 花子

松江 竹内寿美子

大阪 鍛原 千里

米子 政岡日枝子

和歌山 西山 幸

羽曳野 吉川 寿美

和歌山 森 茜

鳥取 小谷美つ千

西宮 奥田みつ子

茨木 堀 良江

米子 林 瑞枝

和歌山 古久保和子

香川 上藤 多織

米子 新 正子

大阪 鈴木 節子

寝屋川 稲葉 冬葉

出雲 園山多賀子

青森 富士 トキ

米子 光井 玲子

和歌山 松原 寿子

和泉 中川 楓

松原 佐藤 藤子

橋のない川を渡って来た男

一輪ざしに半端な花は活けられぬ

それなりに泣くこと止めてからの顔

泣きね入りするなど秋の風が押す

虫の名も知らずにやがて冬に入る

灯を消してさまざまな絵を画いてみる

さしすせそ どうにか入歯合って来た

招待券 さくらになつて上げましょう

洛陽の落日伝えるすべ欲しや

つまりいたはずみに穴の奥が見え

掘りかえず記憶の底に母の辞書

明暗のはざま わたしを彫っている

天井の低さをしかと子に語る

試着室お気に召さぬか 秋の彩

ああ夢でよかつたなあと思う夢

橋ぎわの地蔵も橋を渡りたい

躓いて痛い言葉がやつと解け

ハブニング期待している予定表

秋の夜も千金 御無沙汰詫びてます

神様の御都合らしい雨となる

むすめには親の沽券が生きている

からくりの糸切れた日の肩すかし

空想を許してくれるコーヒー皿

以心伝心 同時にかけて話し中

残り火の揺れローソクの無表情

岡山 灰原 泰子

米子 金山 夕子

和歌山 山川 克子

鳥取 さえきやえ

堺 山本 半銭

米子 沢田 千春

岡山 富坂 志重

大阪 本間満津子

西宮 秋元 てる

米子 菅井とも子

岡山 矢内寿恵子

大阪 田中 弘子

米子 茂理 高代

和歌山 福本 美子

和歌山 坂部紀久子

米子 塩谷八重子

藤井寺 楠 昭子

大阪 神夏磯典子

八尾 宮西 弥生

貝塚 池田寿美子

大阪 堀 いくの

富田林 片岡智恵子

堺 高橋千万子

羽曳野 福田満洲子

大阪 津守 柳伸

栗ご飯おいしく炊けて亡母恋し

二幕目に無常の鐘がふいに鳴る

ばらばらと時雨が秋を連れてくる

優しさが欲しくて拗ねるベルシヤ猫

身はひとつ せめても秋の風に散れ

花ばさみ入れて脂肪を取るように

月参り かかさずに寄る佃煮屋

松茸の香りも知らず恙なし

だんらんに屑かご抱いて坐ります

もう少し歩いてほしい杖の母

泣き笑い 旧街道は夕あかね

弾き語り 指は小さな秋という

メニエールの様にクラクラする天気

ドシヤ降りに傘を開いてくれた亡父

灯を消すとゴトゴト動くパン焼き器

彼岸花 ひと日ひと日を朱に染めて

逢うことも又有るえにし捨てがたく

破られる地図へもしやの虹を描く

正論を吐いて孤独の背になる

そして二人 どんな料理もあたたい

グッバイとサザンクロスも言っている

和歌山 内芝登志代

米子 服部 朗子

大阪 島村美津子

竹原 信本 博子

寝屋川 宮崎 菜月

大阪 渡部さと美

宝塚 丸山よし津

八尾 高杉 千歩

八尾 向井しづ子

吹田 井上 照子

大阪 古川美津枝

兵庫 東浦 砥代

吹田 栗谷 春子

岡山 清水悠貴女

寝屋川 平松かすみ

出雲 石倉美佐子

岡山 山本 玉恵

兵庫 酒井 靖子

姫路 都里 遊光

兵庫 倉垣 恵美

堺 神原 文

葉書に雑詠3句 12月10日締切

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子

句評リレー

十月号から

有働 芳仙
堀端 三男
宮西 弥生
本田 恵二郎

白旗の高さを潔しとする

牛尾 緑 良

芳仙 白旗は敗者の意思表示であり、潔しは心象表現か？勝者の驕りに対してか？潔しの言葉に勝敗を超越した心意気が汲みとれる。洗練された秀吟であると思う。只、「高さ」とは何か？高々と白旗をあげる意味だとすると平凡である。どなたか教えて頂きたい。

三男 ソウル五輪で日本新記録を出しなから、予選落ちした日本選手が思い出される。この「高さ」は、単なる高低ではなく、全力を出しきって敗れた爽かな白旗である。作者の几帳面で真面目な性格がよく表現されている。

弥生 難解句の多い昨今、なんと清廉潔白な句でしょう。混沌とした社会の動きに動ぜ

ず、マイウェイ。「白旗の高さ」の「高」は、勇氣と虚飾のない作者の正直な真情でしょう。「潔し」は、上の句をいつそう高潔なものにしている。唯々、敬服してやみません。

恵二郎 古い日本では、降伏ということが大きな恥であって、自刃するのが当然となっていたことは衆知のとおりである。ところが外国（国名はあえて表示しない）では、全力をつくして敗れたら、堂々と白旗をかかげて投降することが恥ではないのだ。大東亜戦争でもその例は多々あった。つまり、戦いをスポーツの一種の如く解しているらしい。それは伝来の国民性がしからしめたことである。現代の日本でも同様の考え方が当然となってきたようである。高さは堂々という意味に解し、いさぎよしをスポーツマンシップと解すべきと私は思う。

芳仙 「高さ」にあまりこだわると、句が汚れてくる気がする。一気にこの句を読み下

すと、実に語感も爽やかで、しずこころなく句の良さが分かる気がする。恵二郎氏の結論に賛成したい。

三男 結論が出てしまっているようだが、この句を何度も読んでいくうちに、私たちの平素の努力とともに、「引き際の大切さ」ということを示唆しているような気がしてきた。

弥生 お三方さまの句評、なかなか痛烈なものがありまして、もう私の出る幕はないと存じます。「白旗の高さ」の「高さ」は「心」も表現、つまり物事にこだわりのない広さともいふべきで、この句を鑑賞いたします。

恵二郎 芳仙・三男・弥生の三方の川柳批判の真摯な取組みに敬意を表し、私も共に楽しく勉強させて頂いたことを嬉しく感謝するとともに、緑良さんも潔しとされたことと思つ。

上にぎりひとりで食べるからうまい

小島 蘭 幸

芳仙 二、三人で同じように上にぎりをとって食べても、何か話題を交換し合い、談笑しながら食べる。味の方はややお留守になるといった所の逆であろう。この句は作者自身すし通であるのかも？みんなで食べてうまい時もあるだろう。食べるからーの「から」が解けない。

三男 「時価というにぎりを食ったことがない」という句を作る私には、すしの味がわからないが、美味しいものでも、ひとりより話相手があった方が……。この句に孤独感と淋しさを感じるのは私だけであろうか。

弥生 思わずクスツと笑いたくありません。私も「にぎりすし」が大好き。この句は素直に鑑賞し、ああでもない、こうでもないという理屈は「法度。仲間と財布の中味を考えずに帰宅すれば寝るという程度なら考えてもよいが、時々私も同じことを思うので作者の気持が通じる。「ひとりりで食べる……」でなく、「食べるから」決して不自然でない表現だと思う。

恵二朗 すし嫌いの私には、批判の資格がゼロである。トンカツの方がはるかに魅力的である。ともあれ二、三人とか、家族たちと共に食べる方が美味だし、楽しい私である。**芳仙** 蘭幸氏はきつと相当なすし通ではないかと思う。聞き酒ということがあるが、聞きすしというのがあれば、作者はベテランであろう。すしの味をおろそかにしない者でないと作れない句だと思う、的が外れているかな？

三男 子どもの頃、祖母の部屋にいけば美味しい菓子にありつけたことを思い出す。弥生さんの「から」の解釈でよくわかったよな気がしてきた。

弥生 折角おいしい上にぎりを、多方向からこつかれてはたまりませぬ。食べものの

恨みはこわいから、私は素直に蘭幸さんに逆らわず、ひとりでこつそりいただくことにします。

恵二朗 いやはやどうも、すしにそつぽを向いてしまった。私は、異端者めいた存在になりさがったみたいである。あらためて寿司を研究してみようことを約束して、おわびの一言とさせて頂く。

段違い平行棒の夫婦愛

都 倉 求 芽

芳仙 まず語呂がいい。音楽的で楽しい。しかし、夫唱婦隨の夫婦愛の姿を段違い平行棒で暗喩したものとするは物足りない。段違い平行棒の婦唱夫隨のものは？段違いのニュアンスが変わってくる、少し動く句でもある。

三男 段違い平行棒は、女子の種目である。夫唱婦隨よりも婦唱夫隨と考えた方がより川柳的で面白い。それがまた夫婦相合の元であり、わが国でも女が強くなって久しい。素材の見つけ方に敬服。

弥生 夫婦愛は分かりません。この部門をパスしようと思いましたが、客観的にお答えいたします。長い間の夫婦生活は、ときには不協和音があるのではないかと。「段違い」の言葉で面白く回転させて末長くおしあわせに。

恵二朗 段違い平行棒の上段が私であって、下段が老妻であると、私は解することに。事実、その方が私ども老夫婦にびつたりとくるからである。句の解釈は、それを読む人によって、それぞれ違つて面白いのかも知れない。ともあれ興味を誘ってくれる佳吟と思う。

芳仙 三男氏の見付けは面白いと思う。つらつら思うに、他人前では夫唱婦隨のワンマンぶりを発揮している御人が一度、家の敷居をまたぐとウーマンリブに豹変する家庭を知っている。そんな意味にとると面白い句である。しかし、作者は果して？

三男 「似た者夫婦」もあれば、「のみの夫婦」もある。何れにしても夫婦愛は美しい。他人がとやかく言っても始まらぬ。幾久しくお幸せにと祈るのみである。

弥生 夫婦として鑑賞せずに、私は恋人として考えました。芳仙さんは音楽的で楽しい。むしろ恋人に置き替えた方がびつたりしませんでしょうか。追いつ追われつ、あるいは段違いをやめて平行棒に切り替えたり、リードするのは常に女でしからどちらにしてもうまく進んでいるパターンでしょう。

恵二朗 弥生さんという女性が一枚加わっているから、この句の批判戦が面白くなったみたいである。女性の競技である段違い平行棒に、男性が割り込むのは、越境したみたいだが、諷刺詩としては、正しく興味深い一句であると私は思っている。

一本杉を何処までのぼる蟬の子よ

林 瑞 枝

芳仙 聞くところによると、杉林にはあまり蟬はいないといったことを考えると、この一本杉は、周囲に雑木林があるものと思われ。一本杉をの「を」は抜いた方がいいと思う。小生にはその方が大きな杉の木を連想させられる。小さな蟬の子と一本の巨樹の対照的な生命力の落差と、蟬の子よの「よ」の優しい呼びかけが生きている。人生の一こまを謳った比喩的表現ともとれる。

三男 人生の一こまを謳った比喩的表現に賛成。だから周囲に雑木林はいらない。一本杉を目標と考えれば「を」を抜くわけにはいかないのではなからうか。

弥生 春日八郎の歌に「一本杉と地藏さん」があったことが思い出されてならない。単に「一本杉」であるから、下句の蟬の子が生きてくるのではないかと思う。蟬の子でこの句をここまで完成したのではないだろうか。一寸の虫にも五分の魂は、「何処までのぼる」作者のやさしい呼びかけが通じることでしょう。

惠二朗 芳仙さんの評言に、私は賛意を表するが、一本杉という大木と、ちっぽけな蟬との取り合せに、佳き諷刺を感じさせられる私である。

芳仙 句を何度も温めると色が変わってくる。また違った連想が湧いてくる。一本杉は天に向って真直ぐ伸びる。横道はない。真直ぐな信念に向って宮々と歩いている人への励ましの声が聞えてくる。

三男 一本杉と蟬の子を対比させた技法には敬服。厳密に言えば、蟬の子(幼虫)は、土の中の生活(七年)で蛹になって地上に出て来るので、「何処まで」がひつかかる。しかし、不可能を可能にするのが文芸だから。

弥生 天に向って直立する杉を「一本杉」として強く表現。蟬の子を単に蟬としたら、またこの句は平凡でしょう。弱い人間の心に支えを与える句です。

惠二朗 古い話であるが、私は恩師故麻生路郎先生を川柳界の大木と思ひ畏敬していたし、現在もそう思っている。私は、その大木の中ほどの枝にとまっている蟬ほどの存在であった。この一句を味読して、そんな思いを描いた私であることを告白させて頂く。

臍繰りをびっくり箱にいれておく

江 原 とみお

芳仙 「にっ」と微笑ませる最近、希な明朗ユーモアのある句である。こんな句に出会うと深呼吸したくなる。この奥さんはきつとえくぼのある笑顔の美しい人かも？臍繰りは

折りにふれ少しずつ蓄まってゆくものでありその度にびっくり箱が快哉を叫ぶ趣向は楽しい。びっくりするほどたまればいいなあと思う。

三男 楽しい句である。最近、難解句が多い中で、こんな句に出会うとほっとする。臍繰りの隠し場所は、額の裏と決まっているが、「びっくり箱」を持って来たところが言い得て妙である。沢山蓄めて二度びっくりさせてください。

弥生 臍繰りとびっくり箱、発想が奇抜でとにかく楽しくなってくる。真面目でいて、そしていたずらの得意な作者ではないでしょう。こんな根あかな人が傍にいられるだけでも、明るさが倍增するのではないのでしょうか。フルムーンまでうんと蓄められ、世界一周豪華船など夢ではありません。

惠二朗 びっくり箱とは、稚気愛すべきものを持ち出して、興味を誘っている。そしてバレル日を楽しく待望しているらしい気配を秘めている。へそくりの体験のない私まで、一つやってみようかなと思わされたりもする。拙宅には先祖伝来の千両箱がある。文久二年と墨書されている。この中に、十円玉、五十円玉、百円玉など取りまぜて放り込んでおくと、小学五年生の孫めが、いずれは見つけるにちがいないぞと想うと、急に楽しくなってきたではないか。この句の作家にお礼を申し上げておく。

芳仙 この句を読んで玩具屋に行った人はありませんか？びっくり箱を小生も買ひに行こうかなと思つてみた。しかし一寸考え込んだ。人間は元來飽き性である。何度もびっくりしているうちに不感症になりはしないかと。不感症になるほど、また貯まるかが問題でもある。

三男 何度読んでも楽しい句である。平和な家庭が想像できる。年金暮しに、臍繰る金もないけれど、このユーモア精神を見習つて、楽しい老後を送りたいと思つている。

弥生 お金はいくら持っても邪魔にならぬものだから、内緒にこっそりと臍繰る醍醐味。びっくり箱に入ったびっくり金、途中で出したりせず、破裂するまでやりましょう。現代は遊びどころにウエイトがあるよつです。

恵二朗 びっくり箱という語の子供っぽさが魅力となつて、この一句に視線が集中したよつである。掘り下げ過ぎては魅力が薄れてくる。軽いタッチを贅えてあげたらそれよ

イランでは鳥も案山子もヘルメット

谷 口 次 男

芳仙 時事吟である。イラン情勢をふまえた皮肉味たっぷりの句である。鳥でなく鳥にしたらもつと諷刺的であり、マンガチックか

も？案山子があるかどうかは小生不明であるが、農業に従事する者はヘルメットをかぶつているだろうし、比喩としては面白い着想と思つ。

三男 語呂合せに走つたよつな気がする。中七にもつと人間臭いものを持つて来てはと思つのだが……。何れにしても停戦つたこととはうれしいことである。

弥生 サトウサンペイさんの漫画的中味の句です。鳥も案山子も平和を象徴するはずではなかつたかな？

恵二朗 イランであつても、イラクであつても一向に構わない。どちらにしても、時事吟は近い将来、忘れ去られる運命を背負つているから、いずれは忘れられたり、意味不明と思われる短命な一句である。

芳仙 時事吟としては、やはり力不足の感がある。面白いけど深さが無いので……

三男 時事吟の難しさで、真相を抉るか、軽く流すかのどちらかだろうと思つが、ここでは「鳥も案山子も」と軽く流した軽味に敬意を表しておこつ。

弥生 時事吟にしては、もう過去になりつたあるもので、中味のない句である。

恵二朗 この一句への批判は、反響を呼ばなかつたよつだが、句主の次男氏は腹の中でほくそ笑みてるかも知れないぞ。次男氏のこ

腹減らぬのが怖いこと考える

月 原 宵 明

芳仙 怖いこととはどんなことか、作者の胸にははつきりしていることと思われる。小生いろいろと暗い連想が走るが、腹減らぬのが「のが」が重要な鍵のようである。通常腹の減っている奴が怖いことを考えたり、実行したりして見せてくれるのに、この頃は飽食のくせに怖い罪悪を犯す者が増えている。社会の暗い一面を皮肉的に表現した社会吟でもある。

三男 強烈な社会風刺とみる。全国民中流意識を持つ飽食の時代となり、ハングリ精神を忘れた現在、社会通念も一変してしまつた。教育の難しさを教えてくれる句である。

弥生 深く追及して考えないことにする句です。すべてに得られる昨今の社会では、この句など普通に思つていいのではないでしようか。お腹が減つて当然だし、そして普通の日常生活の私たちより軌道を離れた社会通念を維持する人間が如何に多いことか、それらが陰で動いて当然な社会なのです。

恵二朗 リクルート問題がふと浮んでくる私であるが、この句は味読する人によつて、多様に解釈される句でもある。でもこれくらゐの反骨ぶりを川柳作家は持つている方がよ

いのだ。

芳仙 腹が減っても減らなくても、世相がこのような句を生んだことに間違いないし、弥生氏の言葉で言いつくされていると思う。

三男 折しも東京で爆破事件が起っている。腹減らぬ輩の仕事にちがいなからう。「衣食足りて礼節を知る」の格言が生きたのは終戦までで、戦後、特に経済大国となった現在では、持てる者ほど怖いことを考える。時代を風刺する警鐘句と考えたい。

弥生 一見、寒気の走る句であるが、昨今、難解度の多い句よりも高度な中味があると思う。現実には生きる私たち、生きるために、そして働くがために、メリットを願うのである。政治・経済・社会等、黒い幕があつてはならないのである。生き方を冷静に考えさせられる佳句と思う。

恵二朗 句を掘り上げて玩味することのむずかしさをわれわれ川柳人は常日頃、絶えることなく体験している。簡明な句でも千差万別の解釈が生じたり、ときには作家の意図することと反対の解釈が生じたりもする。たつた十七音字という小さな皿に、多岐な心理を詠み込むべく四苦八苦せねばならぬ宿命を背負っているわれわれである。たとえ難解句であつても、一応戦いをいどんでみる勇氣を持たねばと思う私である。

なぜか鹿野

西山 幸

川柳塔みか月八周年記念大会の鹿野への一行は、黒川紫香・岩本雀踊子・高杉鬼遊・榎谷寿馬・塩満敏・田中正坊・宮園射月芳・上田佳秋・園田文字・奥山美智子の皆さんと私の男性八名、女性三名。

二、三日前から急に冬が来たような寒さだったが、十月十五日は秋の穂やかさを取り戻した旅日和になった。九時三十四分、「はまかせ」一号発車と同時に小宴会が始まり、川柳論・人生談義に花が咲き、さながら川柳塔社号。乗車四時間余を楽しく過して、鷲峰山のひなびた浜村駅に着いた。

出迎えの中原みさ子さんと再会の握手。待機していた山紫苑のマイクロバスで林檎園へ走る。山に入ると林檎の木に赤いりんごが成っている、何の不思議もない景色が清々しい。昨年の品種は「ふじ」であつたが、今年のは「ジョナゴールド」、味は淡白だったが、りんごらしいみずみずしさに喉を潤した。重いから小さいのにおこうと思つていたのに、籠の中は大きいりんごばかり。私もやっぱり

大きいつづらだらしい。

前夜祭は、今年も鹿野町議会議長の井上茂男氏が参加され、弓削川柳社の皆さんともども和やかなムードで盛り上がる。心尽くしの献立の茶蕎麦とヌカエビの煮物は格別だった。

酔うほどにカラオケも始まる。捻子の弛んだ顔もまたよいものである。夜も更けて今年こそはと暗闇を露天風呂へ行ったら、同じ思いのフルムーンらしきカップルが入っているではないか。残念だけど邪魔をせぬように遠慮、諦めることにした。

さて、十六日は秋晴れに恵まれ、汗ばむ程の暖かさになった。みか月川柳会八周年記念大会の参加賞の白扇へ、皆さんの列の後に並んで私も

雪達磨 春を迎えに行つたまま 螢
を揮毫していただいた。

出句を済ませてから朝の鹿野をぶらりと歩いてみた。空気が美味しい。古い鐘楼のある門をくぐると、小じんまりとした見事な庭園があり、奥には休憩用の石台と椅子が忘れられたように静まっていた。パンフレットの地図を辿ると浄徳寺と書いてある。町角に小さな案内図や矢印がもつとあればよいのにと思う。

いよいよファンファーレとともに句会開会。盛桜さんの司会でまず蛍会長のあいさつ、続いて町長小倉利男氏のあいさつは昨年にも増して穿ちとユーモアに満ち、そのまま川柳で

ある。議長井上茂男氏、教育長砂川正美氏等
来賓八名、町を挙げての声援ぶりは羨ましい。

高杉鬼遊さんのお話は、短歌・俳句に比べ
ての川柳の地位、世間一般の川柳への考え方
に触れ、川柳を始める平均年齢が六十三歳と
いう老後の趣味的解釈から進歩のないことを
導入に、桑原武夫氏の「第二芸術論」におけ
ゆ俳句の順位への高浜虚子の応酬等々、聞く
側を十分にひきつける内容と話しぶりで、人
間そのものをうたう川柳を高めるために、川
柳家はもつと努力せよ」と熱い言葉で括られ
た。

昼食の後、待望の披講である。出席者一

第40回大阪文化祭川柳大会秀句

結び目を缺て切って夢も切る

池田 淑子

鎖が重くて妻は砂丘に根をおろす

小西 幹齊

一本の薬との縁が密になる

塩谷 幸子

身辺些事猫の器は猫のもの

島崎 信子

判定のミス人間である限り

杉本 克子

チンドン屋の夫婦に寒い日がつづく

柏原幻四郎

水は低きへ流れ天皇制つづく

柏原幻四郎

欲のない子は列を乱さない

中西兼治郎

七名、投句者三六名、それぞれにしのぎを削
った結果は、

第一位 江原とみお

第二位 但見石花菜

第三位 新家 完司

第四位 高杉 鬼遊

第五位 八木 千代

第六位 貞岡信太郎

第七位 寺尾白会子

第八位 野沢 大漁

である。表彰式が終わり、緊張がほぐれて句
会場が懇親宴会場に変わる。渡辺独歩さんの
音頭で乾杯、鹿野のお豆腐を頼張る。あの入
この人と来年を約束しながら座を立つ。鹿野
の湯に三回も入って美人になった私たち女性
三人は、帰りの車中も八人の男性に守られて
大満足であった。

鹿野の皆様、ありがとうございました。い
つもながら幹事役の紫香さんに、心からお礼
を申し上げます。当日の秀句は次のとおり。
母の幹から太い心を呑み干さん 中原 諷人
火薬庫の一粒ずつはおとなしい 金築 雨学
海女は老いても半端な命など持たぬ 中原 諷人
にぎりめし母の指紋の味がする 新 正子
同じ道歩く母娘の苦勞性 矢内寿恵子
卑怯者のたまり場森の奥にある 江原とみお
ネジ巻いてならぬ玩具の兵とても 矢内寿恵子
天高くなるとサンマが美味くなる 大石あすなろ

第七回

鳥取県没句川柳供養大会

とき 昭和63年12月11日(日)

午前10時開場

ところ 鳥取市共済会館「白砂荘」

3階ホール(鳥取駅より徒歩五分
TEL2413943)

参加費 三、五〇〇円(昼食・作品集呈・
精進落しの宴含む)

兼題 「敗者復活吟」小林由多香選
(今年没句になった句に限る)

「方」 西村 黙光選

「西」 美濃 拙峰選

「浄」 沢田 千春選

「土」 寺坂よし子選

「水子」 谷口 次男選

「三途さんず」 中原美佐子選

「渡る」 中村 幸代選

席題 なし 各題とも2句以内

締切り 11時半厳守

表彰 総合10位まで(出席者優先・
1句1点方式)

欠席投句 一、〇〇〇円(切手でも可・
作品集呈)

投句先 〒698-11 鳥取市東大路64
両川 洋々宛

主催 川柳ふうもん吟社

後援 鳥取県川柳作家協会

言いまわしの個性（六）

—— 自分史に連れ添う語彙 ——

竹 内 紫 鏞

1 四字漢語の愛好者

「試行錯誤」の結果を会議で「侃侃諤諤」と議論する——などと言ったことがある。このような外国（主に中国）の論法や形容に基づく成語は、次第に使われなくなる傾向はあるが、政治家や会社・団体の幹部は好んで口に、話にはずみをつけようとす。

二字漢語は同音語が多いが、四字漢語ならば、耳から聞いた時にまぎらわしさが消え、しかも含蓄深い内容を表すところから、戦前派（特に男性）の一部が口ぐせにしていた。四字熟語は句には詠みにくい音数であるが、情況に合えば寸鉄人を刺す趣になる。また、東洋の故事とは別に、日本人が作る格言や形容語もある。文芸に限っても「昭和一念」とか、「明治百年」の類が近年になって現れたのは、日本人の造語力のはげ口の一面を示し、

使う側の作句者も、今昔の比較表現に役立っている。古語の類も、分かる選者・読者がいるかぎり永続するものである。

前稿で俳人の好む三字名詞や川柳向きの三字語の成り立ちを紹介したが、これは個性を推察する材料にはなりにくいかもしれない。川柳塔誌の最近半年の同人作品を調べ、毎月約一、一〇〇句の中に長い熟語が（送り仮名を抜いて考え）百句当りいくつあるかと数えてみると、

三字名詞 22—25語（漢語、混種語、和語の比率は6、2、1であった）

四字名詞 5—6語（ほとんど漢語）

五字以上の名詞 平均〇・六語

であった。毎月約二六〇人の作品の全平均はほぼこのくらいだが、作者による使用率の差は確かにある。数えやすい自選百句で調べると、三字名詞は少ない人で5語、多い人で30

語。四字名詞は1から12語ぐらいの範囲であり、筆者も句には書くが、談論の場で使う機会はない。しかし、知人には「談論風発」といった語句を瞬時に吐く四字熟語多用族がいて、当人の家系とか学習歴がなんとなく想像される。

塔誌の中では、「露天風呂」や「単身赴任」「悠々自適」などテレビ放送の情況語が多い。そのほか応用の広いパターンに、一期一会、無為無策、自画自賛、夫婦喧嘩の類がある。近頃は「瀬戸大橋」や「二十一世紀」がよく出る。最近号から例を拾うと、

敗者復活時期を失したなと思う 侃流洞
満月が軌道修正した夜更け 柳 伸

塔誌以外の選集や解説書ではどうだろうか。紙面が漢字で黒っぽくなるので見つけやすく、約一万句の中で四字熟語の数は三百以上あるが、半世紀以上にわたる句を集めた鑑賞書では、「川柳でんでん太鼓」「川柳のすすめ」（浜田ほかの両方とも、百句あたり三語強し）がなかなかの両方とも、百句あたり三語強しは難しい」と言っていたのは、四字漢語にもあてはまるのだろうか、これを歓迎するか否かは読者の慣れにもよろう。古川柳を含めて和歌系文芸に四字漢語が少ないのは確かである。

また、明治時代までの漢詩や朗詠の同好会

期間別の四字名詞出現率 (100句あたり語数)

— 類題別・番傘川柳一万句集 (正・続) より抽出 —

類題区分	期 間	戦 前 (大2～昭20)	戦 後 I (昭21～38)	戦 後 II (昭39～58)	句語の例 (戦後)
天象・季節・行事・ 宗教・歴史		1.5	5.3	5.2	菜種梅雨 曼陀羅華 四月馬鹿 暑中見舞
サラリーマン・ 社会勤労		1.3	4.2	8.5	人事異動 課長補佐 新入社員 汚職・
職業さまざま・商店		0.7	2.4	4.4	駄菓子屋 自動販売機
政治・法律		0	6.0	6.2	保守革新 民主主義 派閥・
調 査 句 数		525	1219	1819	

(付記) 五字名詞 (御、長、状、様などを語基に付けた語) を含めて数えた。

の人が三十一音や十七音の世界に侵入することとはなかつただろう。昭和になって四字熟語を入れた佳句が、次第に現れていると思つ。

よう惚れたものやと親族会議なり 菜

通り抜け附和雷同の顔つらね 薫風

最近の川柳塔作品では、百句あたりの四字漢語は平均五・五語と見たが、これは、戦後日常用語の複合化が進んだことと、新語を採り上げたい作者心理と、上五の字余りに寛容な雰囲気各結社にあるからでなからうか。

「教育勸語」の漢字は忘れても、「拳々服膺」式の語調は忘れず、目上の人の訓示の抑揚が継承されているような気がする。

類題別番傘一万句集 (第一集) には、戦前作品と戦後の昭和38年までの句が区分され、続篇には昭和58年までが一括されている。この三期間で四字熟語の出現率には差がある。

戦前作品……百句中一・五語以下

戦後昭和38年まで……百句中二・六語

昭和39—58年…… 四一八語

これらは類題別区分の一部を抜き取つて調べたもので、上表にデータを紹介する。

なお、戦後に普及した四字漢語は相当な数であり、現在、新聞に載る四字名詞の九割は二字の単語を組合わせたものである。盛んに使われた末「労組」や「団交」のように縮め

られることがある。外来語も同様で「ラ・テ欄」でも通じるし、手帳に各自略記することだろう。

さて四字熟語の分類は、大別して人・状態事柄の三種類に、さらに細分すると各10項目以上に分れる。「四字熟語の読本」(小学館)によると、その一項目「才能・技量」の例として、海千山千／才氣煥発／博覧強記／器用貧乏／浅学菲才／無芸大食……など両極端の言葉が示してあり、見るだけで楽しめる。当てはまる人物を連想することもある。この手の四字熟語は三、〇〇〇ぐらいあるという。

〔付記〕 俳句に使われた四字漢語は調べやすい。子規以来の60年間の有名句約六百について数えると、百句当たり三語ぐらいだが、大半は動植物名や固有名詞である。

虚子の「葦右往左往菓子器のさくらんぼ」(昭22)、「去年今年貫く棒の如きもの」(昭25)、あとは青畝の「案山子翁、三鬼の「阿鼻叫喚」といった熟語はよく利いているが、政治や社会の用語はほとんど見かけない。四字漢語は人間心理をうかがつ川柳に向いていると思つ。今のところ、薫風の作品に四字漢語が多い(それも仏教関係)と思つた。

(続)

第3回

中国吟行の旅

〈続〉

63年 9月18日～23日
北京・洛陽・西安・上海



上海・西園飯店で

西安 礼賛

田中正坊

都会で生まれ育った私は、旅行したとき、国内・国外を問わず、個々の名勝・旧跡よりも、町並みというか、トータルな町の印象が気になる。

第二回の中国旅行では、格段に道路が立派で、多くの美しい公園に恵まれた北京を礼賛したが、今回は文句なしに西安を挙げたい。

都市としての規模から言えば、人口二〇〇万、郊外を含めても五五〇万人だから、北京・上海とは比べるべくもない。しかし、歴史的文物とそれを中心とする都市としての発展という点では、首都としての機能を果たさなければならぬ制約がある北京よりも、すぐれた可能性を持っていると思う。

その一つが城門と城壁で、北京は都市としての交通機能を重視して、そのほとんどを撤去したが、西安は明時代のものがほぼそのまま残り、見事な長城と環濠が都心をかたちと囲んでいる。もとよりその規模は、唐の都として栄えた長安時代よりも数段小さいが、古都の面影を憶ぶに十分である。

唐時代の旧跡としては、大雁塔・小雁塔などを数えるにすぎないが、東方には兵馬俑坑

の発掘で脚光を浴びている秦始皇帝陵がその偉容を誇り、西北方には漢の武帝の茂陵、唐の高宗の乾陵はじめ遺跡にこと欠かない。

これらを観光する基地として、さらにシルクロードの起点としての町の開発・整備がいま急ピッチで進められており、今回私たちが泊ったホテル西安賓館は、三回の中国旅行の中では最高級であったし、レストラン唐樂宮もすばらしい。大雁塔の七層から市内を眺望する私の脳裏に、国際的な大観光都市としての西安のイメージが尽きるところなくふくらんでいくのであった。

洛陽の一日

山崎君子

九月十八日の午後北京空港に無事到着。このたびも真っ赤なカンナ、サルビアの花に迎えられた。中国の花はどうしてこんなに鮮やかな赤なのだろうか。

夕方五時分の寝台車で洛陽へ。翌朝六時二分着、六大古都の一つである洛陽での一日が始まる。王城公園・老城自由市場等の見学。自由市場は一筋の道にこたごたといういろいろな品が並び、多くの中国人で賑わっている。その中を軽く手をつないで見ておられた千金良夫妻、この旅行に四組の御夫婦が参加され、

それぞれに微笑ましい光景に出逢った。

唐三彩の工場では、赤・黄・緑の上ぐすり
がととも美しく、表情豊かな馬等の飾り物を
薄暗い部屋で若い男女が作っていた。鋳型で
作るとばかり思っていたのに、部分的に拵え
ているのに驚いた。私も小さな馬を一つ買っ
た。

ここで嬉しいことがあった。休憩所で台湾
の旅行団の一員で新竹市に住んでおられると
いう女性に話しかけられた。彼女は大正十一
年生れで日本の教育を受けたとか、とても上
手な日本語だった。終戦まで新竹に私の叔父
たちが住んでいたと言つと名前を聞かれた。

彼女は私の親戚を知っており、特に祖父をよ
く知っていて、短い時間だったが、想い出を
話してくださいました。こんな所で……、本当に
嬉しい出逢いだった。これから香港経由で日
本へ行くとのことだった。台湾から中国へは
まだまだたやすく旅行できないが、私たちは
幸せだと言っていた。一日も早く交流がスム
ースにできるよう希った。別れる時、夫人が
私の耳許で「お大事に」と言われた。涙が出
てきた。夫人の眼も潤んでいた。

白馬寺の捨児の泣き声がいつまでも悲しく
耳許に残ったけれど、洛陽での第一夜は楽し
い珍騒動で更けてゆきました。

唐三彩並んだ馬は美女ばかり

城門で赤いざくろに取りまかれ

楊貴妃の湯浴みのぞけぬ華清池よ

心の古里 中国

赤川 菊野

古い歴史・文化を持つ中国の仏像に魅せら
れ、憧れをもつようになったのは何時の頃か
らだろう。

テレビや書物だけでは飽き足りず、何時か
はきつと自分の足で、自分の眼で触れてみた
い、その思いは日増しに強く、夢は膨らむば
かり。その憧れの地、中国へ、三回も行くこ
とのできた幸せと喜びを、想い出とともに静
かに噛みしめております。

北京・洛陽・西安、何れの都市も近代化が
進み、林立する大形クレイン、その発展ぶり
には目を見張るものがありますが、一步裏に
入ると省エネのためか、夕暮れの戸外に机を
持ち出し、勉強している小学生の姿も見られ
ます。

今、中国では学校はなれの傾向にあるとか。
大学を出て役人や教師になっても、給料が安
く、生活は苦しい。それよりも商売の方が金
儲けには手っとり早く、収入も多い。そんな
ことが高校や大学から中退者を招いているよ
うです。私たちにずっと一緒に下さった
通訳の劉さんも、何時か今の勤めを辞め、商
売をやってみたい意向のようでした。

洛陽竜門の石窟は、雲崗のそれにも勝ると
も劣らぬものがありますが、哀しい宗教戦争
のため、顔面を破壊されたものが数多く見ら
れたのは残念でした。

二千年の歴史を秘めた秦の始皇帝兵馬俑、
碑林、その昔、空海が修行された青竜寺は四
国育ちの私には格別の感慨がありました。楽
しかった六日間の旅も終りに近くバスは一路
上海空港へ。劉さんのご挨拶、ひとりひとり
堅い握手で再見を誓う。心温まる人と人との
出逢いを胸に、眼に触れたものはしっかりと
の裏に、大好きな懐かしい心の古里を後にし
ました。

中国に魅せられて

春城年代

訪中三回、幸い元気に何の支障もなく終り
ましたことは、神仏の加護、そしてわが周囲
の平穏に因るものと感謝の念しきりです。

古都洛陽、西安は中国でも最も古い都で、
古代の日本との関わりの深さを思いめぐらす
とき、中国の旅にこんなにも魅せられるのは
私ら日本人の遠い祖先と中国とのつながりが
呼び寄せるのかも知れないなどと思ったりい
たします。

洛陽にある中国最古の白馬寺では、なぜか



左から菊野・君子・年代・天正夫妻

吸い込まれるような暗さを覚えました。寺の回廊に捨てられていた赤ん坊の泣き声と物を売りつける少年僧とおぼしき何人かに囲まれたのも、暗い印象を受けた一因でしょう。

西安はかつて長安と呼ばれ、洛陽とともに長く都として栄えました。日本の平城京や平安京は、この長安をまねて造られたのだそうです。

西安の姉妹都市である奈良で開かれた奈良シルクロード博を見て、中国文化の影響をなお一層胸に刻みました。

陝西省博物館の石碑の林立にまぎれ込んで何とも言えぬ妖しさを身のまわりに感じたりその碑に刻まれた漢字の美しさに魅せられたり、とにかく古いものが汲めども尽きない大

国に、小さな体はすっぽり吞まれてしまいました。二千年もの間、埋もれていた兵馬俑しかり、広大な墓域は今も発掘作業が続けられているのです。

大阪空港に帰り着いた途端、疲労とは別にああ！敦煌にも行きたいという思いが胸をかすめました。

まなかなな歴史ならずや兵馬俑

陶俑に陶馬に今は風温し

始皇帝に殉する土偶の叫びなど

黄土のなか武士と軍馬のさまざまに

片言も言えずに終る再見

ある中国人

春城 武庫坊

「あなた日本人の人でしょう
何所から来ましたか？」

此処は古都洛陽 雑踏の自由市場
客を呼ぶ声にまじって
女の喧嘩している喚声が飛び交う

あたりには日本人の姿は見えぬ

声をかけたのは中国人

中肉中背、衣服もその辺と同じもの

うなずいてちよつと警戒しながら立止ると
人なつっこい笑みを浮べて

「わたしは昭和十四年から十六年まで
鹿児島にいました

十八年から二十年まで陸軍の通訳しました
その間日本人は大変親切でした」

彼は非常に楽しそうに話を続ける

「日本の人を見るとなつかしくて

話をします 日本がなつかしいです」

ここで一瞬間をこわばらせて

「戦争すんで中国で五年刑務所にいました
私の名前：松田三郎：でもこれ幻の名前」

といったずらつぱく笑う

このあたりの街の様子を話したあと

「これからは何処へ行きますか？」

「今夜は洛陽に泊って明日西安へ」

「ではお元気で、さよなら」

彼は日本語を大事に噛みしめるように話す

差し出した手をつかり握りしめ

背を向けて雑踏の中に姿を消しました

戦時中の不愉快な出来事が語られている時
日本人の心の温みを大事にしてくれている

彼の今後の幸せを祈らずにはおられません

彼を呑み込んだ街の雑踏は夕方になります

ます喧嘩を加え、私達は進台場所のバスに

乗り込みました

今夜彼はきつと日本の夢を見ているでしょう

柳界展望

集録一敏・武庫坊

64和歌山市紀三井寺山の2
牛尾 緑良苑

★第3回国民文化祭芸文部
門川柳大会（10月23日・神
戸国際会議場）で次の本社
同人が秀作賞を受賞した。

北前船港は過去にしがみ
つき 安平次弘道
禪を白旗にして生きのび
る 浜本 義美

島かえせキリンの首に万
灯会 中原 颯人
母として童話の書けるべ
ンを持つ 中野 颯人

核を切るペンヘインクが
涸れかかり 有働 芳仙

★10月23日、自泉会館で開
かれた岸和田市民川柳大会

★川柳わかやま忘年句会
12月11日午前11時から海南
市藤白七五八〇中野酒造・
長久邸で開催
お 話 黒川 紫香氏
「長い」 大矢 十郎選
「久しい」 西田柳宏子選
「白」 野村太茂津選
「当日囁目」 阿萬 萬的選
会費五千円（庭・酒蔵見学）
申込先 締切12月5日

新同人紹介

■ 藪 田 獭 脊

— 太茂津・紫香・鬼遊・薫風推薦

■ 安 本 孝 平

— 僕川・薫風・紫香・鬼遊推薦

で同人の谷垣史好・河内天
笑・佐藤藤子の各氏がそれ
ぞれ秀句賞を受賞した。

★10月30日、吹田市民会館
で開かれた吹田市民川柳大
会で同人の河内月子・田中

正坊尚氏が秀句賞を受賞。
★11月3日、寝屋川市立総
合センターで開かれた寝屋

川市民川柳大会で同人の本
間満津子・西田柳宏子・宮
園射月芳各氏が天を獲得。

★「川柳宮城野」10月号の
「川柳アラカルト」欄に次
湯に浮かばいっそおかし

いあばら骨 谷垣 史好
子とつなく手の愛しさよ

はかなさよ 岩本 笑子
プーメラインいささか酔う

て父帰る 藤井 高子
俵せがばんやり見えるす

り硝子 笠嶋恵美子
意のままに咲いて生きた

し水中花 田中 みね
▽出版紹介△

編）には本社の西尾栗主幹
はじめ橋高薫風・黒川紫香
野村太茂津・西田柳宏子、
第5巻（中国、九州編）に

は小林由多香・八木千代の
各氏が執筆に参加。

★かもしか川柳社（青森県）
は「かもしか」9月号を第
17回かもしか川柳大会特集

号として発行。
★弓削川柳社（岡山県）は
「紋土」10月号を第40回西

日本川柳大会報として発行。
★竹原川柳会（広島県）は
市制30周年・川柳たけはら

特集号として合同句集「川
柳で竹原をよむ」を刊行。

★札幌川柳社（札幌市東区
北二十一条東三）は齊藤大
雄著「残像百句」現代川柳

の鑑賞（B6判・二一五頁
価一五〇〇円・二一五〇円）
を新刊。

▽同人消息△
■木本朱夏氏（和歌山市・
同人）10月13日から和歌山

放送（ラジオ）で毎週木曜
日午後8時～9時、ミュー
ジックステーション番組を

担当、川柳を多分に織り込
んで放送中。
■井上白峰氏（大阪市・同
人）は5月以来、神経を痛
めて入院中。ご快癒をお祈
りします。

■山下みつる氏（八尾市・
同人）は定年退職を機に雅
号を「美津留（みつる）」と
改めた。

▽お便り△
■山内静水氏（竹原市・参
事）国民文化祭神戸大会

ご苦労さまでした。林野麩
光先輩の句集発刊大会に竹
原から二〇名参加、総出席

者二三四名、投句四〇名と
一応の盛会と喜んでいます。
栗主幹や副主幹から祝電を

頂き、面目を施しました。
▽訂 正△
■11月号75P中段10行目の

（拝光教）は（拝火教）

おみくじが凶と出たので木に結ぶ
縁談は近いおみくじを結ぶ枝
拍手を打っておみくじ結びつけ
照子

(おみくじ結ぶ舞妓の指に春がある)
雨の寺萩に結ばれおみくじ紙
好笑
(雨の寺萩に結ばれてるおみくじ)
こころで趣向を変えて、

北海道四国本土に結びつけ
しんじ
科学の粹本四を結ぶ夢の橋
三津江

島結ぶ橋に素朴が蝕ばまれ
サワ子
トンネルと橋とで結ぶ狭い国
和多留

島と島結ぶ列島旅に出る
保夫
結ぶ橋出来て小島の暖かし
由梨
(島結ぶ橋へ夕陽が絵の如く)
次は、オリンピック

友好を結んで世界まるくなる
トキ
オリンピック世界の国々縁結び
秀香
アイドルと結ぶ世界のオリンピック
芙美子

(オリンピック世界を結ぶ火が炎える)
靴の紐を結ぶにもいろいろとあつて
登代
年ながら運動靴の紐に馴れ
明吉
編上靴堅く結んで荒野征き
義

靴の紐結び直して初出社
とく子
靴の紐結び直して初出社
とく子

ネクタイも結べて新社の初出勤
光子
新しいネクタイ結んで初出勤
三津江

(初出社もネクタイは結べます)
ではいつものように、もろもろの結ぶを

結ぶのが下手でも便利なガムテープ
金吾
(結ぶのは下手ですベタベタガムテープ)
連結に揺り起された夜の汽車
房枝

(連結に夜汽車の夢を起される)
めでたしと結んでからの無礼講
太一郎
長老の出番で会が結ばれた
小鹿

(会結ぶ役に長老引き出され)
結んでる形うれしい帯たすき
隆雄
(襷袢手に結んで女将にある笑顔)
根回しの努力が遂に実を結ぶ
正之

だが、(根回しが実を結ぶとは限らない)と、
リクルートのようにもつれることも、
口固く結んだ顔は父に似る
正之
点と点結ぶと黒い影が浮く
多織

男同士に殺し文句がついてる
緑良
結び目にこだわり人生裏街道
章久
(男と男の結び目危ない橋もあり)
宏安

紺緋赤い襷を背で結ぶ
章久
(紅襷結んでそば屋の紺緋)
目出度しで結んだドラマ揺れ止まず
由梨
(目出度しで結ぶ劇にも涙ぐみ)
吹き溜りだから結び目はどけない
隆雄

(吹き溜りにいて結び目がほどけない)
世界の映像結ぶロケット打ち上げる
かずこ
結ぶのが厄介老いのルーブタイ
勝美

柳壇と私を結んでいるポスト
正子
点線で結べば泣かされる女
治

蝶結びのリボンも嬉し七五三
ちず子

蝶結び孫に教えている根気
静子
結ばれてから威張り出す葉指
春枝
力草結んで遊んだ日の記憶
勝美

結ぶ帯解く帯芸の舞台裏
志華子
こま切れの刻を結んで趣味に生き
遊光
雑草の堪えて可愛い実を結び
ちず子

母ゆすり男袴の紐結び
遊光
水引の白は誠で赤は嘘
治

半生を堅く結んだ寡婦の帯
遊光
ガン患者心結んでモンブラン
すみれ

竹支柱に結ばれ素直に菊のびる
しづ子
山頭火と結ぶ葎は寒くない
緑良
桃園で契りを結ぶ三国史
主坊

さりげなく結んでさすが祖母の帯
多織
お正月嫁と一緒に昆布結ぶ
美恵子

いつものことですが、初心の方々の目は同
じ方向に向きやすいものです。今回は同想の
句を並べてみました。自分の句と他人の句を
見比べて見るのも、一つの勉強かと思つて試
みてみたのですが、如何でしたでしょうか。
では来月を期待いたしております。よろし
く。

題「北国」
12月10日締切(2月号発表)

ハガキに5句以内
「卒業」
1月10日締切(3月号発表)
宛先 〒588 泉佐野市中庄一〇八一―九九

阿萬 萬的

見送りのテープが絡む岸の杭 白漢子
 岸に立つライバルいつも意識する ろ亭
 清流も濁流も見て岸の花 満津子
 雪月花岸辺に遊ぶのは詩人 元江
 対岸の俤せばかり目に入る 文子
 流れ藻よ岸の向うは嘘の街 正敏
 向う岸 国利民 福人 騒ぎ かなめ
 着岸の安心權を取り落す 満江
 流れつく岸には仏 鬼も居る 柳五郎
 対岸の火事では済まぬ子の進路 高明
 養殖の鯛は知らない向う岸 たつみ
 安らぎは鳥獣戯画の向う岸 規不風
 岸辺の葦は昨日のことは語らない 枯梢
 夕焼けを呑みこんでいる向う岸 蟹
 喜寿の岸妻と繋いだもやい舟 洛醉

とどかない愛へ海岸線が延び 可住
 ストレスを岸から捨てる負けいくさ 雄々
 対岸の街に踏絵の過去がある 京子
 岸へ着くまでは本音をもらすまい 高子
 岸の柳どじょうのとれる目を待とう 杏村

人
 行き着いた岸辺で虹を見失い 早苗
 地
 使い古しの台詞を岸において来た はるお
 天
 八方美人今日はあちらの岸に居る 多織
 軸
 向う岸 安定剤がおいてある

目 標

谷 信 夫 選

目標が 夢があるから生きられる 克子
 目標校目指し頑張る灯は消えず 遊峰
 横綱を目標にして砂まみれ 義美
 目標へいつかは届く蛙の子 知恵子
 目標の無いまま登る老いの坂 白峰
 目標の獲物へ鳶の急降下 白峰
 もう一度病いやすを目標に 志重
 目標の師あり友ありありがとう 正子
 目標を地球の裏に置く若さ 奈美子
 目標にむかって燃える気概見せ 抜智
 目標があるので歩き続けます 重人
 目標を明かすと仲間笑い出す 白漢子
 ぶり向けば目標ちがう夫婦道 敦子
 顔上げて目標みつめ生きている 小鹿
 目標は一日一句日記帳 三和
 目標はせめても高い方がよい 宵明
 目標がハラハラしているタイエット 典子
 運動会園児が目差すママの胸 都姫子
 目標は子供二人とマイホーム 白光子
 目標のあれば人生又楽し 哲静
 目標がありアルバイトまだ続き 晚明
 目標を達し眩しい茜雲 サワ子

目標へ進む瞳が澄んでいる 典子
 目標を果たし安堵のいい寝息 通彦
 目標が出来て輝くニューの靴 新一郎
 目標達成お子さまランドに旗が立つ 虹子
 目標へシルクロードの永い旅 兼治郎
 七夕に可愛い目標くくりつけ 雀踊子
 目標へ走りつづける父の貨車 ちかし
 目標を持った若さが光ってる 玉恵
 目標は語らずじまいの束ね髪 敏之
 目標に 一歩一歩と汗流す 弘朗
 目標があって顔にも艶が出る 時弘
 余生なお目標をもつ辞書を繰る 多織
 目標を下げると見える広い空 伊津志
 目標のある内職は唄が出る 浪速子
 登竜門という目標に迎えられ 三五島
 目標を追ってロマンの幾山河 理恵
 目標にとても素敵なライバルを 保
 目標は吃水線に合わせとく 豊
 目標へ弱音は吐かぬ四肢を踏む 康子
 人
 目標へ一直線の生真面目さ 康子
 地
 一丸となるのが好きな目標で さと美
 天
 目標があるから忍の一字抱く 諷云児
 軸
 老いの目標今日無事の軸をかけ

本社 十一月句会

十一月七日(月)午後六時

メンズファッションセンター

今月から句会運営の趣向が変わって、まず席題選者のトップバッターはベテランの小出智子さん、巧みな被講で軽味の佳句が発表されて滑り出しは上々。次は奥山美智子さん、介添役の紫香氏と一緒に登壇、紫香氏が代って被講するという新しい試みが行われた。

おはなしは高杉鬼遊さん、川柳のあり方についていろいろと話されたが、戦後間もない二十一年、桑原武夫が『俳句第二芸術論』を展開した時、高浜虚子が「私は二十番目ぐらいいと思っていて、二番目に昇格したか」と受け流した。川柳家もそういうウイットに字ぶべきだと言われたのが印象に残った。

初出席は北山悟郎(大阪)さん。月間賞は岩本雀踊子さんが獲得。

(進行)天笑・敏 (受付)年代・藤子
(記録)射月芳・月子

出席者―笛生・紫香・美智子・颯云児・白

漢子・武庫坊・年代・佳秋・狸村・小路・章久・寿美・作二郎・藤子・すすむ・敏・眉水しげお・萬的・杜的・三男・勝美・英子・金太・柳宏子・凡九郎・憲太郎・隆二・柳影・芳子・幸・満津子・典子・みね・千秀・茜・楓楽・太茂津・柳伸・悟郎・正坊・浩一郎・唐佑・いわゑ・みつ子・利武・東雲・恭昌・可住・文秋・吸江・月子・天笑・鬼遊・洋敏智子・冬葉・悦郎・外吉・昭子・美代子・満洲子・吐来・タン吉・英壬子・射月芳・頂留子・史好・美房・栞・規不風・薫風・重人・度・寿美子・雀踊子・寿子・岳人

席題「沢山」 小出智子選

悪友をいつも沢山持ってます
沢山の激励があるベトドクちゃん
折れそうな矢なら沢山持ってる
川柳の本を沢山持ってる
リクリートも沢山と思う日々
千の数読んで今夜もねむれない
手のやける部下を沢山持ってる
サンマもつとりに行かないことにする
子沢山呼ばぬ子供がとんで来る
借金もあだ名も沢山持ってる
沢山の孫の中にも好き嫌い
沢山の人にもまれて知る自分
話し好き三人秋の夜がながい
茶飲み連れ沢山できて老けられず
御山なうわさ話が流れ出す

沢山は無いが父が出して呉れ
たくさんの信者で願届かない
お隣の内幕沢山知ってる
温もりがほしいと沢山理屈いう
おおようにどの子も育つ子沢山
友だちが沢山できた惣坊主
戦争はもう沢山と畑を打つ
噂を沢山わたしの胸でねむらせる
子沢山兄に負けない子に育ち
貧乏な友なら沢山持ってる
フイーリングの合うのは沢山はない
沢山な人が集まる二重橋
沢山のおみやげを買う義理があり
問題を沢山かかえ飲んでる
定年後読む気沢山並べとく
たくさんで来て落柿舎をこぼれ出る
松茸がたくさんあった話など
パチンコの隣は沢山出てる音
沢山の秋がふるさとから届く
ものさしを沢山に持つ楽天家
先生がそばに沢山いて困る
数えれば沢山恩を受けている
まごころだけは沢山持っているつもり
想い出を沢山溜めている日記
沢山のファンを妻が不思議がり
病院へ行くとたくさん待っている

席題「今夜」 奥山美智子選

妻の居ぬ今夜の酒はよくまわり
洋敏

紅さし指女を捨てるときもある
 女である限り口紅はなさない
 いい女になろうと思う紅の色
 少年のようにリングが紅くなり
 白装束へさす口紅は別に持つ
 紅生妻楽観論はほどほどに
 ひとりずつ男を殺す紅をひく
 飯の世の花は真紅の薔薇がいい
 紅生妻お前と生き方は同じ
 本当の答えは紅の色にある
 まだ娘等に負けてはいない紅を選び
 五時からの男を騙す紅をさす
 この街で紅の濃うさを気にしない
 一応は紅一点にしておこう
 紅顔の日に戻ってるハーモニカ
 少年はリングの紅に恋をする
 おばさまと言われてからの紅を引き
 口紅をふきとる今日を消すように
 何の日か妻が口紅つけている
 控え目に口紅塗っておく喪服
 自画像の湯きへ落す紅の彩
 亡父と逢う母の柩へ紅を塗る
 口紅をまっかにならべて便秘症
 嫁はんをすこし妬かせる紅い糸
 紅もえて急に逢いたくなくなつてく
 紅一点あほな男の話聞く
 日の丸の紅を信じていたいくさ
 母さんの絵の唇に紅を塗る
 大胆になれる少女に紅が冴え

佳秋 昭子 隆二 金太 幸 楓楽 天笑 美代子 薫風 雀踊子 小路 諷云児 冬葉 笛生 正坊 いわゑ 吸江 藤子 洋敏 白浜子 芳子 佳秋 栗 鬼遊 寿子 しげお 妻子 螢 芳水

紅はいりませんか北への旅立ち
 よく食べたあとたつぷりと紅を塗る
 紅鬼灯妻が二十で嫁に来た
 紅白の紐がもつれて風夫婦
 紅い靴一番安い肉を買う
 山紅う燃えてシヨパンの曲を聞く
 パピペポ私の横に紅一点
 紅をさすころ渴いてゆくまえに
 二日酔いに言うことがある紅生妻
 紅生妻一つの主張持っている
 紅筆の勁さがかなしそれから
 紅ひけば語りはじめの紙の難
 神話など信じぬ巫女の紅袴
 紅椿江差追分聞きはれる
 緑良 浩一郎 雀踊子 荒介 栗 瑞枝 狸村 寿子 しげお 典子 年代 荒介 雀踊子 岳人
 (清記・楓楽)

◆
 ■訂正 11月号89P上段9行目は「秋たけ
 なわ法事ばかりに招かれる 満洲子」、同91
 Pの「眼鏡」の天の句「自慢にもならぬ老眼
 鏡が要り 笛生」に訂正いたします。

川柳塔社常任理事会(11月1日)
 出席者―栗理事長ほか23名
 〈議題と報告事項〉
 ▽川柳塔作品・資料展について敏氏から報告
 提案があり、運営について協議。
 ▽藪田猿沓(静岡県)安本孝平(静岡市)両
 氏の同人推薦了承。

謹告

川柳塔同人・誌友の皆さま
 には、ますますご清栄のこと
 とお喜び申し上げます。
 昭和初期から約六十数年間
 にわたり「南海電鉄川柳部」
 として活動してまいりました
 が、今回、廣井季柳子が退職
 (昭和64年3月)するにあた
 って後継者不在のため、一時
 休部することとなりました。
 したがいまして、十二月句
 会を「各地句会案内」のお
 りサヨナラ句会として開催さ
 せていただきますので、よろ
 しくお願いいたします。

南海電気鉄道株式会社 川柳部
 廣井季柳子

老地獄壇

毎月25日締切。原稿用紙使用。雅号含めて20字まで。一人一句。担当・玉置重人

城北川柳会

神夏磯典子報

老人の飛入り演歌死に土産
金運に素通りばかりされて居る
一人寝の空虚を埋める酒の味
遠い日の緑日亡父の肩車
老いあわれ甘い言葉にすぐに酔う
朝顔に竿を取られて千代思う
行く夏へ出番待ってた虫時雨
友見舞我が胃袋に感謝する
四方山の話相手がほしい母
毛糸針一目一目が孫の顔
家計簿が秋の味覚で出る赤字
原爆忌遠い昔が生きている
ほどほどの味が出て来たフルムーン
悪筆のままでサインがサマになる
商魂がリッチに囁く玩具迄
快い朝だと思つ白いシャツ
書く事は心に希望の灯をともし
一灯は私の祈り万灯会
病む床に葉にまざる柳友の声
最下位へ弁解がありファン胸
一人酔う心に秋の風を聴く

正之 登志代 八重子 公一 登美子 達子 テルミ 佐津乃 ぶさ子 市郎 静歩 静子 静子 文子 トキワ 文子 すみれ 倫子 白峰 温子 さくゑ

ご好意と甘いの中で迷っている
万歩計梅に初まり芒まで
四つの島へ世界の荒波押しよせる
シャツ一枚俄かな客で服を着る
古ワイシャツをエプロンにする齡が知れ
洗濯のシャツまで女房の尻の下
二日酔夫婦げんかの種になる
晚しやくに焼まつたけで良い機嫌
働いて積んだ積木は崩れない

堺川柳会(九月旬会)

河内

月子報

アツサリと無理が通って恐くなり
ひとりだけ群れを離れて儲けてる
よく喋る息子無口な父に似ず
危険水位でまだうろついている息子
百円ではかない夢の宝くじ
ときに無理言つて心をためす妻
お賽銭百円願ひごと多し
生き生きと息子に好きな人が出来
群衆の中でも僕はひとりです
少々の無理には馴れた妻の知恵
決断のたびは無理を聞いてく祝膳
無理をして来た甲斐がある瀬戸の旅
百円で欲を願ひ鈴ならず
群れて咲く花に安心感がある
コスモスの群れに慰められている
群れの中きらり光るを見逃さず
無理なこと無理だと言おう蝸牛
胸張ればちゃんど肋の数が読め
胸たたく位で任せたり出来ぬ
モノリザの胸のあたりを撫でてみる

典子 新一郎 満津子 午郎 さきみ子 秀夫 みさ子 輝子 右近 甘平 外吉 育園 金三郎 素灯 信博 純枝 左久良 凡九郎 柳宏子 柳影 頂留子 凡子 志華子 泰子 庸佑 正坊 花村 妻花 耕花

血の汗で敷いたルールを知る息子
胸裂ける息子が乗った船の事故
嘘言えぬ男で群れを破門され
胸のうちさげすつきり送る日々
だらない夫婦をちゃんど知る息子
胸襟を開けばはなし速くなり
無理をしているなど鏡そっぽ向く
ジェラシーの鬼が一匹胸に棲む
百円の値打ちの順にいる家族
無理させて少し大人になりました
嫁さんの留守に息子はよく喋り
泣きたくて群れを離れて飛ぶカラス
親孝行すれば息子もしてくる
パーゲンに群がってふとおぞましい
胸かしてはんこも貸してたまされる
エレベーター息子の肩が目の前に
根なし草甘い都会の灯に群れる
嫁さんの留守に息子はよく喋り
遺産相続息子に嫁が知恵をつけ
むらがすつても首を入れてみる
足を引きすつても群れを離れない
群像の一つ終生胸を出す

夜市川柳大会

河内

月子報

一足す一は二と答えている甘さ
負けそうになると女を主張する
甘酒に酔うたか平和論眠る
雑草は甘えを知らぬまま生きる
甘い球投げても腰が引けている
白桃はいつも甘いに限らない
冷奴きみの噂を食べている
よい噂ばかりを聴いている金魚

寿恵子 雅風 芳水 道女 与呂志 曲ん手 あかり 小雪 楓 かりん 万れい 千雲 東雲 半銭 真柳 豊子 紀美女 文 一一三 新造 天笑 月子 月子 月子 輝子 寿美 千寿子 かりん 東雲 甘平 金太 鬼遊

噂して三度の飯もよく食べる
 いやな噂へスパゲッティが固すぎる
 駅長も町の噂が気にかかる
 知らん人がわたしの事を言うてはる
 疵の深さへとびこんでくる噂
 火の深の炎になりたくて女酔う
 叱られてどつと火を噴く僕の耳
 迎え火をふつと横切った亡妻の影
 闇を彫る螢私の胸も彫る
 無人駅カンナは燃える火のように
 今にして紙風船と置き棄
 風船の紐をしつかり持っている
 風船も山の彼方がみたかった
 紙風船祖母にやさしく壊られた
 冗談が過ぎて風船割れました
 ふうせんのかゆみ命のおもさだく
 風船はあかるい窓が好きらしい
 紙風船秋の女に似てしほむ
 指切りをした鳩笛に騙される
 笛を吹く少年鳩を飼っている
 草笛に味方はかりでない誤算
 こんなとき誰だ口笛吹く奴は
 少女の笛おとこを信じたりしない
 少年の群れ草笛はもう吹かず
 戻り梅雨晴れてあなたの笛を待つ
 一房のぶどうそれぞれ個性持つ
 乳房痩せ妻はやさしくなっている
 ひからびた乳房は母の勲章だ
 歯のぬけた房の言い分聞いてやる
 乳房は港舟のかえりを待っている
 藤の房みんな詩人になりたがる

願 良子 紫香 射月芳 冬業 年代 豊子 武雄 みつ子 勝晴 翠公 智子 美緒 しげお 房子 千春 萬的 香豊 美房 史好 芳子 柳宏子 千代美 いわゑ 紀美女 あいき 亜弥 泰子 武助

負けてなどおれぬ乳房をもちあげる
 いつも主役になる草書体の乳房
 うつぶんの溜る乳房を持っている
 継ぎは男の帆のまま今日も待り出され
 満帆に男の意気が燃えている
 満帆のボルトシップに海がない
 親に背いて帆柱折れた難破船
 帆柱の一番先に母を置く
 送り火のほとけが早く来いという
 蓮の上の私は僕のお母ちゃん
 五百羅漢のひとりがこころから消えぬ
 仏彫り終えて仏と闇にいる
 野仏はやさしい顔の男達
 疲れているらしい仏が逢いに来る
 み仏に人は汚れた手ですがる
 輪の中で無心に踊る仏たち
 深い話をせずに訣れた仏さま
 石仏の目がうるむとき風が舞う
 小便小僧キザなせりふを聞き飽きる
 噴水に胸のしこりを洗われる
 今日噴水は満ち潮たとおもつ
 噴水の茶のみ友達天をつれ
 噴水の回って自首を考えろ
 噴水のような夫が欲しくなる
 少し距離おいて噴水美しい
 噴水でデートそれから闇に消え
 噴水のざわめき恋を掻きたてる
 万歩計噴水にきて息を入れ
 噴水の見える孤独な指定席
 噴水へ心あずける窓がある
 王様は噴水が好き夏の雲

藤子 醉月 幹子 妻惠子 寿章 純枝 正子 外吉 金三郎 十歩 富志子 三男 壯助 育園 英子 武庫坊 はつこ 敬吉郎 小路 文子 耕花 登志代 れい 半銭 花梢 小雪 正坊

八月の噴水が吐く血と嘆き
 暗転になって息づく名舞台
 舞台降りればただの小鳥になればいい
 今日からは舞台が変る印を押し
 やがて完全犯罪になる舞台
 島の舞台へ帰る台詞を考える
 自作自演の舞台でいつかきくれる
 殉教の足あたたためている舞台
 最後の舞台きつと喜劇になる舞台
 五幕目の当りで菊が返り咲く
 やがて流す涙仏にあすけよう
 男でもほればれとする帆柱よ
 母さんの火種はいざへ溜めてある
 葡萄の房も羊も鏡を聴いている

佳句地10選 (前月号から)

池 森子選

誰よりもピエロは赤い血を流す
 胡瓜曲って人の理想をあざ笑う
 子を産まぬ乳房未完のまま閉じる
 一枚のメモに鱗を剥がされる
 帯きりり締めて男を消すいくさ
 胃の底へ逢いたい人の名刺もつ
 毒舌の横が案外あたたかい
 幻影の泉と知らず恋螢
 きつちりと刀は鞘に納めとく
 ほおずきの赤をもらいに里がえり

定人 美津子 孤舟 速水 雄々 狩美 遊光 眉水 三和

緑良 千万子 狂虎 昭子 英子 太茂津 美代子 作二郎 日枝子 元紀 正子 完司 天笑

ミサの鐘夏の噴水乱れなし

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

夢成

忍従の母に燃えてる曼珠沙華

包丁のリスムで朝の幸を知る

有線の計報にしばし箸を置き

まだ呆けず手綱さばきのうまい母

野の仏話して行けと笑いかけ

もう少し素直になれたらなと思つ

新聞もテレビも野球占めている

逞しや球児の顔と土の色

送り火で送つてこれから盆休み

敵の数足りず一生平社員

気を長く持とう0からもつ一度

ぼけられぬ我が家の知恵を借りに来る

旅枕矢張り我が家の夢を見る

家ぐるみ暮らしの知恵をつぎ合わす

ヤレヤレと畳に寝ころぶ旅帰り

有り金をはたして戻る梯子酒

タクト振る妻の笑顔に支えられ

妻が癒え我が家のリスム取り戻し

取り調べのように取り巻く旅帰り

家計簿の色は財布が知っている

金銭の貸し借り悪意が仲たがい

悪銭で染いた富は砂の塔

宝くじお金の入る夢をおう

水引を掛けて義理をばはたす金銭

それなりの歩幅で回す老いの独楽

悲鳴あげだんだん太るウエストに

千金の夢見てはずれ宝くじ

ご飯粒拾わぬ嫁を歯がゆがり

にた川柳會

西村

早苗報

節子

重一

由郎

美を求めもとめていけば原始の絵

叩かれると知った蚊の目の速いこと

積乱雲の幻想女の夏帽子

肌氷るこわれた核の跡仕末

不覚にも鬼が待つてた曲り角

遠くへは行くなと小銭入れが言う

メンパーの一人浴衣が左前

念願の一矢叶うて的射抜く

饑舌の女に多い旅疲れ

位負けするなと尻をボンと打つ

自信もつ愛で反応問うてみる

秋風が肌をひんやりなでていく

カラットの指を女が上に組む

身の上を聞かされている旅の酒

人生を大事にしたいめぐり会い

山盛りのご馳走箸が動かない

即席の味にみじめさだけ残る

丸みある言葉は嫁に用意する

まだ出来る積り若さに負かされる

原稿用紙ベンも癖字に馴れている

腑甲斐ない果ての夫婦で秋力魚焼く

雨になる気がして借りたおんな傘

川柳東大阪

森下

鍵つ子へ壁がボールを投げてくれ

突き当たった壁が大人にしてくれる

單身を待てる壁のクレヨン画

ゼロ歳のこぶしは明日を握りしめ

ゼロ歳の出発友の手が温い

ゼロ歳の知恵母親の乳房もむ

罪深い男に恐い寺泊り

三和

雪代

メ女

哲三

紫泉

夢酔

花子

巡歩

宗光

多賀子

裕

晴月

雪子

登美也

寿美子

弘朗

愚童

雄踊子

雀々

秀子

舞吉

紫吻

早苗

愛論報

孤舟

美秋

文子

湖風

庸佑

晋吾

慶三

繁昌の店に恐怖の税吏来る

怖いもの見たさみんなの後ろから

口笛が吹けなくなっている恐怖

一斉に首も動いて視るテニス

土壇場で動いてくれた広い顔

口かずの少ない妻でよく動く

我が家には動くものなし殺虫剤

牙向いて恐怖の逆毛立てる猫

極道記者も動いてよく売れる

二浪して親の財布は骨と皮

気苦劣に瘦せて財布は火の車

ゆっくりと死角で動くかたつむり

三幸川柳教室

桜井

大の字になって文句のないわが家

あどけない孫が取りもつ義理の仲

どれどれと一家が寄つて子のテスト

即席がわが家の味になる恐さ

新しいのちわが家に灯をともし

嫁が来て家風静かにゆれうごく

運命線面映ゆい程ほめられる

キャンセルで拾った運と捨てた運

開運へ火の輪いくつもくぐり抜け

山かけの山が当たっただけのこと

幸運はせいぜい電車の席一つ

運向いて来たぞ口髭残しとこ

ハイあな百万人目の入場者

球運が尽きて涙のじむ砂

裸一貫聞き直りて運を呼ぶ

ラッキーなヒットが続き勝ち残る

たまに来た客が特賞持つてゆき

運のよさだけでなかった今の椅子

喜風

柳宏子

作二郎

しんじ

喜一郎

悦郎

雅士

章久

隆

頂留子

白屯

愛論

千秀報

文夫

可笑

正一

澄子

貞雄

正

定子

公子

敬子

重次

忠昭

由梨

守

育子

辰治

当代

カツミ

花一輪運命の河に流される
 今日運バチンコ競輪大当たり
 科学者に似合わず縁起よくかつぎ
 蟬しく緑者あつまる初施餓鬼
 縁のない銀行開店す
 ファックスで三下り半が送られる
 有縁無縁まつりばやしへ風の盆
 これも縁すり寄る猫を追い出せず
 夕顔と縁を結んで朝の露
 縁談が決まってからのいい話
 一期一会旅でやさしい風に会う
 三世の縁結局は妻ひとり
 雑草も忘れてのたばこ終戦日
 香りなき恩賜のたばこ戦日
 小さな恩暑中見舞のペンをとる
 恩讐のはざままで深くなる祈り
 朝帰り妻の恩赦がまだ下りぬ
 恩の字を軽く他人は言つてのけ
 コップ酒おかみ上手に恩を注ぎ
 美しく返つてほしい恩を貸し
 恩返しせめて父母らに近く住む
 生きる道運否天賦にして気軽

倉吉川柳会

渡辺

若旬報

朱夏 秀男 千鶴子 かなめ 清 茜 幸子 桂香 鉄治 和子 智水庵 千枝子 晏 正二 千秀 靖子 高夫 まさお 金一 みね 愛子

雨が止んだら御礼参りに出かけよう
 お礼には好きな地酒を掲げてゆく
 玄関に外出の札ぶらさける
 女閨に運ぶあひだは別れない
 謝礼には金一封が好かれませう
 ロボットはネズミが出て捕まらぬ
 御礼でも言わねば刺身食べられぬ
 居留守をつかうオムレツ餓っている
 生き別れ死に別れて老いてゆく
 髭面がリングゴの歌に泣いている
 ロボットよ私のエプロン着ておくれ
 ロボットが葱を刻んで女優
 別れたり出来たり忙しい女優
 最敬礼知らぬ子供が増えてきた
 ロボットで停年それから粗大ゴミ

川柳塔からつ佐教室 浜本 義美報

大胆な猿標的を背に野次る
 闇続くいじめ対策急がねば
 老醜をカモフラージュする髪を染め
 鉛筆を削り抜けそうもない柳句
 コスモスが秋に枯れゆくもい柳句
 梢上へせめて木の葉髪染める
 三文の得が溜って倉が建ち
 祭り前街はバーゲン花盛り
 祈る父母 子らは笑つて空の旅
 釘打たず短冊かけるむつかしさ
 病み疲れ好きな刺身も食べ残し

柳柳化粧檣

植村客遊子報

四十年まだまだ消えぬ傷背負う
 味噌汁のお代り民宿気前よし
 隠居部屋クシャミの後は独り言

白李 葉香 紅月 礎石 大鷹 悲子 三青 遊 はず子 輝月 遊光 遊光 遊光 永楽 客遊子 和子報 志洋 三郎 喜道 ときお きよし 治子 スミ 吸江 美代子 作秀 繁男 昭子

青筋が我慢しきれず立ち上り
 更年期我慢の灸もすえてます
 誰だって淋しいんだよ葱坊主
 躓いた石と孤独を語り合つ
 つまずきの始めはあなたとの出会い
 秋の虫夜長うれしく鳴き通す
 雑木林の間それぞれ空を持つ
 ホームラン出してサンパツの手が止り
 我慢して我慢して行く歯医者さん
 本人の知らないこともわかる友
 立ち読みもそぞろ彼女の来るを待つ
 八つ目に起き上がるとは限らない
 JR政治が走る赤字線
 台風の進路気になる鬼瓦
 禁煙の我慢に意志の弱さ知る
 初孫の歩みの前の石ひろい
 菊人形武田信玄まだつばみ
 絵本見る互い違いに靴はいて
 風鈴も合唱してる夜の灯
 海外のみやげ話に花が咲く
 風鈴がぱたり止まる熱帯夜
 風鈴が二人の仲を妬いている
 線上の起伏夫婦の足跡よ

打吹川柳会

江原とみお報

かな女 敦子 正枝 雅美 初枝 和美 本蔭棒 婦美枝 与呂志 政代 伴子 祐二 末一 信子 紀子 てつお よう女 松亭 好太郎 秀伸 美佐 和子

私の胸で蜜が明滅す
 あの頃は御馳走だった玉子飯
 永年の王座が揺らぐ米の飯
 人間を逆さに見ていた哲学者
 コスモスの性秋雨に返り咲き
 夕食の片付けわびし妻の留守
 じつと見るブルーのまなこ美しく
 白髪首丸めてのぼる手術台
 義理で来た講演味のある話
 未来学講義不気味なことばかり
 口先のうまさか武器の処世術
 右の手のおたりにいつも友がいる
 まるいから盃ちようど口に合う
 どこまでも味方崩さぬ白い杖
 カナ言葉伝統文化流れそう
 雨の街人に疲れて人を恋う
 佳い年だ明治と耳が遠くなり
 七人の敵に風は根性だけゆるする
 三人の敵に愛され帰れない
 中三の日記に母がうろたえる
 伝言に二こと味が添えてある
 新茶ですよ十萬億土の仏さま
 川柳塔まつえ10月例会 恒松
 秘密の戸開ければ過去が邪魔をする
 ストロローに秘密をそつと吸いこまれ
 我が家の灯秘密の鍵は見当らず
 やれりりの秘密の鍵は妻が持ち
 これ以上秘密に出来ぬ事を挙げ
 カラカラと笑い秘密は覗かせず
 秘密だよと言つて噂の輪を広げ
 上役の秘密を知つておびえてる

寿美子 妻映 紫子 雀踊子 たつみ 善政 三和 白峰 典子 柳風 温子 螢 正朗 芳子 梅朗 弘朗 吉朗 仙岳 野草 野太朗 節とみお 町紅報 たつみ 正朗 律子 ノブ 俊治郎 代仕男 みえ 市雄

あの秘密ハートの隅に秘めて置く
 娘の秘密隠しきれない男文字
 老夫婦秘密つくらぬ置炬燵
 受胎告知満天の星踊つてる
 大安吉日福の神様踊らされる
 姉のような人魚の踊る海を抱く
 事故もなく男女の踊る平和の輪
 お転婆が踊り習いに行くと言つ
 踊つてる敵をあざむく手だてかも
 踊らされると知りつつ逢いに行く
 黒幕の筋書き通り踊つてる
 笛吹けど踊らぬ町の活性化
 踊りの輪廻して傾く月の影
 八十歳名取りで踊る舞扇
 小銭では孫の玩具に手が出せず
 夢を買つ小銭をすこし貯めている
 駄菓子屋で温い小銭がならべられ
 傷口へ人の温もり知る小銭
 小銭から世渡りの知恵教えられ
 小銭機の前で小銭を数え出す
 小銭すらなかつた過去を振り返る
 地蔵さま小銭へ笑みを絶やさな
 ささやかな善意小銭で集められ
 小銭さげバジャマが走る販売機
 松茸に躓いたのは浅い夢
 自慢話に松茸が持ち出され
 松茸の香りただよう門の中
 松茸に今年も縁がないかし
 人工松茸に頭ひねっている学者
 松茸の不幸庶民に見はなされ
 東京の嫁に誰りが解らない

静江 小一 貢範 蒼流 瑞枝 添南 静翁 妻江 君童 愚童 翠星 米艸 清志 博人 鳳々 雄々 昭二 操子 芳子 静恵 友子 多賀子 文子 久枝 舞丸 鶴吉 与根一 きみえ

喫茶店同じ訛りで花が咲く
訛りまだ抜け切れぬまま街に住み
帰省の娘京都訛りも悦に入る
やんわりと温い訛りのある夫婦
あかね色の湖を忘れぬ国訛り

尼崎おはま川柳会

春城武庫坊報

自慢する話二階から降りてくる

今に見る庭に自慢の菊花賞

火の用心コワイ煙の新建材

無理言いに来たのに煙い人が居る

大物が煙の中に入っているわさ

ウインドに秋を作って羨す

足早に北から届く秋の詩

秋茄子を別嬪さんが食べている

隣松茸我が家秋刀魚で秋の彩

秋風にしがみ付いてる蟬の殻

秋雨が平癒の記帳重くする

馬でさえ肥えるこの秋太らねば

淋しさをまぎらす花を活けている

粗大ゴミそれで男髭を剃る

運動会どんじり孫に声囁らし

財布には何時もお守りを入れておく

彼岸花過去を振り向く時おんな

山びこの空は答えぬままに澄み

綿菓子がふくらみ秋が深くなる

尼崎いくしま川柳会

春城

影か柳か惚れているから影だろう

野良犬の影くたびれた街にする

夫婦ケンカわびしい影が残ってる

従いて来る影が時には疎ましい

孤児の目にとっても大きな母の影

幸子 寿美子 巡歩 長三 町紅 六浦 十四郎 いわお 弘治 向西 美代子 紫香 夢之助 敏之 すみ 江美 保蔵 美智子 昌代 義嗣 歌子 武庫坊 和友 萬的 保蔵 諷云 幽芳子

妻というかけがえのない影法師
一線を引いて孤独な影法師
その影が西へ行くので寒くなる
鈴虫の影が平癒を記帳する
投げた餌にかり所帯を持たされる
直線の怒りへチャンス逃げてゆく
怒鳴らなくなった淋しい父の背な
怒られてなお燃えあがる青い恋
火消壺の中で怒っている女
シナリオの通りに生きている女
怒ったのは妻だけ知っている女
選ばれた一人を通す自動ドア
王様はお話が好き千一夜
フルムーン妻も私もサングラス
母も少しした女に戻る秋祭り
紅葉へお喋り好きな紙コップ
月愛し月の話が解りだす
一鉢の菊ではなしが長うなり
尖兵と菊の日の靴を光らせる
先を読む女で笑顔絶くさない
栗のいがまだまだ続くと嫌
甘菜を上手にむいてくどかれる

吉川

壽美報

川柳を覚え余生を救われる

僕川報

弓削の里カッパの皿に迎えられ

石橋を叩いて一生運もなく

やんわりと貴方の力にくるまれる

民謡を覚え日本の地理を知る

連の蝶も朝露コロコロたわむれて

夏終り葉も短い暮らろす

サギ草が風に吹かれて飛び立った

一郎 園歩 紫香 武庫坊 作二郎 みち子 春子 英子 静夢 白漢子 伊三郎 正坊 杜的 正一 定人 久美代 かね子 歌子 朝子

栄えある日母は小さく大きくて
あなたは男私は女平行線
ジャンケンに負けたあなたとが皿洗う
あのうたあなたにそしておとちやん
あれだけあなたにおやおや影がない
あなたとは深いえにしの糸結び
どれほどの痛さ耐えたか丸い石
齢と共に痛み色が深くなる
痛いところ突かれて酒がますますなり
過去聞えは痛みが走る彼岸花
ステップを踏んで昔をとりもどす
差別するどんな踏み絵もたぬ主義
どこでどう踏み違えたか離婚劇
麦踏んだ感触残る足のうら
踏んきりがつかぬ男の無精髭
六方を踏んで敵地の中に入る
女の道踏みはずさず今があり
あなたたし慣れず気楽と意地を張り
頂上を踏んかかかげる日章旗
一蓮托生あなたと乗った泥の舟

淑子 美子 美津子 昭子 白木 道子 三子代 はつ子 義一 シメ子 弘子 和子 悦子 寿美 僕川 孤秀 金吾 紀代志 芳男 庚子郎 孝平 やす たま

御主人がお留守と聞いて長居する
 亡き夫の側に逝きたい時もある
 台風の来そうな愚痴は喉で止め
 叱られた孫の一理も聞いてやり
 恍惚の前に遮断機据えておく
 肩書へ顔と名刺を見くらべる
 派手かしら着たり脱いだりまだ迷う
 妥協して女素直な顔になる
 賑やかなパーティー余韻抱きしめる
 一点が合否を決める鍵となり
 此の娑婆で夢を売ってる宝くじ

川柳たけはら
 かあさんとかぼちゃのケーキつったよ
 ごめんなさいけんかをしたらあくしゅする小一步
 ポストにもいろんないろがあれはいい 小二千
 日曜もほんとお母さんいそがしい 小二孝
 とうさんがやつぱり一番こわいんだ 小三昌
 いいことがたくさんあるぞ新学期 小四裕次郎
 運動会かけっこがでいやだなあ 小四裕次郎
 お友達みんな元気気で二学期へ 小四孝
 とても可愛い花を見つけた帰り道 小五視
 おこずかいはさんしそいで使えない 小五晴
 授業中ねむたいけれどねむれない 小五品
 先生のかみなり落ちるような声 小五慶
 運動会最後練習がんばるぞ 小六由博
 じいちゃんにお金をちよつと借りてくる 中三亜貴子
 男一人ネクタイ締め旅に出る 蘭幸
 とてつもない話どこまで信じよう 静水
 古伊万里に値段は無くしてそれでよし 蒨居
 朝の法座コスモスが迎えてくれる 麻代
 夕立にうつちやりを食う予定表 勲

黒を着て出る日の多し夏盛り
 後五分勝負どころで雨が降り
 しんがりに息子帰京で盆終る
 おそ植えの豆もどうやら花をつけ
 相槌の返らぬギヤグが宙に舞う
 声をかけても知らぬ顔するおじいさん
 子育てが済みこれからを置いて逝き
 一人読む手紙は箱に温めて
 盆踊り母の浴衣がよく似合う
 仏前に歴史期間のあるお菓子
 人間の歴史の中の血の匂い
 病む窓へ虚しく風も秋の彩
 朝の光へキリリと総身引きしまる
 カラオケもお隣さんの許可貰う
 おしゃべりもなく一日の長いこと
 秋夜長モーツアルトに恋をする
 サープ権だけは女房に渡されぬ
 一年の早さほろほろゴマを刈る
 気がつけば踏絵ばかりの道となり
 秋の雲湧けし風を連れくる
 遮断機がしらぬうちに気が変り
 同じ神様にライバルも願うだろう
 どんぐりころころいつもとよはいてくねす
 千ばつよ冷夏よ自然には勝てぬ
 父と子のキャッチボールにある詩心
 歩一逆転劇を信じ切り
 日本の真裏で四つの脱皮かな
 義理という字が消えている若い辞書
 蛇口止めふと虫の音にやすらぎぬ
 子が育ち蟬殻に似た暮しぶり
 浪人の気軽さぶらり旅に出る

喜美子
 俊夫
 雪枝
 千年枝
 静佳
 ヤスエ
 浪子
 喜久恵
 八重美
 君枝
 静風
 千恵
 栄恵
 愛子
 光子
 淑子
 節夫
 房子
 政己
 笹舟
 一路
 太虚
 比呂子
 静火
 白狐
 笑子
 康子
 博子
 貞子
 美佐雄
 新造

まだ九十四よ自分に聞かす励ましよ
 川柳高知
 川竹
 松風報

台風のように帰った盆の客
 盆に若さが戻る趣味の道
 一ランク上の暮らしを見て帰り
 ベタベタと塗って私はまだおんな
 脇役が無難なほうへ手を挙げる
 ベッドから首が落ちて熱帯夜
 傷ついた辛さを知っている無口
 八月の日本は風化してならぬ
 爽やかな風に会いたい髪洗う
 検校の結果塩分気にかかり
 和裁して一家支えた座りだこ
 孫一人嫁との溝に橋をかけ
 一人住む平均寿命過ぎた母
 万一を想うひとりの長い夜
 美しいひとの悲しいひとり旅
 三面鏡今朝の化粧が乗ってこず
 悲しみもよろこびも知る座りだこ

岸和田川柳会
 植山
 武助報

孫と子の対話に心洗われる
 奥入瀬にストレス消えて流れ雲
 花ごぞひまごの片言きく長寿
 元首天皇が作られていく寒い秋
 薪能夜空に浮ぶ天女の面
 バイトして少し世間の汗を知り
 ダイエット秋の味覚が邪魔をする
 年金が多趣味を見る難しさ
 快い疲れが甘い夢を見る
 爽やかなスズ虫の音に弾むペン
 古傷を妻にチヨクチヨク突つかれる

シゲヨ
 かす子
 竹萌
 康子
 佳風
 和広
 紅雨
 俊枝
 淳枝
 恒玲
 一求
 功
 和興
 節子
 幸泉
 朱坊
 松風
 富志子
 葎美子
 紀久子
 タン吉
 狸村
 一弥
 春榮
 希久志
 武助
 甘平
 通彦

傷口を癒す酒量が増すばかり

傷ついた蝶包み込む花の芯

傷口をなめ合い生きる夫婦独楽

傷を持つ同士が晴れて結ぶ縁

古典芸へ心弾ませ薪能

古傷にさわるも過去がしやべり出す

履歴書のためにきかれる向う傷

胸の傷独りになると疼きたす

過去は過去今は真面目な汗に生き

大原川柳社

小林

妻

迷惑なよそのつぶてが飛んでくる

使ひ捨て年よ止めと昼の月

月下美人ラストの主張は吞んでいる

三百号先師の重み踏みしめる

里の唄唄うて今日も夕焼ける

限られた命と知った闘病記

故郷の母は味覚の秋に酔う

余白には本音を吐いている日記

きょうも繰る明日へ続く糸車

一球のミス敗北というみじめ

コスモスの揺れて平和を主張する

蟻の列続く怠けてなどいない

古里の灯りを繋ぐ子が誇り

陽の光浴び変身の蝶の舞い

育つ樹へ万の想いの年輪や

あてもない流れに乗った木の葉舟

検診の列に並んで考える

中秋の月へ夫と酌むグラス

三面鏡こちらへ向けば背がすねる

鈴虫がりんりんん励ます挫折感

島の蟹みな喪に服し啄木忌

みのる

ひで

浪速子

こう

さよ子

初太郎

白光子

勝晴

ゆづる

あすなろ

正子

ひでの

寿恵子

みさえ

睦子

こふゆ

敏子

正己

巴子

たけよ

悦子

妻子

辰江

理恵

元江

智泉

朝代

玉恵

みづえ

耕花

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

名も知らぬ小鳥に心はげまされ

休耕田お国へ奉公しています

観光客に経を読ませる大師堂

置手紙さえも残さず大胆に

大胆に徹した水の反逆よ

大胆なほうから先に売れてゆき

大胆な子の発想にうろたえる

父と子の対話に入れる角砂糖

原発をひやりとさせて飛行事故

角砂糖あえなく溶けたメロドラマ

大胆な筆に余白も生かされる

行間を埋すめる役目角砂糖

山陰合同銀行句会

土橋はるお報

チームワークで開いた五輪の花

百足競走チームワークでくすれない

勝利とはチームワークがよいことだ

チームワークの色をちよびり替えてみる

駕籠かきのチームワークをまねてみる

息ひとつもれず亀井の太鼓鳴る

チームワークがっちり決めた村おこし

チームワーク男女の区別あるもんか

一丸となつて手に固め夫婦の人生譜

チームワークやさしい人と強い女

チームワークと名づけたはチームワークかな

太郎と名づけたはチームワークかな

どんぐりもチームワークでおしかける

辞令如きにチームワークを崩されぬ

川柳塔鹿野みか月句会

土橋

ポケットの穴ユーモアの顔だろう

衣食住足りて礼節欠けてくる

歳栄

ヒデ子

悦良

はるみ

鈴江

かつ子

聖子

恵美子

世似

民子

清泉

白汀

喜与志

幸枝

孝範

和子

小鹿

八重子

くに子

隆風

美千

房子

螢

諷人

智恵子

はるお

螢報

きみ子

豊子

鯉食へ夏の命をいとおしむ

食事の前に一度は神に逢っておく

前置きが長いおんなの電話口

新人類半人前が背伸びする

うぬはれの林檎が甘い声を出す

かぶりつき老優の息切れを聞く

霊泉と呼ばれて神秘めいている

語らずや泉は母の愛とする

満月に心の闇を照らされる

むかし話の途中でいつも眠くなる

かぐや姫うばいかえした月の暈

満月に丸い乳房を覗かれる

ストレスの果ての枕を裏返す

赤鉛筆を折ってストレスの底

おいとまをしてから永い立話

厳格な父にもあった艶ばなし

法話きく借りた命のありつたけ

枯すすき昔話の好きな風

鳥取の梨を話の種にする

廊下からひそひそ話すから癌だ

娘三人で結婚話 順不同

めおと話一雨ごとに濃くなる

雑魚の骨がとても堅くて噛めません

許される前に涙が出てしまっ

潔癖症の岩魚を追ってはかりいる

マニキュアの爪で魚にさわれない

口下手で魚の骨を砥めていい

柏手を聞き流しては池の鯉

少年に魚のとれる場所少し

富恵

日枝子

幸枝

伊都子

諷人

くに子

由多香

けんじ

汲香

房子

みさ子

花子

百合子

静生

荒介

としを

新正子

八重子

芙美

小美

はるお

智恵子

隆風

和子

螢

喜与志

美千

美千

盛桜

三孝

明報

藤井

むらくも川柳会

豊子

きみ子

螢報

土橋

川柳塔鹿野みか月句会

衣食住足りて礼節欠けてくる

ポケットの穴ユーモアの顔だろう

チームワークを崩されぬ

辞令如きにチームワークでおしかける

どんぐりもチームワークでかかると

太郎と名づけたはチームワークかな

チームワークと名づけたはチームワークかな

検診の列に並んで考える

あてもない流れに乗った木の葉舟

育つ樹へ万の想いの年輪や

陽の光浴び変身の蝶の舞い

古里の灯りを繋ぐ子が誇り

蟻の列続く怠けてなどいない

コスモスの揺れて平和を主張する

一球のミス敗北というみじめ

きょうも繰る明日へ続く糸車

余白には本音を吐いている日記

故郷の母は味覚の秋に酔う

限られた命と知った闘病記

里の唄唄うて今日も夕焼ける

三百号先師の重み踏みしめる

月下美人ラストの主張は吞んでいる

使ひ捨て年よ止めと昼の月

迷惑なよそのつぶてが飛んでくる

過去は過去今は真面目な汗に生き

胸の傷独りになると疼きたす

履歴書のためにきかれる向う傷

古傷にさわるも過去がしやべり出す

古典芸へ心弾ませ薪能

傷口をなめ合い生きる夫婦独楽

傷口を癒す酒量が増すばかり

傷ついた蝶包み込む花の芯

傷口を癒す酒量が増すばかり

傷ついた蝶包み込む花の芯

傷口をなめ合い生きる夫婦独楽

傷口を癒す酒

深迫いをする冷たい刃が光る
 一人居の月惜しみつつ雨戸引く
 旅で聴く異国の町の鐘温し
 鐘凍てて修行僧の白い息
 よく喋りますねえ揃いの紙バッグ
 竹人形の深い思いがたまる節
 何も無い二人を深くした噂
 文化論倉にコーヒー冷めてます
 秋祭り無心にさせてくれる鉦
 文化には縁無い男の穴馬券
 のほほんと夫婦の爪がよく伸びる
 イヤリング深い情けがまだ光る
 そむくほど空の青さが深くなる
 文化には遠いが青い空がある
 無口だがじんと感じる深い愛
 村人のドラマを沈め深いグム
 選挙用でない顔写真撮っておく
 ため息の深さは愛の深さかも
 子の家へ移る身辺整理する
 明治まだ脈々として皇居前
 三度目の妻も話せば同じ傷
 齢少し若く見られて背を伸ばす
 生きていくうちに戒名頂戴し
 ローカル線刈田に汽笛捨ててゆく
 風抱いて女の首は細くなる
 猫少し賢い顔で文化の日
 ハミングで新妻トイレを拭いている
 文化には縁ない紙を漉いている
 罪深い男も通す自動ドア
 文化映画で性教育の美しい
 アクセルを一ぱい踏んでいるスリル

園 歩
 トミエ
 はつ絵
 紀 雄
 萬 的
 武庫坊
 英 子
 伊三郎
 嘉 矩
 佳 秋
 年 代
 柳 影
 美智子
 正 坊
 静 子
 よし津
 てる

ふところの深さに女眼を閉じる
 考えてみれば世渡り下手でした
 鐘の音曇った空を這うように
 百八の鐘の余韻が身を責める
 移ろいややがて羅漢の背も石に
 脱サラが村に移って土と生き
 ぬえる鞍ならば笑いのしわにする
 御快癒の祈りがこもる鐘の音
 すいすいと湖面をすべる三井の鐘
 鉦太鼓叩くと燃える過疎の里
 チンドン屋の鉦は可笑しくまた哀し
 パスアール鐘つく時間も入れてある
 みをつくし鐘に案じる毛糸針
 群れとんぼ恋のささやき追ってくる
 退職で治った下痢と水虫と
 いさかいをして来た下駄は横を向き
 やつと来た山のお寺に小さい鐘
 京都塔の会
 片脚で立つ鶴だから絵にもなる
 見通しが立つて笑顔の戻る父
 立ってこらんと退院の日が決まる
 豆腐屋の繁昌嬉しい手を濡らす
 顔を見ただけで苦手の意識持つ
 よろこぶの涙で濡れて酒を酌ぐ
 濡れているその名は哀し捨南瓜
 聖書は苦手人間に完成はない
 何事もなかったように巡査立つ
 波風の立つたことなど遠き過去
 反省の心をのぞく白い花
 連獅子の衣装も重い果立ちどき
 イエスさま苦手でブザを無視しとく

みつ子
 曲ん手
 枯 梢
 俊 子
 高 子
 宣 杏
 森 子
 ただし
 保
 眉 水
 房 子
 勝 美
 市 雄
 蛮 拙
 善太郎
 紫 香
 杜 的
 杜 的
 よ志子
 求 芽
 花代子
 白浜子
 美智子
 麗 水
 メ 女
 紫 香
 静 代
 紅 陽
 京 童
 英 子

乾杯に立って背筋をピンと張る
 口が立ち過ぎて誤解の種を播く
 甲子園濡れてドラマがまた生まれ
 聞き上手のこつを覚えた夏の旅
 親離れ出来ぬ子と居る古時計
 膨らんだくすり袋の自負自嘲
 受話器置けば又ベルが鳴り夜が更ける
 なにもかも苦手が金を貯めている
 ホワイエが夜霧に濡れるワンカット
 罪流す雨だともい濡れてゆく
 立ち消えになった夫婦のマイホーム
 自動ドアの端を踏んでる立ち話
 ガンパレと道標が立つ登山靴
 頂点に立つて四面が楚歌と知る
 席を立つ潮時おとこ落ちつかず
 サークル檸檬
 浮草の今日も流れに逆らわず
 じつくりと力を溜めて柿実る
 速やかに流れに沿えない鮭もいる
 奥入瀬のしぶきに捨てた恋の旅
 一枚の紙が流れを変えて去り
 それぞれの思いを秘めて菊薫る
 刻は秋冬へ冬へと流れ出す
 雲さえも糸菊に似て天高し
 川柳かやま
 灯を消して明日を生き抜く的さがす
 針刺しに哀しく母の髪むむる
 大役を果たし着物ずり落ちる
 近づけば的が火を噴くこともある
 おめでとう言うてくれたは的だろっ
 着物着た女はおんな演じきる

圭坊
 飄云児
 芳 子
 達 子
 ただし
 幸
 美 穂
 三 求
 正 坊
 巨 詩
 白 李
 陽露子
 飛 鳥
 武庫坊
 水 客
 美 緒
 今日子
 千代女
 智恵子
 雅 子
 三 四子
 泰 子
 薰 風
 牛尾 緑良報
 武 雄
 鉄 治
 紀久子
 恭 子
 凡九郎
 保

働き蜂母の木綿がすりきれる
嫌な眼だ御召の値踏みする女
慟哭の彼方へ響く鎮魂歌

愛は哀 農民詩人からす瓜

野麦峠哀史も知らぬギヤルの群

哀しいがエンマが呼びに来る齡だ

木馬が回る哀しい愛を乗せたまま

哀れにも両手を突いてどっこいしよ

南海のフイナール哀し秋に消え

行間の哀しみ読んでくれる女

哀しみは女の性が夢二の絵

哀愁や女がおんな売りにゆく

母の背はおんなの哀の道標

性なのか乳房へ哀のうすくまり

下手な筆平癒を祈り記帳する

ばれている下手な芝居へ乗ってやる

そろばんが下手な名医の処方箋

下手だけど誤字の一つが見当らぬ

口下手も時にはうまい嘘を言う

おにぎりのいびつ真心籠めてます

高笑いバントマイムは下手だから

からす瓜熱れて溪間に灯をともし

下手な芝居に妻は拍手をしてくれる

八尾市民川柳会 飯田 悦郎報

読んだあと燃やせと書いてある手紙

恋知ってポストへ通う日が続く

丸文字で恋人だけにわかる文

彼岸花手紙は遠い西を書く

憎い男の手紙を胸に曼珠沙華

身の内の炎を知っている手紙

すし飯を作るうちわは孫が持ち

信秋

太茂津

照子

狂虎

愿

豊太

天彦

登志代

三男

萬的

幸

克子

寿子

光代

高夫

正博

稚代

英子

桂香

公子

緑良

良

悦郎報

みきお

晋吾

頂留子

元紀

晴生

みる子

和子

ばつてらが好きなどこまで親に似る
夜あそびのうしろめたさにすしを買う
全快という病室に寿司届く
さんますし秋の終りを告げてくる
盛り合せすしをはさんで老夫婦
おふくろのすしで始まる秋祭り
明日香路を柿の葉すしと拾う秋

曇る陽の街華やかに鼓笛隊
奥入瀬はうす陽に曇る秋の旅
じやがいもの花に曇ってくる明日香
曇る日は少し派手着て逢いに行く
曇天の湖で男をたぶらかす
一点の曇り捕えにレントゲン
首枷を漁師に時化のつづく海
果物のナイフは曇ったままでよい
ホテルから出てきた夫婦だと思っ
見晴しがよくて淋しさ増すホテル
夢のない女となって行くホテル
未来図を語るホテルは海光る
直木賞ここから出たというホテル
フロントの連れへ素早い目が走り
ホテルオークラ手洗い借りに寄っただけ
心踏む人で漫画はふみ絵読む
良心を出だめてふみ絵踏んでおく
踏みぬきの強さジョイナー世界新
踏んでいる大地が知っている歴史
説得に踏絵のスペア持ったゆく
足踏みをするだけ良心まだあった
花道の真ん中へんにある踏絵

華の乱おんな羅漢は夜が好き
河内 月子報

とみを
朝子
覚然坊
曲ん手
勝美
欣之
律子
しづ子
鯛牙子
比沙胡
三男
醉虎
白水
眉兔
柳伸
悦郎
重人
憲太郎
しんじ
シマ子
雅風
夕花
宏夕
美幸
雅士
恒明
甘平

恐山で先祖の罪を聞いてくる
遭難の海を見つめて鳴く千鳥
石一つヒマラヤに積み夢を持つ
肩書がとれて器の底が見え
大器晩成型と信じている二浪
耐えるのに馴れて砂文字も書かぬ
ゆるせない男を何度でも殺す
星空がきれいな夫の居ない夜
海昏れて海の男の海の詩
器から秋になつてる京料理
勝つ事の重荷を男持たされる
そして夜自分に勝ったあほらしさ
山を憶い山を信じている絆
山頂で海の化石と語りあう
花道が男の涙見てしま
確率が半々ならば船を出す
オキナワの砂が語れば凄かろう
砂つけた顔のまんまで子は寝入り
山彦を信じてお嫁さんになる
虫の音が私を焦す十三夜
火を噴いて山は男になりたがり
水鳥のななきを貰う羽ぶとん
盛りすぎた器ははける音がする
冷えてゆく女ともえける男
砂噛んで明日の作戦練り直す
六代目そっくりなどともてます
自転車も犬も乗ってる渡し船
夜行列車幸のせて修羅のせて
敦煌の黄砂仏の匂いする
街の灯が半円形の海に見え
窓際で父の器が堪えている

美幸

純枝

豊子

定雄

房子

紀美女

東雲

五月

金二郎

信子

孝子

一三三

美乙女

凡子

藤子

泰子

勝晴

さよ子

武助

栗

正子

度

重人

史好

慧梢

半銭

楓

小雪

あかり

かりん

五月

千月子

東雲

れい

紀美女

房子

定雄

豊子

純枝

恩を知る男一本道を行く
 バラは真紅男の背を見届ける
 つらいとき山ふところにもぐり込む
 大器ではないがどの子も親しい
 山に掌を合わせたこの駅に佇つ
 太鼓腹土俵の砂へ這くされる
 旅はつづいて船は日毎に重くなる
 母の掌にいびつな器だけ残る
 器の中にごろんと父が横たわる
 タイタニックも父の背も脆きもの
 一族を連れかる鴨のお引越し
 敵に塩送り男の貌をする
 愛の空白埋める男の胸がある
 弱虫の船は右向くくせがある
 男あり明日の為の杭を打つ
 九合目で戻る勇氣も大切に
 古傷を抱いた器を捨て惜しむ
 いちびりは仲間に入れぬ山岳部
 檀山へ行く裏金を貯めている
 鳥になって飛んでゆきたい丘がある
 砂のなまけを信じて亀は産みおとす
 砂の城男にストレスが溜まる
 そんな補償で不甲斐ない船溜り
 思案が弾む真夜中の花の種
 船出する悲喜こももに海のいろ
 一家離散じつと見ているつばめの巢
 夜とひる顔が違っていたカラス
 お隣のご主人さまと見る星座
 羽はたきを確かに聞いた神隠し
 ふるさとの山にいのちの距離がある
 トローラーの意識が男から消える

眉水 洋子 和子 月子 峰越 早苗 峰彩 重比呂 信治 左久良 はつこ 喜代子 甘灯 素平 夏代 千代美 育圓 言人 幹齊 たつお 幸子 外吉 白兔 タケ子 富野 妙子 景子 藻介 作二郎 元紀

ふるさとを詰めた壺から鳩がとぶ
 百舌鳥鳴いて樟脳匂う通勤車
 高槻川柳サークル卵の花 河瀬芳子報
 打つ真似をして遠のいて眼で招き
 手拍子を打つことも馴れ酒の席
 秋の風真婦に打ち込むものがある
 父に叛いて父に打たれし柿の木よ
 折れたころよ頼打つ雨よただ歩く
 朝のドラマが軋む空気を埋めている
 牛乳屋毎朝出合う曲り角
 何事もなかった朝のむくげ咲く
 定年も朝は日課の髭を剃る
 なにかある妻がこんな早く起き
 立ち食いの蕎麦で戦士の朝になる
 また一人アイドルが逝き菊手折る
 大慌てする初孫の大ニュース
 刻々の病状敬語に言いよどみ
 タレントのニュースに尾ひれついて出る
 キヤスターの首すげかえる視聴率
 似たニュース続く地球が恐くなる
 遠いニュース宇宙経由でやってくる
 街は平和とニュースが眠い窓の雨
 孫の歯が生えたニュースで沸く茶の間
 株ニュース妻も鉛筆なめてくる
 新築に構わずつばめ泥運ぶ
 親の顔に泥を塗る子は昔から
 泥絵具剥けて南蛮寺は秋
 泥舟に乗らねばならぬ羽目になる
 地下足袋干す泥の匂いが陽をはしく
 泥浴びる勇氣で渡る丸木橋
 その泥は秘書にかぶせる金バッジ

夢成 俊夫 京童 よ志子 冬葉 作二郎 磯 俊子 武茂 静江 暢子 鬼遊 篤生 森子 越子 豊子 一郎 英子 あきら 如洲 白漢子 春風 猿杓 圭坊 正坊 庸佑 美智子 萬的

泥かぶる課長短い遺書を書き
 泥かぶる覚悟で仲裁買つて出る
 古い吉でものれない泥の舟
 泥臭い男の愛を信じよう
 子のためにかぶる泥なら買つて出る
 彼岸花見つけて母が弾んでる
 もう少し熟して落ちよ青りんご
 八十路行け今日も命がありました
 付きまとう箱へ妥協をせぬ募金
 焼茄子の香りに匂う嫁の笑み
 耳塚のいわれも悲し萩寂し
 ブラジルの蝶のみやげは哀しくて
 億の金出してこの家誰が買う
 振りかかる火の粉へ夫の傘を借り
 おしまいは私に回ってくる小言
 悪口はよそう老後は長いから
 あせるまい秋はゆっくり来るものを
 だし抜けに聞くと本当の齡を言う
 霊柩車色街いっきにすり抜ける
 ニュートンの原理か飛行機と落ちる
 胸の芯まで濡らして行った通り雨
 たくらみが歩くところ風の手臭し
 不器用で起きたりして手伝わす
 年金の枠で走りきたりころんだり
 けちの手を離れて小銭はつとする

と おる 正 泰 弘 栄 勝 一 房 子 節 子 多 賀 子 花 代 子 稲 子 栄 子 文 子 の り 子 惠 美 子 陽 露 子 百 合 子 真 笑 佐 代 子 杜 的 眉 水 紅 陽 紫 云 諷 云 見 し げ お 里 小 路 報 外 吉 憲 太 郎 美 津 枝 英 一

門限が来たと竜宮門を閉め
門限があるので恋はおもしろい
空っぽの財布思案が湧いてくる
空っぽの銚子をふって呼んでいる
ひと言が過ぎて傷口深くする
門限へ一蓮托生飲んでいる
門限を恐れて踊るシンデレラ
雑念を払う座禪を組みながら
空っぽも未練逆さのひと滴
空っぽに出来ない腹で胃が悪い
じれてはる頭のてっぺんからの声
恋愛専科に焦らせと書いてある
飲むとすぐ手術のあとを見せるくせ
風化せぬ戦の傷を隠し持ち
変な外人グサリと短い日本語
重い口短い言葉が波乱呼ぶ
短い紐つきたとして人間らしくなる
門限を過ぎると人間らしくなる
寄宿舎の灯は門限に守られる
空っぽの頭で長生きしています
空っぽの頭を叩く二日酔
ワイングラスいつまでじらす心算です
腹一杯食べたらふさぐ傷口さ
寸言の裏から長い貨車が出る
門限を破る楽して別れ道
身におぼえ有って門限いわぬ父
空っぽの苦だが脳が音をたて
空っぽの頭も時々知恵がわく
答弁はいつも善処のおえら方
炎天に並ぶ長蛇のバビリオン
蟬しぐれ傷に触れずに聞いている

廿平 正一 幸治 素灯 喜代治 曲ん手 壯之助 美乙女 小乙女 東雲 恒明 千代三 律子 萬的 悟郎 雀踊子 美幸 文秋 勝美 雅風 藤子 史好 度 柳右子 頂留子 白兔 眉水 深 雄次郎 作二郎

おいあなた短い言葉に籠る愛
門限をみんな破った日曜日
ふとんひつ被って傷口に蓋をする
孫連れて渡る信号短か過ぎ
門限に触れず勝利の美酒に酔う
空っぽの頭欲だけ残つてる
傷口を包む喪服が美しい
渋滞の車にじれる時刻表

富柳会
呑むほどに女に正座崩される
正座して送り迎えに出る女将
正座して我が人生をふり返り
お茶席で正座できない娘に育ち
窓際で青年の夢捨て切れぬ
青年の悩みバイクで吹っ飛ばし
正座でも土下座でもする立候補
雷がまともに落ちて来た正座
娘が居ない村で青年落ちつかず
正座させそれから叱る背の高さ
成功へ男人相まで変り
線香の匂の部屋で泊らされ
戦争が置いてあるのは父の部屋
温もりをいつでもくれる母の部屋

川柳大阪
幸せな男で死ぬる旗がある
目に毒なヒップ一段上を行く
公園の広さに馴れた赤トンボ
野球よりスタンドの恋気にかかり
高利貸し金が全てじゃ淋しかり
赤い実が幼い夢をさそう里
親父だと一喝できる座を保ち

池
森子報
市雄 花子 静枝 昭水 伊庭勇 田中勇 文次 富久一 美房 維久子 花梢 岳人 森子 重人 敏 喜醉 亮太 柳弘 正之

店員の態度が変る予算額
出無精の妻に憩いの庭がある
老骨も辞書もぼろぼろでも生きる
自分にまで彩塗るなんて止めなはれ
古希の日に彩り添える孫も居て
欲の無い画布を彩る霞草
縁起などどうでも二人は別れない
合格の縁起を担ぐ守り札
浴衣着てさっぱり湯上がりギョルみこし
ねまき着て浴衣に似せたわが人生
夏祭り仕立上りの浴衣掛け
浴衣着て幸せ感じ夕涼み
外人の浴衣姿や芸者富士
盆踊り河内音頭に浴衣の輪
秋茄子の彩に残暑がきつすぎる
黙殺という反撃で欠伸する
神仏が喜び給うだけの涼み台
石蹴りの遊びは無形文化財
あばら家に古い縁起が吊つてある
蹴るつもりだった女にのめり込む

膝障川柳
刎頭の友あり我が世あたたかし
筆談を友と交えた敬老会
無口には無口の友が来て笑い
愚痴言えは愚痴切る鉄持つ友よ
一病を吾が終生の友とする
人生の余白も楽し友あれば
土産無く友の門前素通りす
逢う日までイメージ楽しむ文の友
居眠りがつきそう悪友来ないかな

稲田 豊作報
しげお 雅巢 洛醉 凡九郎 河南子 与呂志 天平 寅々 哲流 哲とみ 三千雄 遊心 喜楽 純泉 笑風 希久志 鉄心 本蔭棒 比呂志 金太 美津留 豊作 承平 和江 たみ 一眺 柳春 みつる 文古 八恵子

久しぶり会えた友見て吾が老いを
友達と夜店を歩く親離れ

入院して並ぶベッドに友が出来
遠い遠い友より花の便り来る

友と共に手話を楽しむ日向かな
難聴は毎日話せる友欲しい

酒の友来たれば雨の日また楽し
川柳はびきの

二幕目の夫は食わねど釣り天狗
仏頂面笑いに変わる町議選

日本を素通りしてる金メダル
付き合いを断わる言葉見つからず

長老と言われ無冠で去る職場
黄が似合う女眩しいけど多情

吊り草に身体の不調を教えられ
連休の中日夫婦して掃除

日本新でも勝てぬ世界の厚い壁
古都の秋ロマン求めてシルク博

退院の報せ静かに秋すすむ
あの時のりんどうが咲く無人駅

潮風は別れを告げる夏の詩
年金の暮しに馴れた金木犀

单身赴任妻子の写真に語りかけ
病床の友と我が身を置きかえる

秋風で冷ややつことも縁を切る
なだめてはあと一匙を食べさせる

公園の中にそぐわぬ彼岸花
洋モクの名をたしかめる英辞典

会館から出館家から出たかろう
頓堀のネオンに若さとりもどす

明日から妻となる娘の背を洗う

行江

珍顔

みやね

三香

美乃留

進太郎

健一

敏報

満洲子

昇

利武

繁男

たけし

比沙胡

みつみ

かつこ

明日の事聞ってくれるな流れ雲
孫の手も借らず散歩の敬老日

朝市で紳士が買った海の味
フルムーン富士がこよなく美しい

老化した狸で尻尾かくせない
病妻を思う洗濯機が廻る

パラシュート五輪えがいて平和なる
タレントの私行に鶴の目週刊誌

帰省して思い切り使う河内弁
人工島青い海からむしろ旗

貧乏で明日を信じてばかりいる
女手に明日へ期待の寝顔見る

アベックの邪魔せんように走り抜け
意地捨てた時から背中丸くなり

その内に恐さが判る消費税
豊中もくせい川柳会

甘い酒思わせぶりなことを言う
シニガレース虞美人草が萎れそう

国民を甘く見ていたりクルート
青春の想い出甘いワイン好き

寺静か筆に自信がある写経
萩の寺萩が静かに揺れるだけ

秋祭り終って元の過疎の村
ほうずきを鳴らして山車の後を追

祭には帰っておいでと許してる
一揆の碑祭囃子を聞いている

ふる里の祭りお豆が煮えてます
お父さんの手打ちウドンも出る祭

女手が和気藹々と秋祭り
紙屑が風に舞ってる祭りあと

賀茂祭牛車の歩み時を止め

伴子

隆

重人

美代子

吐来

キミ子

健三

忠宏

胡村

ダン吉

希代司

三世

淳一

敏

正坊報

紫香

村祭する子食べる子すねてる子
激動の中に静かにコマ回る

静か夜に母は黙々葉を剥く
村は静かで柿の朱さが白壁に

苦勞さんご苦勞さんで済まされる
苦勞した蛾に平和な冬がくる

苦勞した蛾に平和な冬がくる
苦勞した蛾に平和な冬がくる

寿美子

楠曠

つえ子

作二郎

薫風

きく子

博史

しげお

典子

明光

武庫坊

福一

佳秋

楓云児

登代子

曲 hands

北上柳五郎報

進

拓治

博友

美親

美親

桃風

玉水

哲郎

健一

青銅

文平

浄美

12月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 看板・暮れる・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から カロリー・歳月・底	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から 洗う・貧しい・帰省・ゴール	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
堺川柳会	11日(日)午後1時から 文無し・盲点・もたれる・門	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川柳 わかやま	11日(日)午前11時から 長い・久しい・白・囁目吟	海南市中野酒造長久郎(酒蔵見学をします) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 忘年句会費 5,000円 投句料 60円切手3枚
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 忘れる・半分・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
富柳会	15日(木)午後1時から 手帳・天使・天狗	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)午後1時から 人妻・旗・蟹・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄 川柳部	18日(日)午後0時30分から 師走・雪・横	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒545 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 用地管理部管理課 廣井季雄 句会費・投句料とも無料
川柳 ねやがわ	18日(日) 正午から 針・悔・夢・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
南大阪 川柳会	19日(月)午後6時から 被害・身分・いらいら・理由	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 炭・滑る・正しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
川柳 東大阪	24日(土)午後6時から 急ぐ・惜しい・芋・ペン	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚

※南海電鉄川柳部は一時休部することになり、今回はサヨナラ句会となります。
また駒つなぎ川柳会は今月はお休みです。

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社12月句会

日時 十二月七日(水) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「渡る」

藤井一二三
神平狂虎選

「伝言」

春城 武庫坊選

「賑やか」

河内 月子選

「嫁」

西尾 栞選

席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「川香」「黒紫」

1月の本社句会は7日(土)

『夜市川柳』募集

第7回 「寿」 里 小路選

3句・締切 12月末日

第8回 「月」 田中好啓選

締切 1月末日

投句先 〒593 堺市場上緑町2-9-2

河内天笑方

堺川柳会

● 募 集 ●

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
水煙抄(10句)黒川 紫香選
愛染帖(3句)橘 高薫風選
茴香の花(3句・女性)小出 智子選
吟句 「枝」 上田翠光選
「昏」 川崎秋女選
「舞う」 真喜内 實選
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
水煙抄(10句)黒川 紫香選
愛染帖(3句)橘 高薫風選
茴香の花(3句・女性)小出 智子選
吟句 「触れる」 大林曲ん手選
「頭(あたま)」 城角鶏生選
「座る」 平田実男選
★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友
を限らず。

12月の常任理事会は1日(木)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十二年十一月二十五日印刷

昭和六十二年十二月一日発行

編集兼 西尾 栞

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二-10-1六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 661-1691 四番

振替口座大阪813336八番

電話 (06) 661-1691 四番

編集後記

☆今年も十二冊の雑誌を一度の遅れもなく出せたことは、編集スタッフの尽力のたまものと、ありがたく思っている。それも、多数の同人、誌友の皆様のご支援があれば、このように感謝申し上げます。

☆別項に発表の通り、西尾栗王幹が、秋の叙勲で木杯

一組を授与される栄誉に浴された。芸術文化の部門での叙勲は、川柳界に於ける六十年の活躍と貢献が認められたわけで、この上の光榮はない。文化の日の朝刊を見て感慨を深くした。これは、路郎先生や生々庵先生の時代には無かった慶事である。黒川紫香氏の尼崎市文化功労者の表彰ともども川柳塔社全体による喜びとして祝福申し上げたい。

☆原稿が輻輳して、前号に阿達義雄先生の「江戸川柳富籤志」を掲載出来なかったが、新春号から武玉川に關する新連載がはじまるので、今月号に二回分を同時

掲載した。混乱をお許し戴きた。

☆同志社大学の田中光夫博士のエッセイは、最近の川柳に足らぬ要素を指摘されている。「苦み」「辛口」との作品の性質の表現など簡明でありながら分かりやすく、訴える力がある。諷刺文学の権威者の立場からこれからも種々のご教示を願いたい。

☆竹内紫娟氏の「言いまわしの個性」の労作も終りに近づいたが、面倒な分析、論評に深くお礼申し上げます。☆会計室の方から頁数の超過の苦情を言われながら、今年も過ぎて行く。作品と物の調和に心を配っているのだが、力の至らなさを反省している。

☆東野大八氏の川柳の群像も身近な人たちが続くのでたのしみである。氏のご健勝をお祈りする。

▼お願いいたします。(薫)
▼米アラスカ北岸の北極海で、氷に閉じ込められた二頭のクジラの救出作業が、ニュースになった。鯨肉が好きだからいうのではないが、クジラを常食にしていた日本人として、前の捕鯨禁止処置など、生活的にも感情的にも納得できない。
▼別に悪いことをしているのではないから勝手だが、大膽な今回の報道は、どうだ、どうだ、こんなに動物愛護をしているのだぞと、ふさいでる目も耳も無理やり開けさせるような、いやらしさが見え見えである。世界の大国もこの程度かと思わないわけではない。
▼それをわざわざ、日本のあるテレビ局が、取材に出かけるとは何を考えているのかと言いたい。しかし、世の中は自分を含めていろいろな人間でなり立っているわけだから、一本調子にゆかないのは当然である。と悟ってしまったてはおもしろくない。

▼コメを買え、オレンジを買え、牛肉を買えと俳優あがりの大統領が演技をしてるのだ、と楽しく見せてもらえるだけなら身過ぎ世過ぎだと思えないこともない。「せつかく逃がしてやっても、エスキモーや日本人に捕獲される恐れがある」と、誤った報道解説をされ日本捕鯨協会は、アマソコミに対して否定のロールをしていく。そろそろおでんが恋しい季節だが、長生きをすればおでんにコロがない。心寂しい。(き)

▼十一月号から谷垣史好氏からのバトンタッチで本誌の整理の仕事を担当、今月号からこの欄の執筆も分担することとなった。新米で行き届かぬ点も多いと思うが、読者諸兄姉のご寛容をお願いいたします。
☆おりしも、私の尊敬する東野大八先生の連載「川柳の群像」の今月号に不二田一三夫が登場している。これも何かのご縁と書架から「川柳寄席」を取り出し、今は亡き先輩の面影を偲んだ。愚鈍な私の及ぶべくもない奇才だが、少しでも近づけるよう努力したい。☆定年退職するまで私は、週刊専門紙も発行する小さな出版社に勤めていた。新聞・雑誌・単行本・参考書など、さまざまな印刷物の編集を手がけたが、中でも雑誌がいちばん骨が折れたように思う。新聞はほとんど社内原稿だし、単行本は原則として一人の執筆者だが、雑誌には多数の人の多種多様な原稿が寄せられ、これを何とか型にはめて料理しなければならぬからである。

昭和四十二年一月九日 第一種郵便物認可
昭和六十二年十一月二十五日 印刷
昭和六十二年十二月一日発行 (毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻七三九号 川柳塔

十二月号

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的の小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



TEL641-0551

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

定価 五百円 (送料 五十円)